福　岡　市

東那珂遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第400集

1995

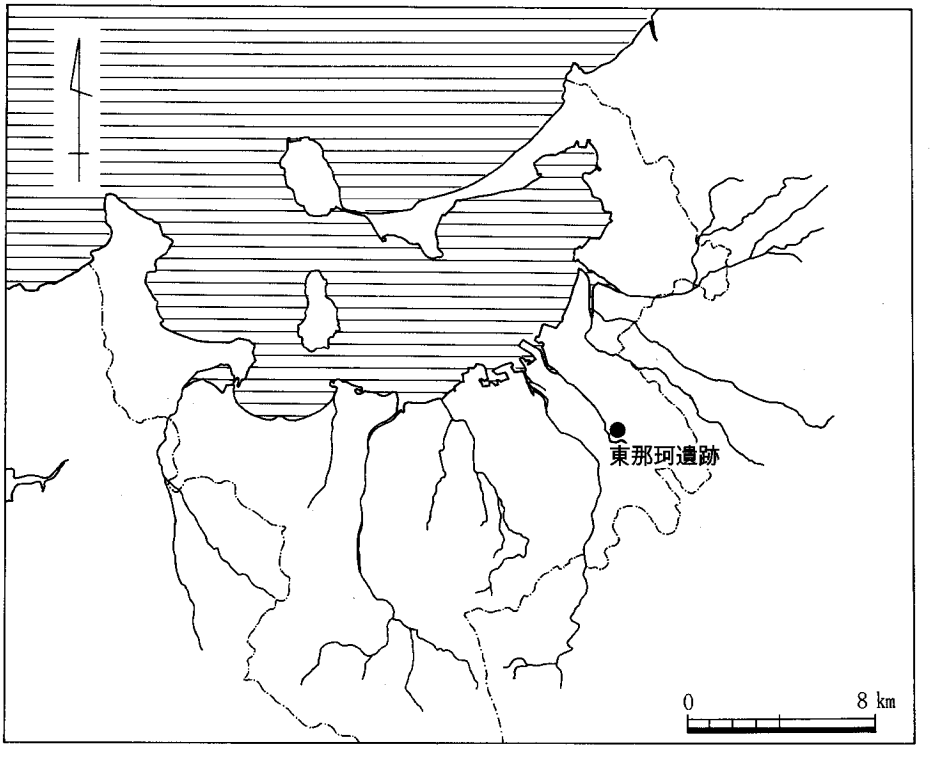
福岡市教育委員会

福　岡　市

東那珂遺跡 1

（ひがしなか）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第400集



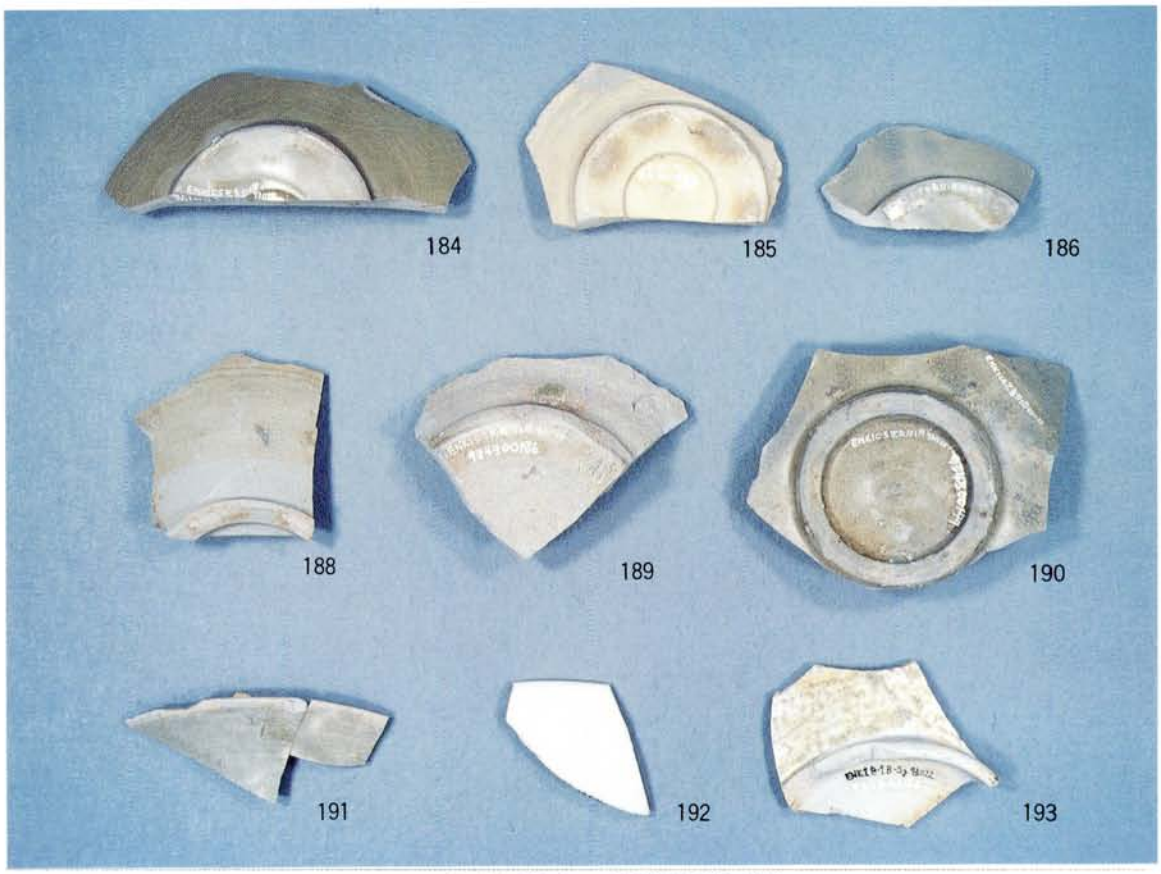
遺跡略号　ENK
遺跡調査番号　9343

1995

福岡市教育委員会

1．SC-01出土　青銅鏡

2．SK-04出土　越州窯系青磁



3．包含層出土　越州窯系青磁他

序　文

西日本最大の都市として今なお発展し続ける福岡市は、また古代より大陸の門戸として開かれ、豊富な文化財が眠る街としてもよく知られております。ところで、都市化と文化財の保護は相反するものではありますが、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりをめざし、これを子供たちに伝えていくことが現代に生きる我々の努めであると言えましょう。

本書に収めました東那珂遺跡は公団住宅建設のために消滅しましたが、この遺跡からは古墳時代や律令時代の集落などが発見され、また大陸よりもたらされた青銅器や陶磁器など貴重な遺物が数多く出土しており、大陸と福岡の深いつながりを再確認させてくれました。

最後に調査に際してご協力頂いた住宅・都市整備公団や関係者の方々、また本書の作成にご協力頂いた方々に深く感謝するとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は平成５年10月15日から平成６年３月15日にかけて福岡市教育委員会が行った、博多区東那珂１丁目423所在の東那珂遺跡第１次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は、住宅・都市整備公団九州支社が計画した公団住宅建設に伴う事前調査として実施した。
3．遺構はSB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居跡）、SD（溝、河川）、SE（井戸）、SF（道路状遺構）、SK（土坑）で表記し、遺構の種別を問わず検出順に連番号を附した。
4．本書に使用した図の作成は遺構を佐藤一郎、吉武学（福岡市教育委員会）、正林真由美が、遺物を吉武、田中克子が行った。
5．本書に使用した図の製図は吉武と田中が行った。
6．本書に使用した写真の撮影は吉武が行った。また、全景写真は㈲空中写真企画による。
7．本書に使用した方位は全て磁北である。
8．本書の執筆は遺物を田中が行い吉武が補足した。その他は吉武が行った。
9．本書の編集は吉武が行った。
10．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	９３４３		遺跡略号	ＥＮＫ　１	
調査地地籍	福岡市博多区東那珂1－423		分布地図番号		
開発面積	4150.42㎡	調査対象面積	4150.42㎡	調査面積	2400㎡
調査期間	1993（平成５）年10月15日～1994（平成６）年３月15日				

※本書の出土遺物の記述は、以下の文献中の分類に依っている。

土師器、須恵器……「大宰府条坊跡Ⅰ～Ⅲ」太宰府市の文化財第５・７・８集　太宰府市教育委員会1982～1984

製塩土器……森田勉「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢　下巻』1983

越州窯系青磁……田中克子「北部九州における越州窯系青磁粗製品について」『先史学・考古学論叢　熊本大学考古学研究室20周年記念論文集』1994

その他の輸入陶磁器・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』1977

※挿図では須恵器は黒塗り、陶磁器はアミで示した。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……1
3．調査の経過……1

Ⅱ．遺跡の位置と環境……3

Ⅲ．調査の記録……4
1．調査の概要……4
2．古墳時代の遺構と遺物……5
(1)竪穴住居跡 SC-01……5
(2)土坑 SK-06 ……6
3．古代の遺構と遺物……7
(1)道路状遺構 SF-50、SD-02・03……7
(2)溝状遺構……9
(3)井戸……11
(4)土坑……13
(5)木棺墓 SK-30 ……17
(6)掘立柱建物……19
(7)河川 SD-10 ……24
4．中世の遺構と遺物……26
(1)井戸 SE-28……26
(2)土坑……26
(3)水田遺構……26
5．包含層出土遺物……28
6．その他の出土遺物……33

Ⅳ．東那珂遺跡出土木製品の樹種　パリノ・サーヴェイ株式会社 ……34
1．目的……34
2．試料……34
3．方法……35
4．結果……35
5．考察……37

Ⅴ．おわりに……39
1．遺跡の立地について……39
2．弥生時代以前の東那珂遺跡……39
3．古墳時代の東那珂遺跡……39
4．古代の東那珂遺跡……39
5．中世以降の東那珂遺跡……40

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 2
Fig. 2　調査地点位置図(1/5,000) …… 3
Fig. 3　調査区位置図(1/800)、土層模式図(1/40) …… 4
Fig. 4　検出遺構配置図(1/200) …… (折り込み)
Fig. 5　竪穴住居跡(SC-01)、土坑(SK-06)実測図(1/40) …… 5
Fig. 6　竪穴住居跡(SC-01)、土坑(SK-06)出土遺物実測図(1/3・1/2) …… 6
Fig. 7　古代の道路状遺構と主な古代遺構配置図(1/400) …… 7
Fig. 8　道路状遺構(SF-50、SD-02・03)断面図(1/60) …… 8
Fig. 9　道路状遺構側溝(SD-02・03)出土遺物実測図(1/3) …… 8
Fig. 10　溝状遺構断面図(1/60) …… 9
Fig. 11　溝状遺構出土遺物実測図(1/3) …… 10
Fig. 12　井戸(SE-27・35)実測図(1/40) …… 11
Fig. 13　井戸(SE-27・35)出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 12
Fig. 14　土坑(SK-04)実測図(1/40) …… 13
Fig. 15　土坑(SK-04)出土遺物実測図Ⅰ(1/3) …… 14
Fig. 16　土坑(SK-04)出土遺物実測図Ⅱ(1/3) …… 15
Fig. 17　土坑(SK-04)出土遺物実測図Ⅲ(1/3) …… 16
Fig. 18　土坑(SK-08・11・22・23・37・38・44・46)、木棺墓(SK-30)実測図(1/40) …… 18
Fig. 19　土坑(SK-11・44)、木棺墓(SK-30)出土遺物実測図(1/3) …… 19
Fig. 20　掘立柱建物(SB-20・26・51)実測図(1/100)、柱根実測図(1/10) …… 21
Fig. 21　掘立柱建物(SB-52・54・55)実測図(1/100)、柱根実測図(1/10) …… 22
Fig. 22　柱穴出土遺物実測図(1/3) …… 23
Fig. 23　河川(SD-10)出土遺物実測図Ⅰ(1/3) …… 25
Fig. 24　河川(SD-10)出土遺物実測図Ⅱ(1/3・1/2) …… 26
Fig. 25　井戸(SE-28)、土坑(SK-12・19)実測図(1/40) …… 27
Fig. 26　井戸(SE-28)、土坑(SK-12)出土遺物実測図(1/3) …… 27
Fig. 27　中世水田遺構実測図(1/100) …… 28
Fig. 28　包含層出土遺物実測図Ⅰ(1/3) …… 29
Fig. 29　包含層出土遺物実測図Ⅱ(1/3) …… 31
Fig. 30　包含層出土遺物実測図Ⅲ(1/3・1/2) …… 32
Fig. 31　包含層出土遺物実測図Ⅳ(1/3) …… 33
Fig. 32　その他の出土遺物実測図(1/3) …… 34

図 版 目 次

巻頭図版	1．SC-01出土青銅鏡	2．SK-04出土越州窯系青磁
	3．包含層出土越州窯系青磁他	
PL. 1	Ⅰ区全景（上空から）	
PL. 2	Ⅱ区全景（上空から）	
PL. 3	1．Ⅰ区北半部（上空から）	2．Ⅰ区南半部（上空から）
PL. 4	1．Ⅱ区全景（南上空から）	2．Ⅱ区全景（南西から）
PL. 5	1．SC-01（東から）	2．SC-01破鏡出土状況
	3．SC-01破鏡出土状況近景	
PL. 6	1．SE-35（西から）	2．SE-35（南から）
PL. 7	1．SE-27（北から）	2．SK-30（西から）
PL. 8	1．SB-20	2．SB-26
	3．SK-04、SB-51・52	4．SB-54・55
PL. 9	1．中世水田遺構（北から）	2．出土遺物
PL. 10	出土遺物	
PL. 11	出土遺物	
PL. 12	出土遺物	
PL. 13	出土遺物	
PL. 14	出土遺物	
PL. 15	出土遺物	
PL. 16	出土遺物	
PL. 17	各遺構出土の墨書土器	
PL. 18	材の顕微鏡写真(1)	
PL. 19	材の顕微鏡写真(2)	
PL. 20	材の顕微鏡写真(3)	

表　目　次

Tab. 1　樹種同定結果……35
Tab. 2　用途別樹種構成……37

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

平成５年６月７日、住宅・都市整備公団九州支社（以下甲）から福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下乙）に福岡市博多区東那珂１丁目423番の「アーベイン東那珂（仮称）建設計画」予定地内における埋蔵文化財の事前調査依頼があった。申請地は福岡市埋蔵文化財分布地図に示された周知の埋蔵文化財包蔵地には含まれていなかったが、地形図に条理制の痕跡を留める地割が残っており、古くに水田化した可能性も考えられたため、乙は平成５年６月24日に試掘調査を行い、その結果、地表下約1.5ｍに遺跡の存在する事を確認した。その後、甲乙両者で埋蔵文化財の取扱いについて協議を行ったが、甲が平成５年９月の工事発注予定で進めていたため計画変更は不可能であり、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は甲の委託を受けて乙が行ったが、相次ぐ緊急調査に追われていたため充分な体制がとれず、結果として３人の担当者が調査の起承転結を分担する工程になった。調査に当たっては住宅・都市整備公団九州支社長と福岡市長との間に委託契約書を締結し、平成５年10月15日～平成６年３月15日に発掘調査を、平成６年度に整理報告書作成を行った。

2．調査の組織

調査委託　住宅・都市整備公団九州支社

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛

調査総括　埋蔵文化財課長　折尾　學
埋蔵文化財第２係長　山崎純男

調査庶務　埋蔵文化財第１係　吉田麻由美（前任）、西田結花

調査担当　埋蔵文化財第１係　浜石哲也、長家　伸（試掘担当）
埋蔵文化財第２係　吉留秀敏、佐藤一郎、吉武　学（調査担当）

調査作業　石屋四一、乙部武彦、志堂寺堂、鳥山幸男、中村米重、藤野保夫、村岡義浩、森本良樹、釜瀬真由美、佐々井恵子、久富花澄、福田友子、秋山温、荒木宏隆、井関鶴雄、鬼塚幸男、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、渋谷博之、高田勲、高田勘四郎、富永壽、西田昭、二宮白人、布巻和昭、萩尾行雄、藤田圭三、森垣隆視、森本勇夫、米倉国弘、金子澄子、唐島栄子、境フジ子、酒井康恵、正林真由美、杉村百合子、藤アイ子、成清直子、松藤ナツエ、松原高博、舌間三郎、高山和哉（順不同）

整理補助　田中克子

整理作業　安部国恵、有島美江、太田富美子、大神真理子、金子美穂、西　恵、長谷川知加子

3．調査の経過

当初の予定では発掘調査と建築工事を平行して行う工程であり、なおかつ排土処理を場内で行う必要があったため、調査区を２分割し（Fig. 3）、まず１期工事分である南側半分と建設事務所用地（東側）

部分の調査を行い、これをⅠ区とし、この終了後に2期工事分である残る北半分の調査に着手し、これをⅡ区とした。既に述べたように、3人の担当者が入れ代わり調査に当たり、まず吉留が表土除去等の初動の調査を、次に佐藤がⅠ区の調査を、最後に吉武がⅠ区の一部とⅡ区の調査をそれぞれ担当した。Ⅰ区の調査は平成5年10月15日～12月15日、Ⅱ区の調査は12月15日～翌平成6年1月20日に行い、その後3月15日までを土器洗い等の資料整理作業に充てた。なお、調査面積はⅠ区1400㎡、Ⅱ区1000㎡で、Ⅱ区については、包含層の調査を省略した。

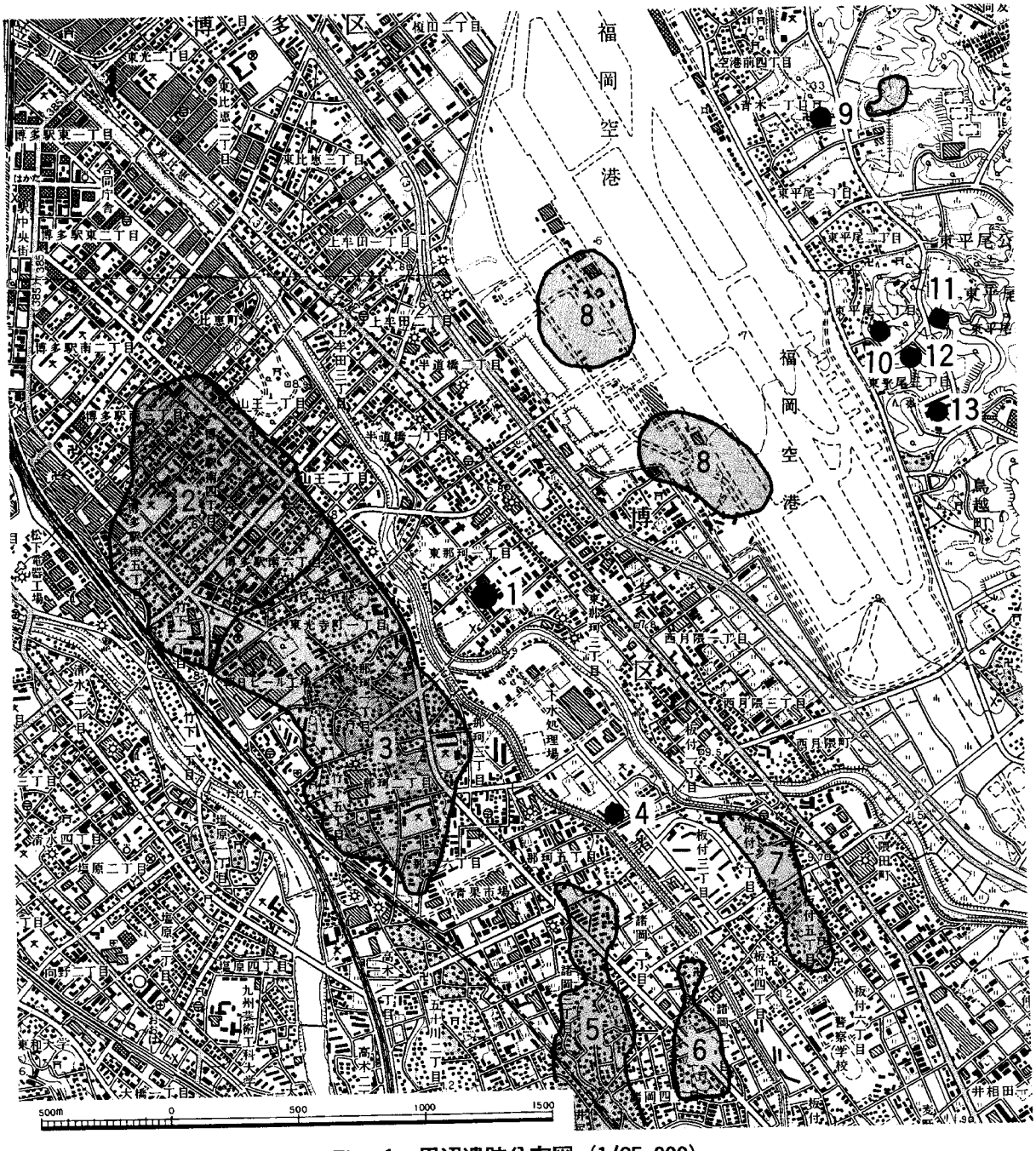


Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1．東那珂遺跡1次　2．比恵遺跡群　3．那珂遺跡群　4．那珂君休遺跡　5．五十川遺跡群
6．諸岡遺跡群　7．板付遺跡　8．雀居遺跡群　9．青木遺跡群　10．席田久保園遺跡
11．席田大谷遺跡　12．席田赤穂ノ浦遺跡　13．宝満尾遺跡

Ⅱ．遺跡の位置と環境

東那珂遺跡第１次調査地点は、福岡平野の中央部、御笠川東岸の沖積地上に位置する。遺跡周辺の地形は、那珂川や御笠川等の大小河川の浸食によって形成された中低位の段丘と、沖積低地によって構成され、段丘上に集落跡、墳墓などの遺構が、沖積低地に水田跡などの遺構が埋没していることが今までの調査で明らかにされている。東那珂遺跡はこのうちの後者である沖積低地上に立地し、現在は水田を埋め立てた宅地と化しているが、古地図によれば条理制の痕跡をよく留めた水田地帯であったことが分かる。国土地理院発行の２万５千分の１地形図では福岡南部の図幅の上から5.0㎝、右から21㎝に位置し、標高は現地表面で７ｍ強、遺構面で5.6ｍ前後である。

調査地点周辺の主な遺跡には、東那珂遺跡から御笠川を隔てて西側の段丘上に那珂遺跡群、南側には沖積低地上に那珂君休遺跡・板付水田遺跡を経て段丘上に板付遺跡、また、東側には地続きで雀居遺跡などの重要遺跡が密集している。いずれもかなりの調査が実施され、それぞれ詳細な報告がなされているので個々についてはそれに譲るが、このうち当遺跡の主体をなす古墳時代初頭と古代の主な遺跡を概観すれば、古墳時代は西側段丘の中央部に那珂八幡古墳が位置する他、周辺の那珂・比恵遺跡に該期の集落が広く分布し、近畿系の土器等が出土している。また那珂君休遺跡等で水田水利施設が確認されている。古代には東方の雀居遺跡や南方の井相田Ｃ遺跡、高畑遺跡などで集落跡が調査されており、人面墨書土器、墨書土器、木簡をはじめとする重要遺物が多数出土している。また、東に約250ｍ離れた東那珂遺跡２次調査地点（平成６年４～５月調査）でも古墳時代初頭の溝、平安時代の集落跡が検出され、周辺に当該期の遺構が広く分布することが明らかとなった。

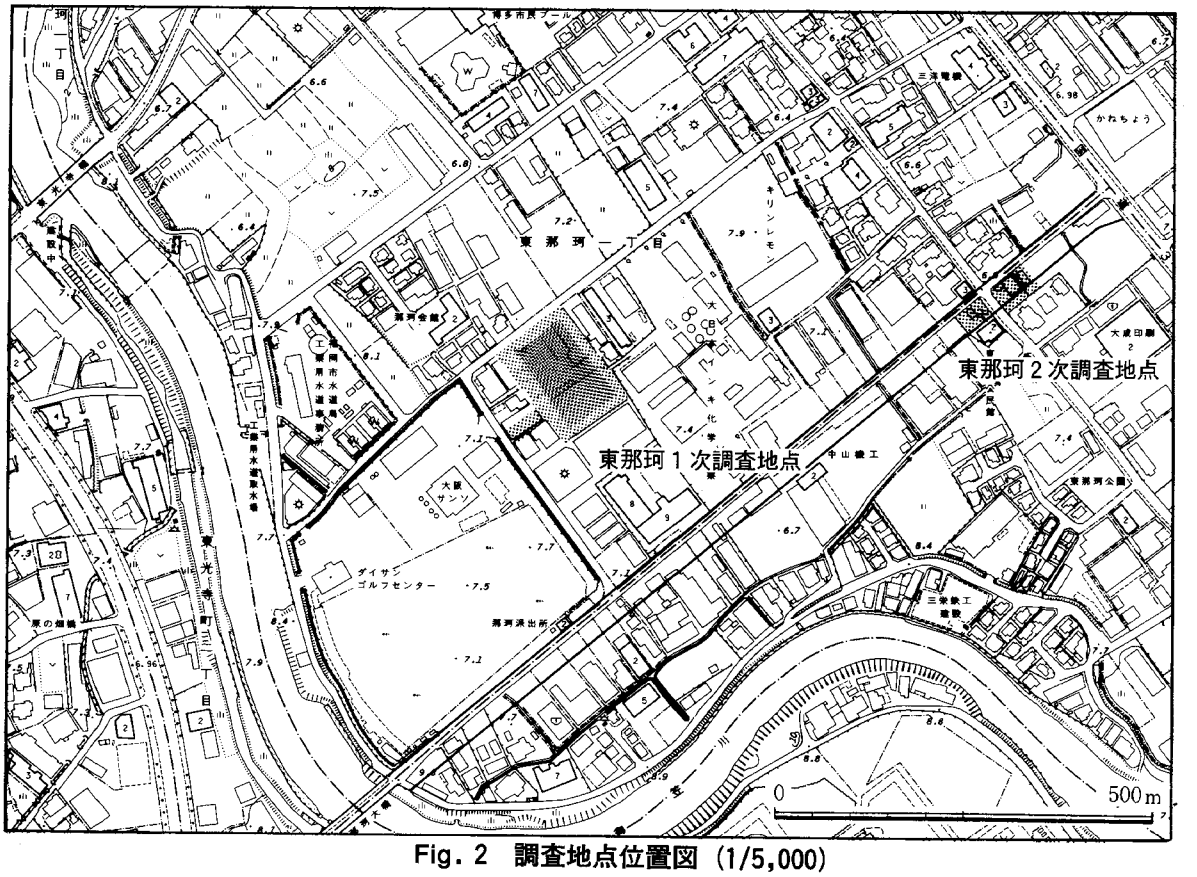


Fig. 2　調査地点位置図（1/5,000）

Ⅲ．調査の記録

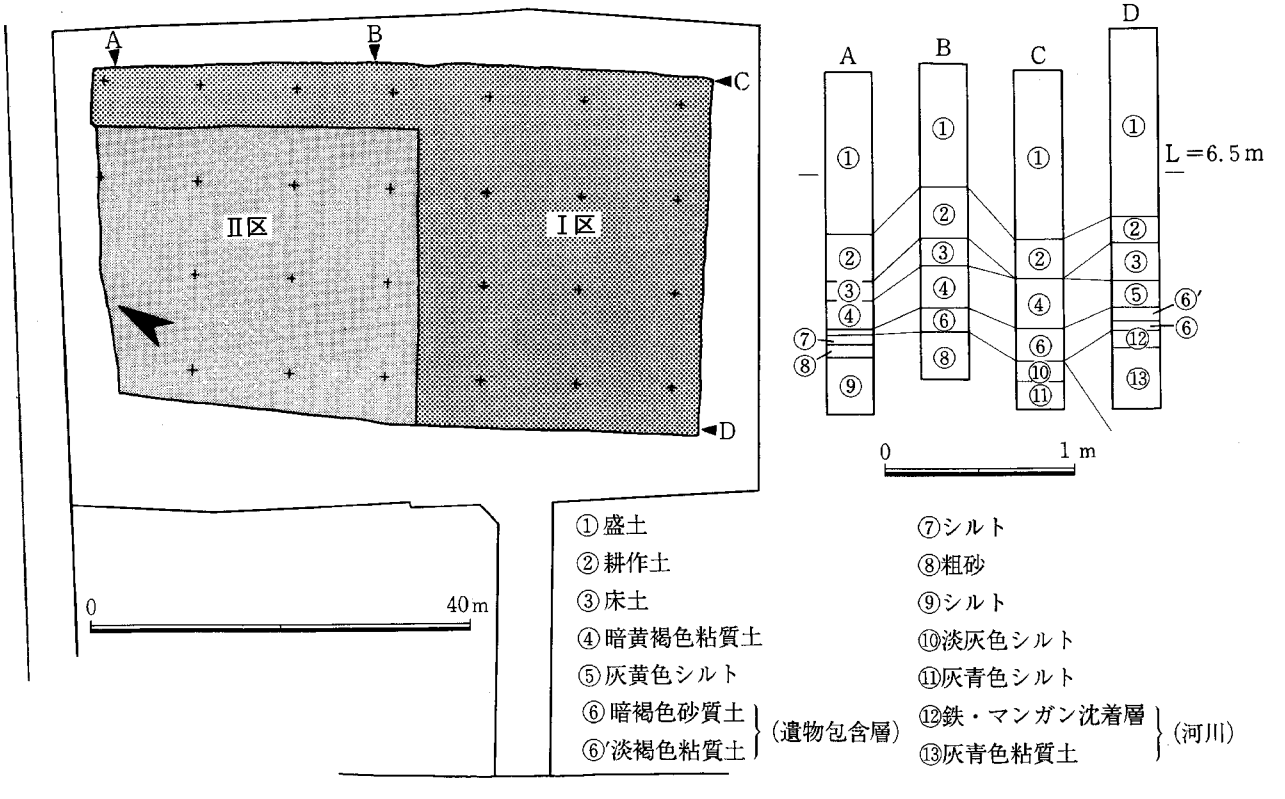
1．調査の概要

遺構は調査区の東寄りに密集しており、西側は緩く落ちて御笠川の旧河道内となる。検出した遺構は以下の通りである。

(1)古墳時代初頭の竪穴住居跡１軒、土坑１基を調査区の北東に検出した。竪穴住居跡は柱、炉などは不明だが、覆土から破鏡１点が出土した。単夔鏡の一種と思われるが、国内に類例は無い。穿孔している。当該期の遺物はコンテナ１箱程度。

(2)奈良時代末から平安時代初頭にかけての集落跡を検出した。検出した遺構は、道路状遺構１、溝状遺構多数、井戸２基、土坑８基、木棺墓１基、掘立柱建物６棟、河川１、及び包含層であり、他にも建物に復元出来なかった柱穴が多数ある。調査区の西半分を占める御笠川の古い河道はこの時期まで生きており、古代遺構は調査区の東半分でのみ検出された。道路状遺構は幅が0.8～2.7ｍを測り、両側に幅0.7～1.8ｍの側溝を掘るもので、路面は削平され残っていない。方位はＮ－９°－Ｗにとる。井戸のうち１基には木板を方形に組んだ井筒が残っていた。木棺墓は掘り方が長さ4.0ｍ、幅1.5ｍを測り、木棺の蓋及び底板が残っており、棺上に土師器２点が供献されていた。掘立柱建物のうち２棟は総柱、他は側柱のみの建物で、３棟の建物には柱根が残っていた。また、調査区のほぼ全域で、遺構検出面を覆う遺物包含層が確認された。

遺物はコンテナ約20箱分が出土した。包含層出土遺物が約半数を占め、主な遺物としては、「屎丸」「本」「八代」等の墨書土器、布目瓦、移動式竈、越州窯系青磁などがある。



Fig．3　調査区位置図（1/800）、土層模式図（1/40）

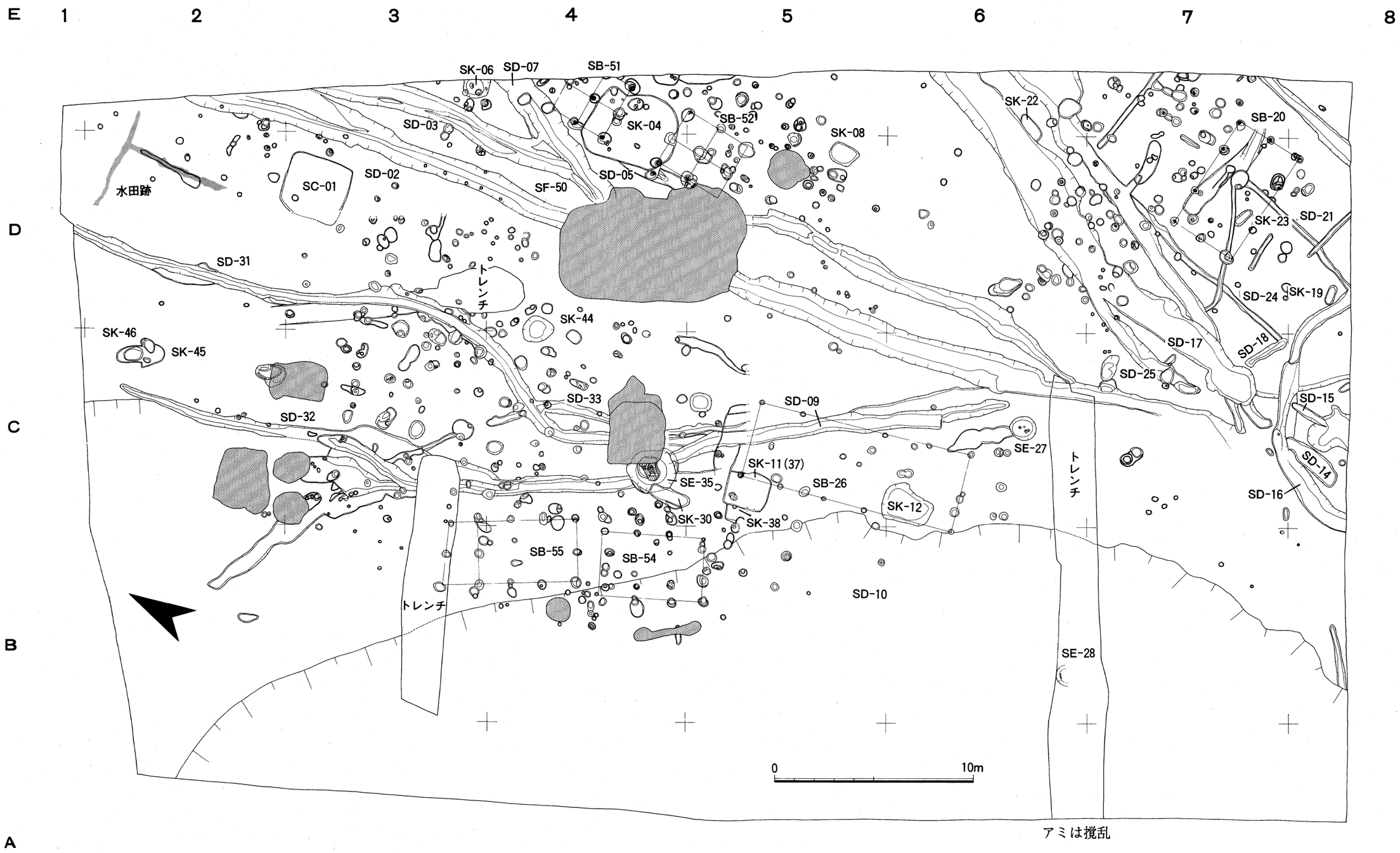


Fig. 4　検出遺構配置図（1/200）

(3)中世には当遺跡は水田化している。調査区西半の河川もすでに埋没しており、この上面から井戸が掘り込まれている。水田跡は調査区北隅に僅かにその痕跡を確認したのみだが、調査区全域に広がる古代の遺物包含層は水田化によって形成されたものと考えられ、おそらく調査区のほぼ全域が水田化していたものと思われる。中世の遺構としては、この水田と井戸の他、土坑2基を確認したのみである。中世遺物の多くは古代遺物包含層上面で出土しており、龍泉窯系青磁、白磁などがある。出土遺物から見て、水田の造営時期は13世紀前後と思われる。

2．古墳時代の遺構と遺物

(1)竪穴住居跡SC－01　Fig. 5 PL. 5

調査区の北東隅に検出した隅丸正方形プランの掘り方を持つ遺構で、残りは悪い。東西3.2m、南北3.3mを測り、壁の高さは0.1mに満たない。床面の北西よりに浅いピットひとつがあるが、主柱穴、貼床、炉跡のいずれも確認できない。住居跡と題したが、土坑に含めるべき遺構かもしれない。

床面のほぼ中央部で、青銅鏡1点が出土したほか、約80点の土器小片が出土した。

出土遺物 Fig. 6　巻頭図版-1　PL. 9-2

土器は土師器の他、須恵器2点が混入して出土した。土師器には甕、鉢などがある。甕は内面にヘラ削り、外面に刷毛目を施しており、タタキ目を残すものは無い。いずれも小片であり、図化できるものは1点のみである。1は土師器鉢で、半球形の体部に内湾気味に開く口縁部が付く。横ナデ仕上

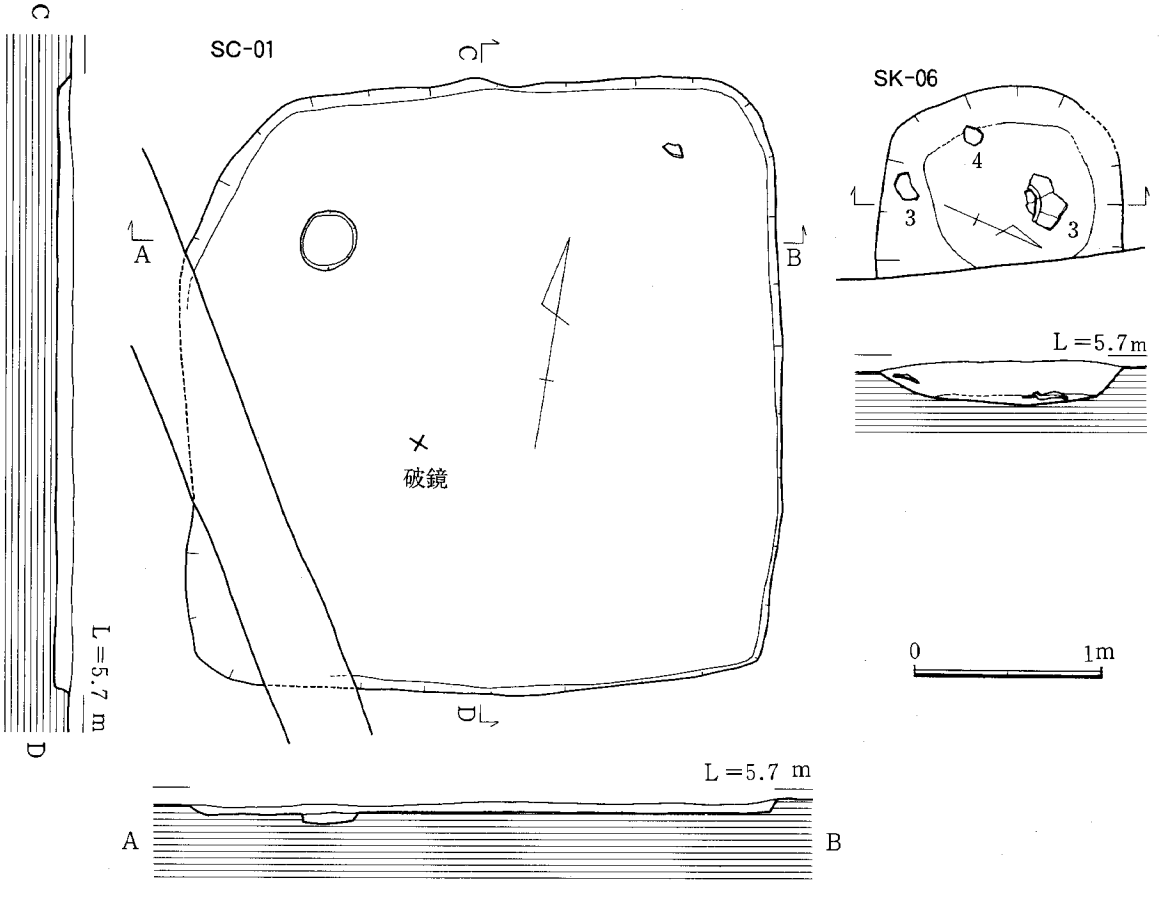


Fig. 5　竪穴住居跡（SC-01）、土坑（SK-06 ）実測図（1/40）

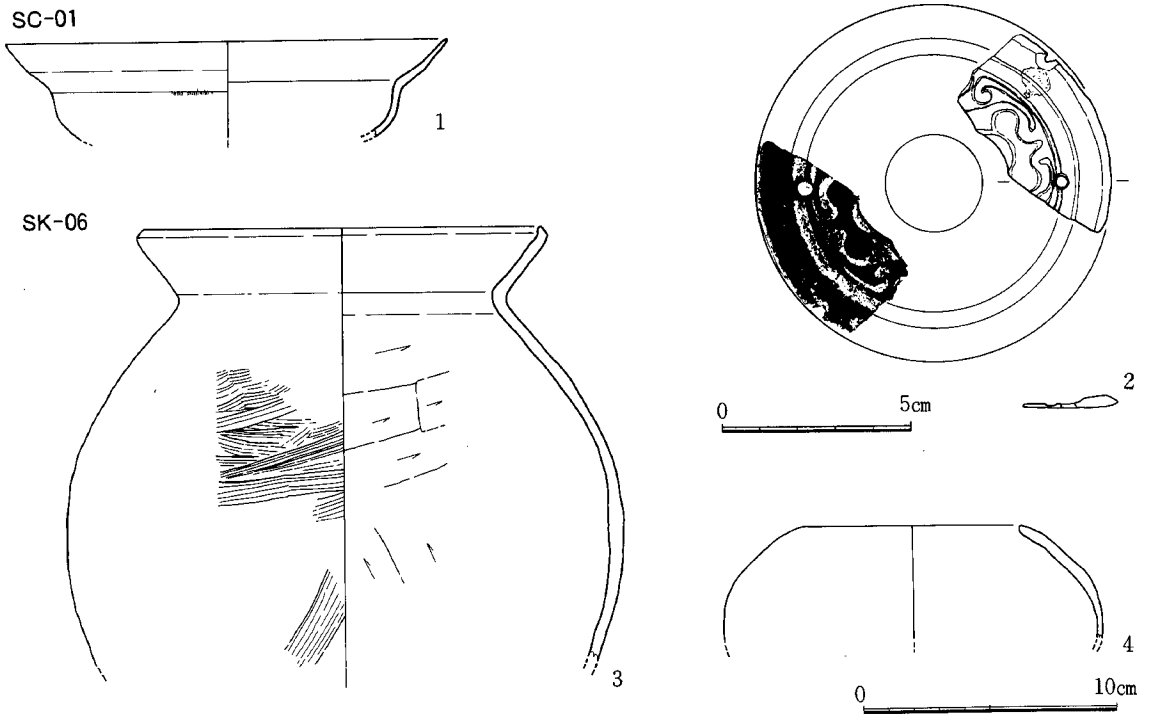


Fig. 6　竪穴住居跡（SC-01）、土坑（SK-06）出土遺物実測図（1/3・1/2）

げで、頸部に僅かに刷毛目が残る。胎土は精良で、焼成はやや不良である。口縁から体部にかけての1/8周ほどの小片で、復元口径は17.4cmを測る。２は青銅鏡である。鈕を取り除いた鏡を1/5程度に割った破片のひとつに相当する部分である。鏡の復元径は9.4cmを測る。割れ口を含めて全体的に少しすれており、１ヶ所に穿孔している。鏡面はほんの少し凸面をなしている。背面では鈕座から外区にかけての部分にあたり、鈕座の四葉の間に鳥文を配し、外区はやや内傾する平縁で、外端はやや尖り気味である。背面の一部に赤色顔料が残っており、本来鏡背全面に塗られていたものと思われる。鋳上りは非常に良好で、サビもひどくない。単夔鏡の一種と見られるが、国内に類例はない。成分分析は行っておらず、今後に託したい。

(2)土坑 SK－06　Fig. 5

SC－01の東に７m離れた調査区東壁際に検出した。東側は調査区の外へ伸びている。南北長1.3m、東西長0.9m＋α、深さ0.2mを測る皿状の土坑である。遺構実測図に出土状況を示した３点の土器は２個体分で、この他に８点の土器片が出土した。

出土遺物 Fig. 6　PL. 9-2

３、４は土師器である。３は甕形土器で底部を欠く。口縁は内湾して開き、口唇部を上方へつまみ上げる。胴部はなで肩で、胴部最大径は中位にあると思われる。胴部外面は上位に横方向の刷毛目、下位に斜方向の刷毛目を施し、胴部内面はヘラ削りしている。口縁部は内外とも横ナデである。胎土に細砂～径２mmの砂粒を含み、焼成は良好である。口径15.7cmを測る。４は無頸壺の口縁部片である。胴部は球形で、口縁部はそのまま丸くおさめる。器面があれており、調整は不明である。胎土は精良で、焼成は不良。1/4周を残し、復元口径は8.5cmを測る。

3．古代の遺構と遺物

(1)道路状遺構SF－50、SD－02・03　Fig. 7、8

調査区をよぎるような2条の溝を検出し、道路ではないかと考えた。しかし、溝に挟まれた空間は削平されており、路面を確認することができなかったため道路状遺構とした。方位は磁北より9°西に偏っているが、ほぼ磁北を基準にして造られているといってよい。この遺構は北側は調査区の外へ抜け、南側は旧河川SD－10によって削られて中途で途切れている。道路状遺構をSF－50、西側溝をSD－02、東側溝をSD－03とした。SF－50の幅は0.8～2.7m、SD－02、03を含めた幅は3.3～4.8mを測る。調査区内で確認した長さは47mである。溝はともに横断面形はU字形で、SD－02の幅は1.0～1.8m、SD－03の幅は0.7～1.6mで、ともに深さは0.3m前後である。SD－03は北側の掘立柱建物SB－52の西側で浅くなり、SB－51の西側では一部途切れ、建物への出入りの便を計っている。また、SB－51の北側には北東へ枝状にのびる溝SD－07があるが、これはSD－03に先行する溝であり、切り合っている。溝の覆土は上層は暗褐色粘質土、下層は砂質土である。遺物は全て側溝内から出土しており、路面からは遺物は出土していないが、溝出土の土器から見て、8世紀後半～末にかけての遺構であると思われる。

SD－02出土遺物　Fig. 9

出土遺物は少なく、土師器と須恵器が全部で25点出土したのみである。ほとんどが細片で図化できるものは少ない。5は須恵器坏cで、口径17.8cm、器高5.5cmを測る。底部と体部との境はシャープで、高台はやや内側に貼付する。6は土師器甕の底部の破片である。内面は不定方向のヘラ削り、外面は刷毛目調整後、ヘラ削りを施す。

SD－03出土遺物　Fig. 9　PL. 10

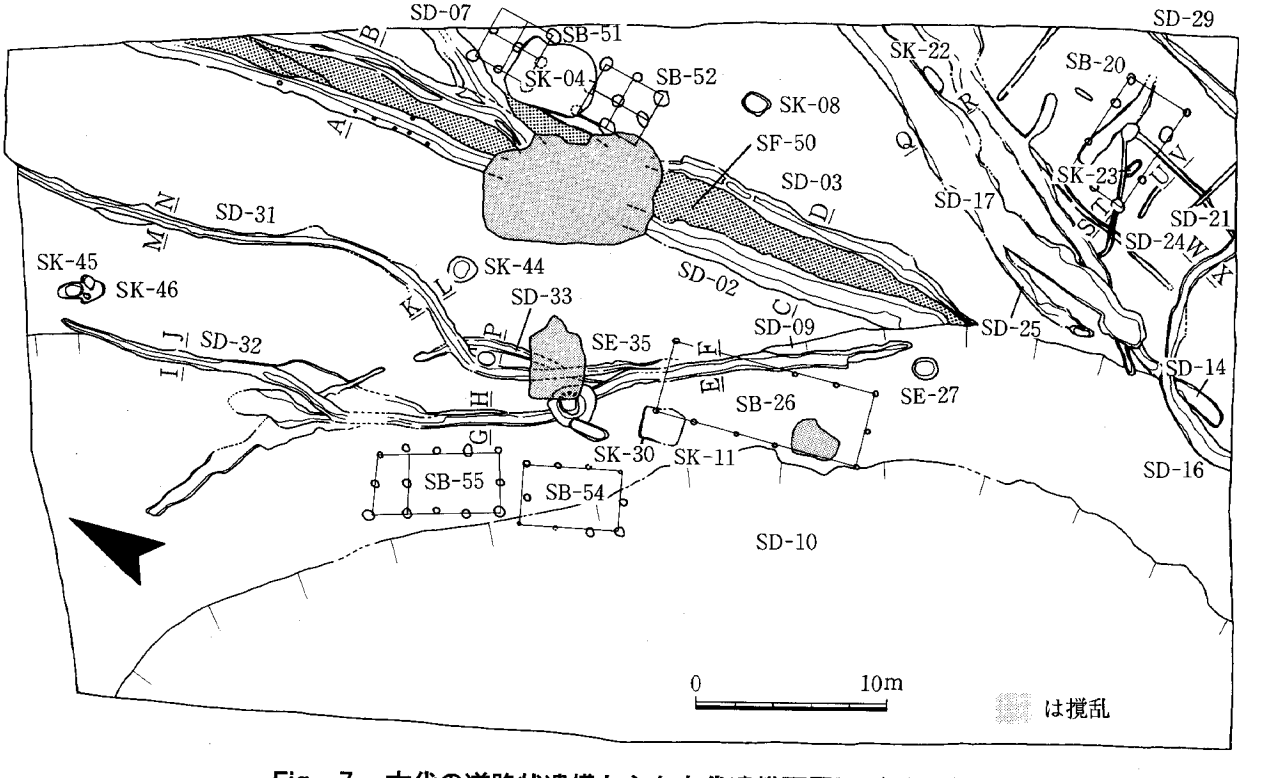


Fig. 7　古代の道路状遺構と主な古代遺構配置図（1/400）

遺物はある程度まとまった量が出土している。須恵器、土師器の他、竈、焼塩壺、黒色土器A類坏a等があり、ほとんどが8世紀後半～末のものと思われる。7～14は須恵器、15～19は土師器、20は瓦、21は石製品である。7は須恵器坏aで、口径13.2cm、器高3.4cm、底径9.2cmを測る。底部はヘラ切り

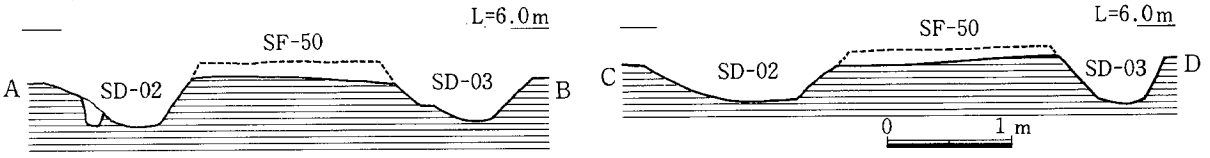


Fig. 8　道路状遺構（SF-50、SD-02・03）断面図（1/60）

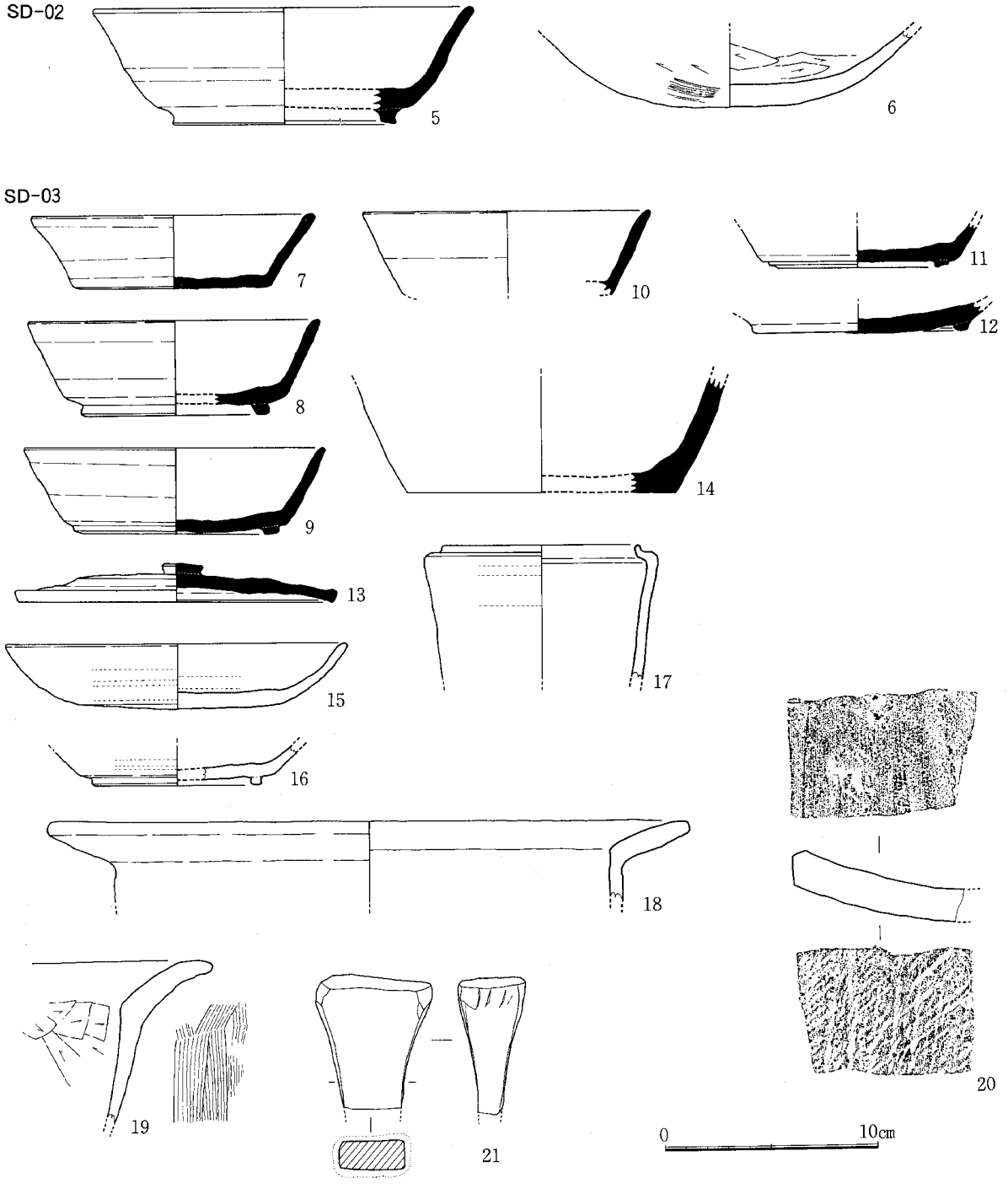


Fig. 9　道路状遺構側溝（SD－02・03）出土遺物実測図（1/3）

である。8～12は須恵器坏cである。8は口径13.6cm、器高4.5cm。9は口径14.0cm、器高4.0cmを測る。底部はヘラ切りで、高台は低く小さく、体部と底部の境よりやや内側に貼付する。13は須恵器蓋c3で、口径14.6cm、器高1.8cmを測る。天井部外面はヘラ切りのまま未調整。口縁端部の断面は三角形を呈するが、かなり退化しており、内面の屈曲のみ鋭く残る。14は須恵器鉢bの底部片で、底径は12.6cm。外面には回転ヘラ削り痕が認められる。15は土師器坏bで、口径16.0cm、器高3.1cm、底径9.5cmを測る。体部はわずかに内湾気味で、外底部は回転ヘラ削り、体部外面から内面にかけては雑な回転ヘラ磨きを施す。16は土師器坏cの底部片で、底径8.0cm。外底は回転ヘラ削り、体部内外面には回転ヘラ磨きを施す。17は土師器小壺で、口径9.2cm。外面口縁受け部以下は雑な回転ヘラ磨きを施す。内面は横ナデ調整。18・19は土師器甕で、この器種が最も出土量が多く、遺物の大半を占める。いずれも口縁内面の屈曲が鋭く、明瞭な稜線をなす。18は口径30cmを測る。20は平瓦の小片で、凹面に布目痕、凸面には縄目タタキの痕を留める。21は砥石である。石材は硫紋岩系か。中ほどから折れている。現存長6.4cm、最大幅5.5cm、厚さ1.3cm。全面に使用痕が認められる。

SD－05・07出土遺物

SD－05からは土師器片8点が出土した。坏、蓋などがあるがいずれも細片であるため図化していない。SD－07からは須恵器坏cの小片1点が出土したが同じく図化していない。

(2)溝状遺構

調査区の東半分で、幅が狭く浅い溝を多数検出した。これらは、調査区の西半分を流れる河川SD－10の河岸に沿って掘られた一群（SD－09、31、32、33）、調査区南西隅に集中する南北方向の一群（SD－17、21、24）、及び調査区南端で円形に回る溝（SD－16）の3群に大別される。

SD－09、31、32、33 Fig. 7、10

これらは旧御笠川河道と考えられるSD－10に沿って走る一群である。SD－10に流れ込む流路あるいはSD－10から導水するための水路である可能性もある。SD－31、SD－32、SD－33は調査区の中央部で集合してSD－09に続いており、本来同一の溝であったと考えられる。切り合い関係により、SD－33→SD－31→SD－32の順で掘られていることがわかるが、激しく変わる河川の流れに対応して幾度も掘り直した結果であろうか。溝は4条ともに横断面形はU字型で幅は0.7m前後、深さは0.1～0.2mを測り、覆土は黒褐色の砂質土である。出土遺物から見て、8世紀後半～末の遺構と思われる。

SD－09、31、32、33出土遺物 Fig. 11

SD－09からは須恵器片1点、土師器片13点、瓦片1点が出土したが細片のため図化していない。SD－31からは須恵器片3点、土師器片3点が出土したが同じく図化していない。SD－32からは比較的多量に遺物が出土しており、須恵器片10点、土師器片11点が出土したが、うち須恵器片4点を図化した。SD－33からは土師器片3点が出土したが図化していない。

24～27はSD－32出土遺物である。24は須恵器坏cで、口径12.0cm、器高3.9cm。体部は大きく外に

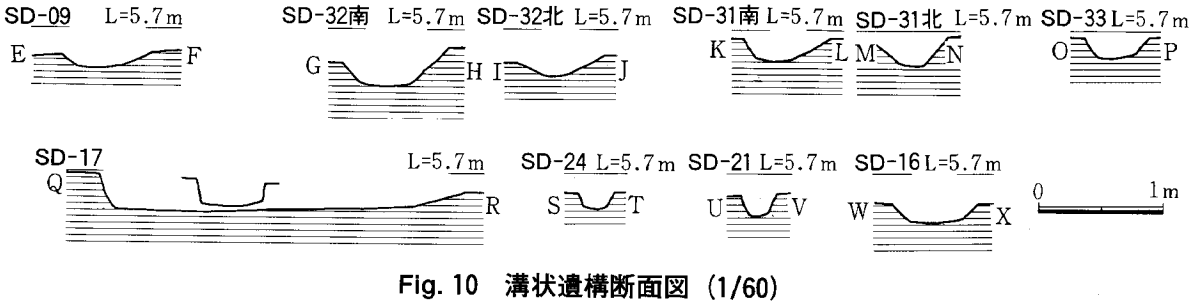


Fig. 10 溝状遺構断面図（1/60）

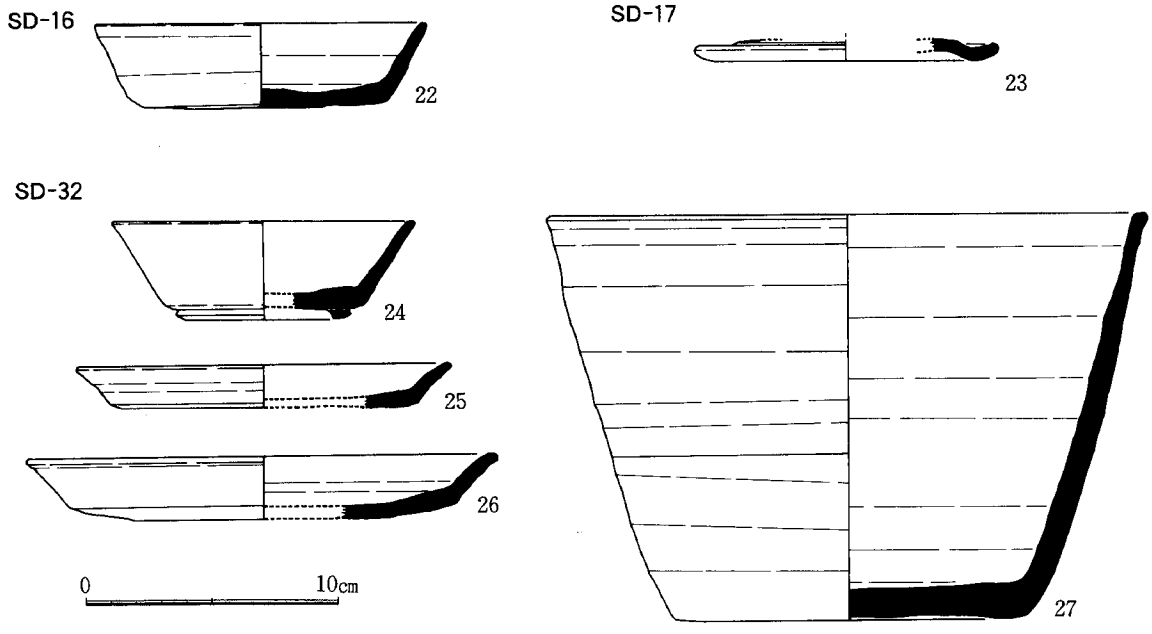


Fig. 11　溝状遺構出土遺物実測図（1/3）

開き、高台は低い。25、26は須恵器Ⅲａ。25は口径14.8cm、器高1.7cm、底径11.4cm。26は口径18.4cm、器高2.5cm、底径15.1cm。いずれも底部はヘラ切り離しのまま未調整。27は須恵器鉢ｂで、口径23.7cm、器高16.0cm、底径13.8cm。外底は回転ヘラ削り、体外面下半は横ナデ調整の後、回転ヘラ削りを施す。

SD－17、21、24　Fig. 7、10

調査区の南東隅に密集して掘られた小溝の一群である。

SD－17は南北方向に少し蛇行して流れる最大幅３ｍ、深さ0.3ｍ弱の浅い溝で、自然流路と思われる。SD－17からは８世紀後半～末の特徴を持つ土器が出土した。

SD－21、24は幅が0.3ｍ弱、深さが0.1～0.2ｍの小さな溝で、人為的に掘削されたと思われる南北方向の溝である。これに直交する同規模の溝もあり、掘立柱建物SB－20に付随する施設である可能性もある。

SD－17、21、24出土遺物　Fig. 11

SD－17の遺物の一部はSD－14、15、25の番号で取り上げており、古墳時代以前の土器が14片、古代の須恵器６点、土師器が22点出土したが、ほとんどが細片で図化できるものは少ない。23は須恵器蓋ｂ4で、口径12.0cm。天井部はヘラ切りのまま未調整である。

SD－21からは須恵器片１点、土師器片１点、SD－24からは土師器片５点が出土したが、図化できるものはない。

SD－16　Fig. 7、10

調査区の南端でその一部を検出した溝である。調査区南壁から出て、円形に周り、再び壁へ入っていく。幅は１ｍ前後、深さ0.15ｍを測り、性格は不明。

SD－16出土遺物　Fig. 11　PL. 10

須恵器片５点、土師器片85点が出土したが、細片でほとんどが図化できない。他に弥生土器片４点、

古墳時代須恵器片７点が出土している。22は須恵器坏ａで、口径13.1cm、器高3.3cm、底径9.5cmを測り、底部はヘラ切りで板圧痕が残る。

(3) 井戸

古代の井戸は２基検出した。２基とも河川SD－10の川岸から５ｍほど離れた位置に掘られており、比較的浅いが、調査区内は湧水が著しく、このような浅い井戸でも水を蓄えることが可能である。

SE－27 Fig. 12 PL. 7-1

調査区南半部分の中央に検出した遺構で、基盤土であるシルト層に掘り込まれている。井戸側は検出できなかった。掘り方の平面プランは南北にやや長い円形を呈し、長径1.35ｍ、短径1.2ｍ、深さは0.6ｍ強を測る。底面に近い位置でほぼ完形の土器３点が出土した（28～30）。

SE－27出土遺物 Fig. 13 PL. 10、17

遺物は土器30点が出土した。須恵器が２点出土した以外は全て土師器で、遺物の時期はほぼ８世紀後半～末のものに限られる。28は須恵器坏ｃで、口径12.6cm、器高4.4cm。体部は直立気味で底部との境は鋭い。外底の高台内に墨痕と思われるものが認められるが、磨ったような痕はない。硯として使われた可能性もある。29は土師器坏ｄで、口径14.4cm、器高3.6cm、底径7.1cm。体部はやや内湾して開く。外底は回転ヘラ削り、体外面から内面にかけては全面に回転ヘラ磨きが施される。30は土師器皿ａで、口径17.7cm、器高2.6cm、底径14.0cm。外底は回転ヘラ削り、体外面から内面にかけては横ナデ調整の後粗い回転ヘラ削りが施される。外底には「本」の墨書が残る。31は土師器焼塩壺で、淡い橙色を呈し二次焼成を受けたと思われる。外面には指頭痕が認められる。森田分類のⅡｂタイプと思われる。

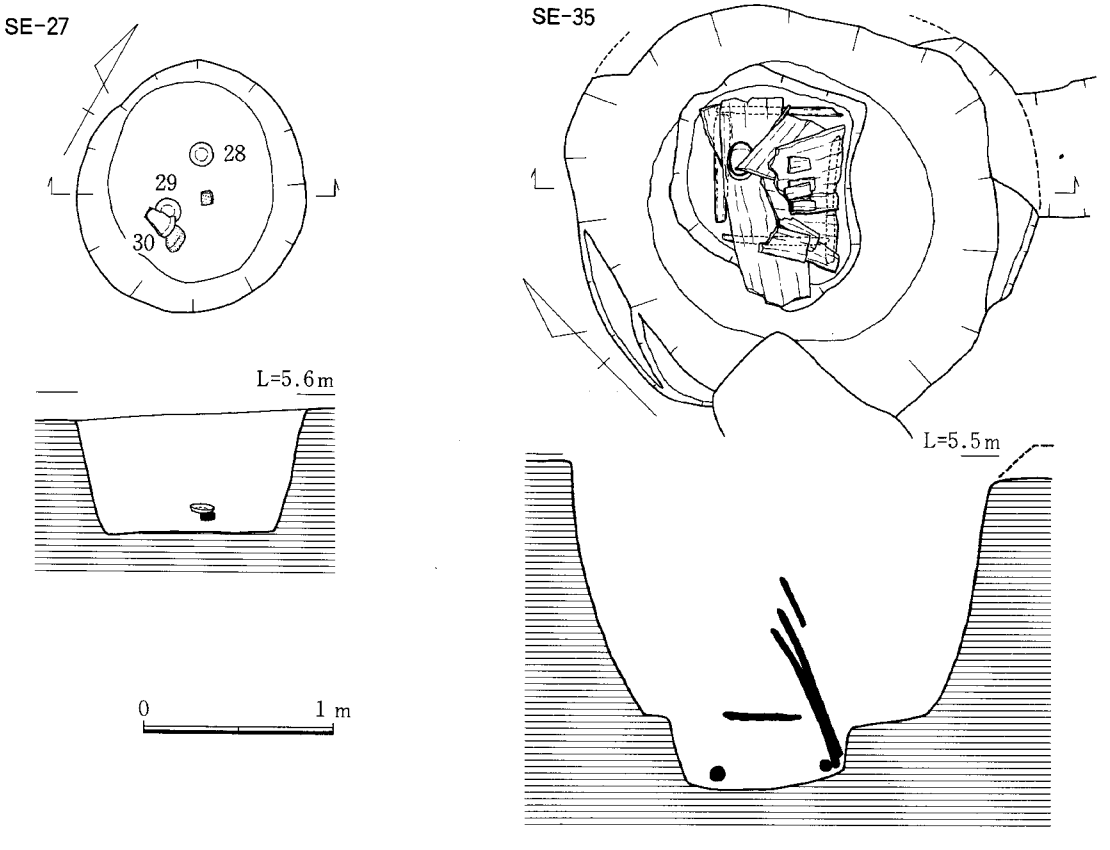


Fig. 12 井戸（SE-27・35）実測図（1/40）

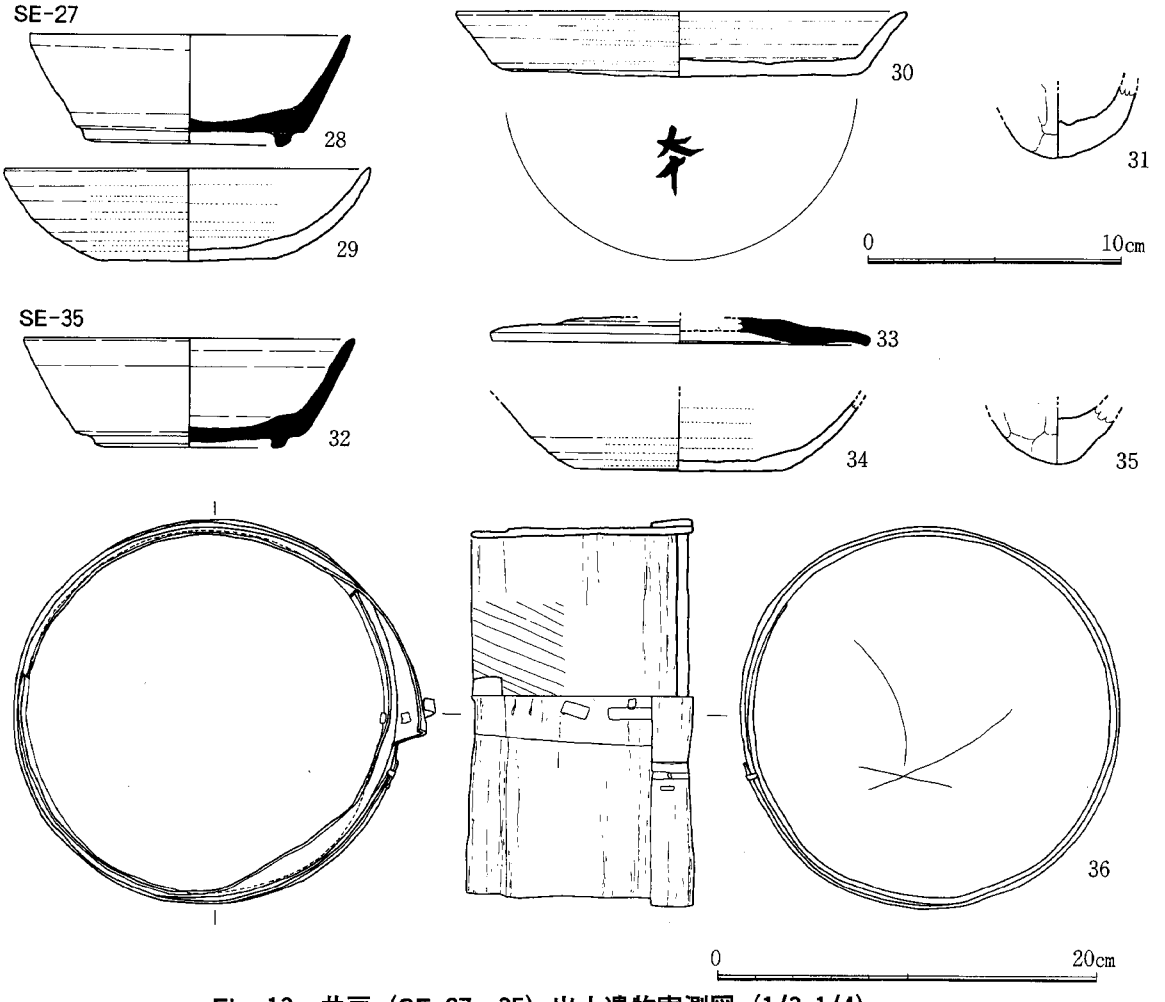


Fig. 13　井戸（SE-27・35）出土遺物実測図（1/3・1/4）

SE－35　Fig. 12　PL. 6

調査区のほぼ中央で検出した井戸で、木棺墓SK－30に切られている。井戸側には方形に縦板を組む。掘り方はやや南北に長い円形を呈し、長径2.5m、短径2.15mを測る。掘り方は深さ1.3mでいったん平坦面をつくり、底面の北側に寄せて一辺約１mの方形坑を掘り込み、ここに井戸側を組んでいる。井戸側の基底面には径６～７cmの丸木で枠を組み、枠の外側に接して縦板を立てる。縦板は東側と南側のみが内側に倒れ込んだ状態で出土しており、他の２辺の縦板は抜き取られたものと思われる。縦板は幅が30～40cm、長さ100cm前後のスギ材を用い、接合部分は重ね合わせており、下から２段目の一部までが残っていた。また、倒れた板材に挟まれた状態で曲物１点が出土した。

SE－35出土遺物　Fig. 13　PL. 11

コンテナ１箱分の遺物が出土したが、細片が多く図化できるものは少ない。土師器甕の破片が多く、井戸側内から土師器坏d、竈片、塩壺、須恵器坏片等が出土している。全て奈良時代のもので、８世紀後半～末に属するものと思われる。32は須恵器坏cで、掘り方内から出土した。口径13.0cm、器高4.3cm。外底はヘラ切り離し痕をハケ状工具でなでている。体部と底部の境はシャープで、高台はやや内側に貼付する。33は須恵器蓋$_4$で口径15.0cm。宝珠状つまみが付くものであろう。天井部は横ナデ調整。34は土師器坏dで、掘り方内出土。底径8.2cm。外底は回転ヘラ削り、体外面下半と内面には回転ヘラ磨きが施される。35は土師器焼塩壺である。二次焼成を受けて赤褐色を呈し、かなり脆くなっている。外面には指頭痕が認められる。森田分類のⅡbタイプに相当するものと思われる。36は

井戸側内から出土した曲物である。蓋の受け部があり、底面には「大」の線刻がある。

(4)土坑

土坑は8基検出した。うちSK－04が最も大型で、遺物もまとまって出土している。

SK－04 Fig. 14 PL. 8-3

調査区東壁に近い中央付近で検出した。掘立柱建物SB－51、52と切り合い関係にあり、掘立柱建物の廃絶後に掘られた遺構である。土坑は南北に長く、隅丸長方形を意識して掘られたプランと思われるがかなり歪である。南北4.5m、東西3.7mで、深さは0.15m程度である。土坑底面には浅いピットがいくつか見られるが、土坑より古いものかもしれない。

SK－04出土遺物 Fig. 15～17 巻頭図版-2 PL. 11、12

遺物はコンテナ3箱分が出土した。須恵器は少なく、土師器の甕の破片が多い。出土土器は9世紀初頭～前半の特徴を示している。37～41は須恵器、42～63と65～74は土師器、64は陶磁器、75、76は石製品である。

37、38は須恵器坏cで、器高は高く、高台は体部との境近くに貼付する。37は口径15.0cm、器高5.7cm。39は須恵器蓋3で、天井部はヘラ切りのまま未調整。内面に墨痕らしきものが認められる。口縁端部はかなり退化しており、断面形は明瞭な三角形を呈していない。40は須恵器皿aで、口径17.3cm、器高1.9cm、底径14.6cm。底部はヘラ切り離し。41は須恵器甕で、口径19.9cm。口縁は外反して開き、口縁部は肥厚させ、断面三角形をなす。42～49は土師器坏aで、口径は13.0～14.8cm、器高3.0～4.0cm、

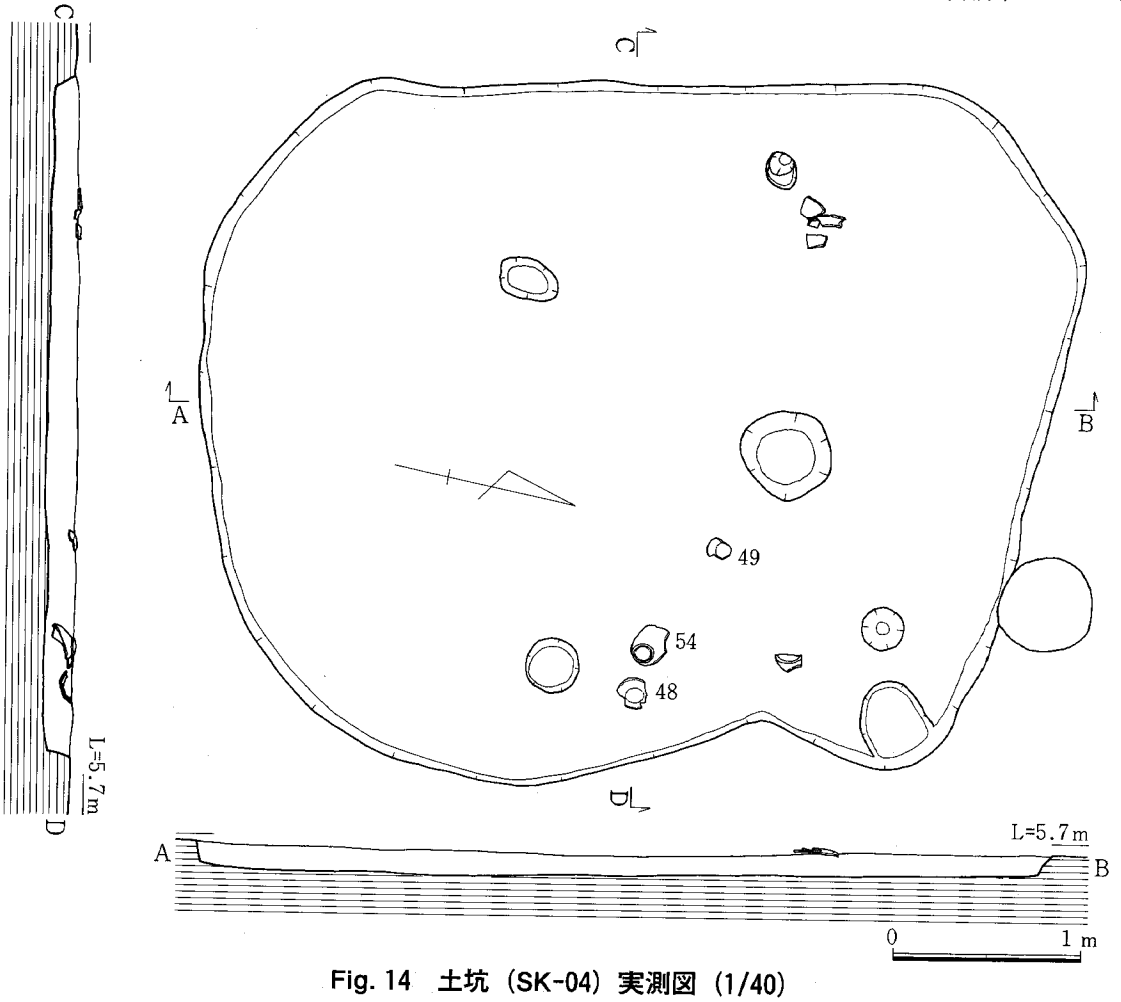


Fig. 14 土坑（SK-04）実測図（1/40）

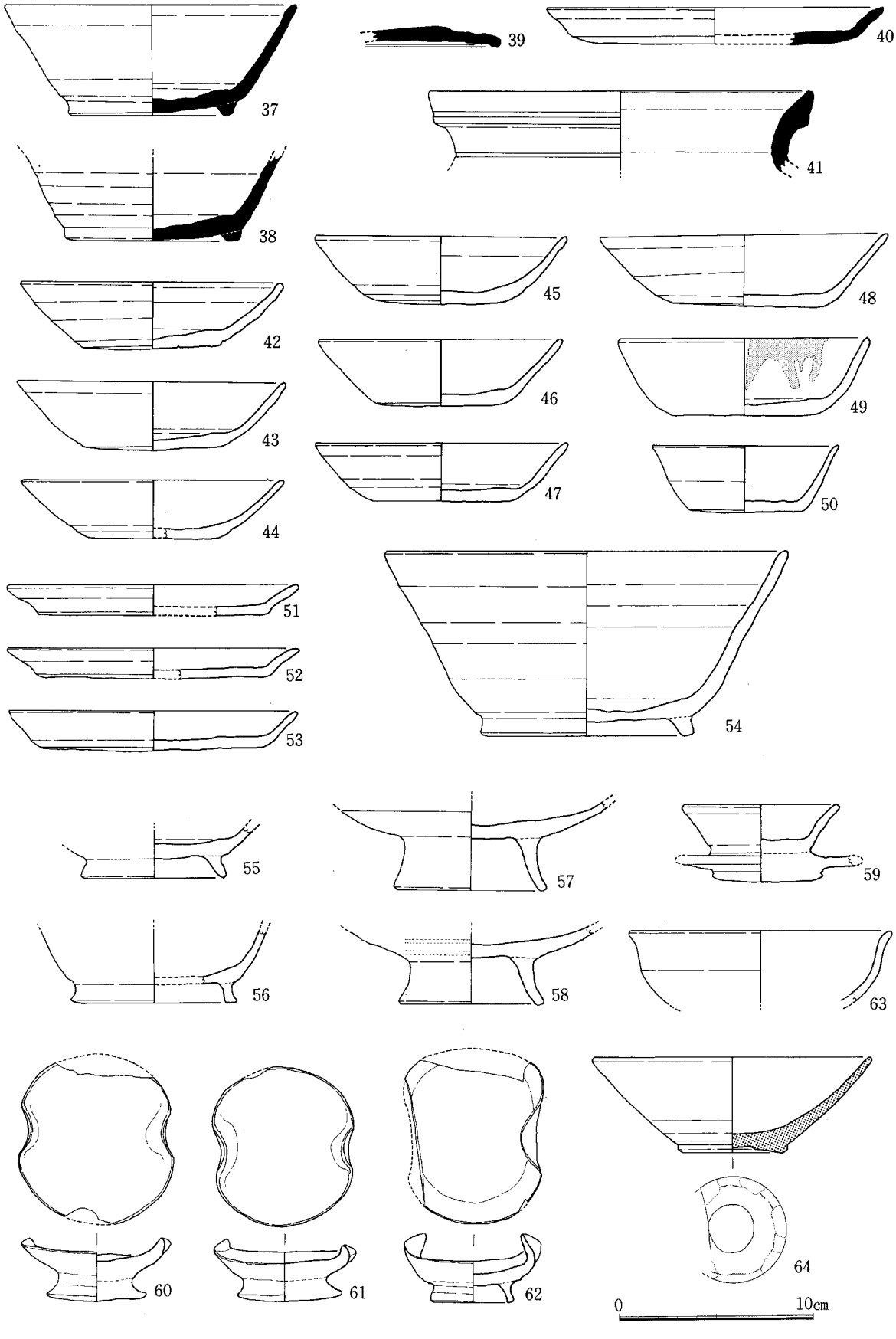


Fig. 15　土坑（SK-04）出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

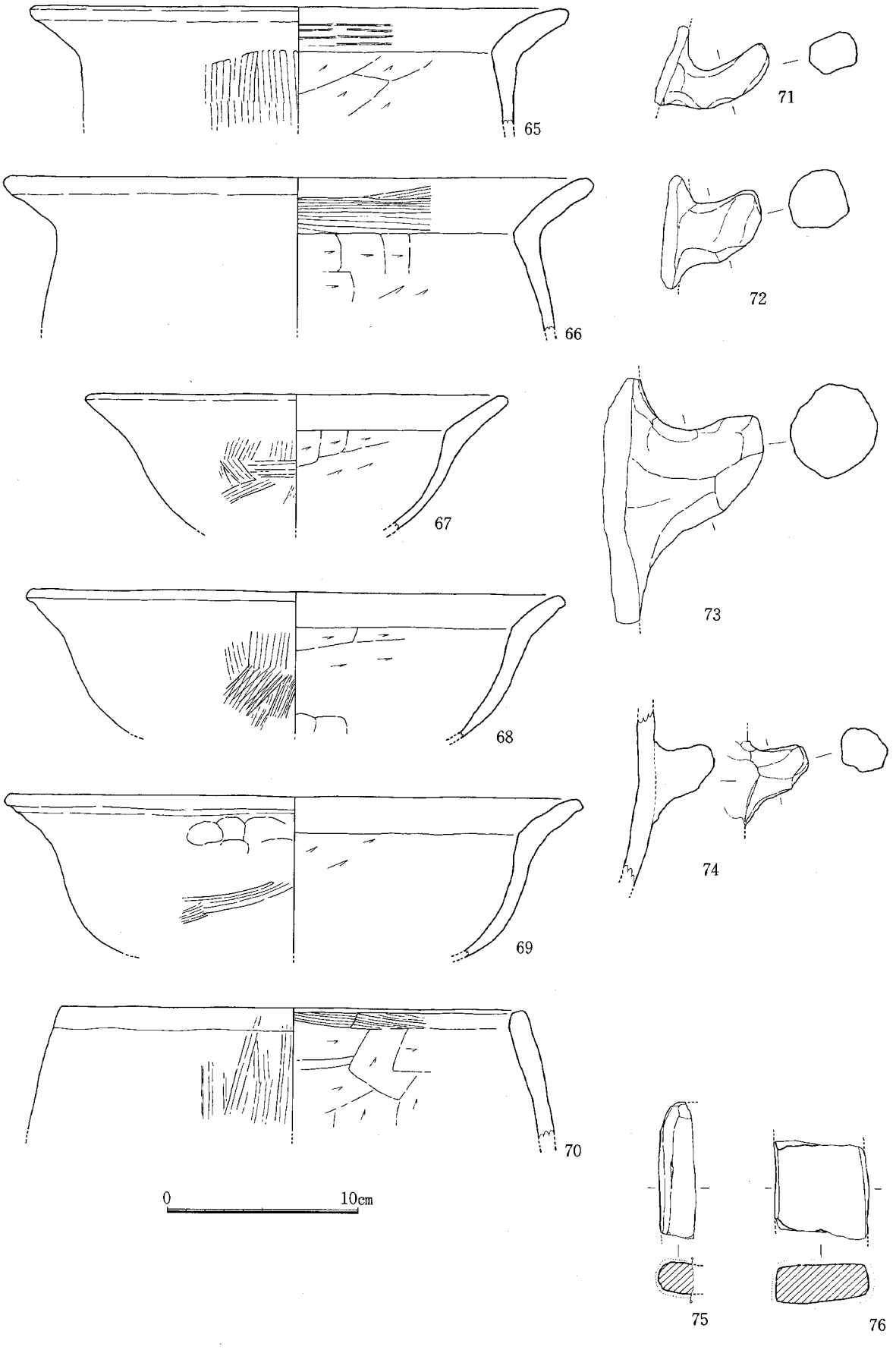


Fig. 16　土坑（SK-04）出土遺物実測図Ⅱ（1/3）

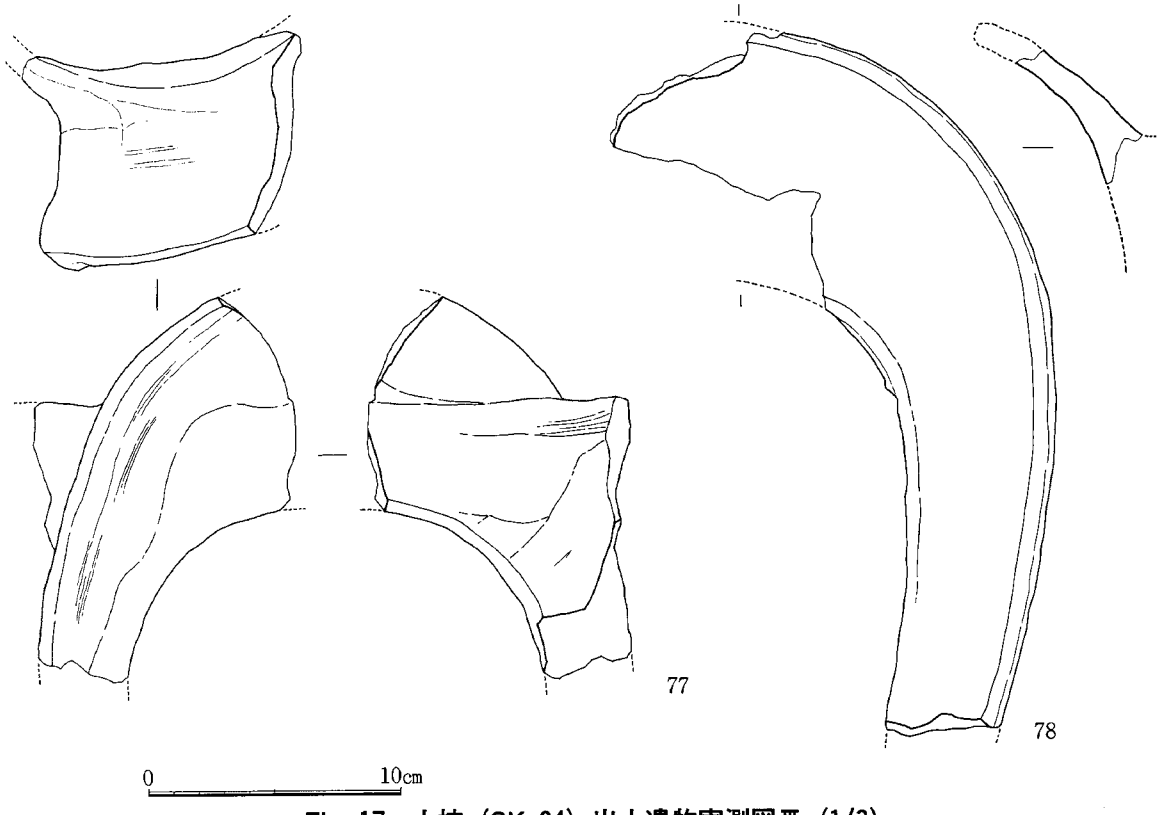


Fig. 17　土坑（SK-04）出土遺物実測図Ⅲ（1/3）

底径6.7～7.8cmを測り、その平均値はそれぞれ13.4cm、3.4cm、7.0cmである。底部はすべてヘラ切りで、体部は外傾するものが多く、体部と底部の境は比較的シャープである。49は口縁部内面に油煙が付着しており、灯明皿に用いている。50は土師器坏ｅで、口径9.6cm、器高3.4cm、底径6.0cmを測り、底部はヘラ切りである。51～53は土師器皿ａ。口径は14.8～15.0cm、器高は1.6～2.1cm、底径は11.2～11.8cmを測る。底部は全てヘラ切りで、体部は横ナデ調整で回転ヘラ磨きを施されたものはない。54～58は土師器埦ｃ。高台がやや低めのものと、かなり高くバチ状に広がるものとがある。体外面下半は回転ヘラ削り、内面は回転ヘラ磨きを施すものが多い。54は口径20.8cm、器高9.5cm、底径11.0cmでかなりの大型品である。57～58もかなり大型になると思われる。59は鍔付小皿で底径8.2cm。60～62は土師器耳皿である。底部が中実の円盤状平底をなすものと、高台を貼付したものとの２種がある。口径8.3～9.0cm、器高2.1～2.5cm、底径4.3～5.5cmを測る。65～74は土師器甕である。いずれも口縁内面の屈曲は鋭く、明瞭な稜線が入る。器高が高く深い甕（65・66）と低く浅い鉢状のもの（67～69）とがある。70は甑もしくは竈であろう。71～74は甑の把手である。77、78は移動式竈の破片で、同一個体と見られる。焚口上部の庇部分である。63は黒色土器で、内面のみを燻すＡ類である。口径13.6cm。口縁は外反して開き、体部は丸みを持つ。内面にヘラ磨きを施す。64は越州窯系青磁で、包含層出土の破片と接合した。碗Ａ－Ⅰ－ａ類で、口径14.4cm、器高4.9cm、底径5.6cm。体部は大きく外に開き、底部は幅広の蛇の目高台。体外面下半は回転ヘラ削り、他は横ナデを施す。胎土はきめ細かく精良。釉調は黄味の強い淡オリーブ色半透明釉で全体に細かな貫入が認められる。全面に施釉した後、底部外縁のみを雑に掻き取り、この部分は赤褐色に変色している。目跡は楕円形で、６ヶ所にあったと見られる。75、76は砥石片である。いずれも薄手の小型品で、石材は75が粘板岩、76が硬質砂岩を用い、両平坦面に使用痕がある。

SK－08 Fig. 18

SK－04の南に８ｍ離れた位置で検出した。平面形は南北にやや長い隅丸方形で、少しいびつである。南北1.4ｍ、東西1.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。遺物は土器片が13点出土したが図化できるものはない。古代の遺構と思われるが、詳細な時期は不明である。

SK－11(37)、38 Fig. 18

調査区の中央に検出した。SK－11はⅠ区とⅡ区の境にあったため、遺物の一部をSK－37の遺構番号で取り上げている。SK－11は南北に長い隅丸方形プランをなし、南北2.2ｍ、東西1.95ｍ、深さ0.2ｍを測る。底面には北寄りにピットが一つある。SK－38はこのSK－11に切られており、方形プランの一部を検出したのみである。出土土器から見て、SK－38は８世紀代の遺構と見られ、SK－11もこれを大きく下る遺構ではないと考えられる。

SK－11(37)、38出土遺物 Fig. 19 PL. 13

SK－11(37)からは、須恵器片３点、土師器片42点が出土したが、細片が多く図化できるものは少ない。SK－38は須恵器片２点、土師器片18点が出土したが図化できるものはない。79はSK－11から出土した土師器坏ａで、口径13.8cm、器高3.9cm、底径7.4cm。底部はヘラ切りで、体部と底部の境はシャープで体部は外傾する。

SK－22 Fig. 18

SK－08から南へ8.5ｍに位置し、SD－17に切られる。南北に長い長円形プランと思われ、長径1.6ｍ、深さ0.15ｍを測る。土師器片２点が出土したが図化できるものはない。

SK－23 Fig. 18

調査区南西隅に検出した小型土坑で、平面形は長円形で東西に長く、長径1.1ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.15ｍである。遺物は須恵器坏ｃ小片１点、土師器片７点が出土したが、図化できない。

SK－44 Fig. 18

調査区中央やや北よりに検出した円形プランの土坑で、やや南北に長く、長径1.6ｍ、短径1.3ｍ、深さ0.15ｍである。出土遺物より８世紀代の遺構と考えられる。

SK－44出土遺物 Fig. 19 PL. 13

土師器片が５点出土。80は土師器大蓋ｃ3で、口径26.1cm、器高は4.0cm程度。口縁端部断面形は三角形をなすがやや退化した感じを受ける。外面は全面に回転ヘラ磨きを施し、内面は横ナデ調整。

SK－45、46 Fig. 18

調査区北端部で検出した土坑で、二つの切り合いと考えたが、前後関係は不明。SK－45は北側が直な円形、SK－46は南北に長い円形であろうか。両者を合わせた南北長は2.4ｍ、東西長1.1ｍ程度。出土遺物は、SK－45が須恵器片２、土師器片１、SK－46が土師器片４点で、ともに明確な時期を示す遺物は出土していない。

(5)木棺墓 SK－30 Fig. 18 PL. 7-2

調査区中央に位置する。井戸SE－35と一部重なっており、これの埋没後に掘られている。南北に

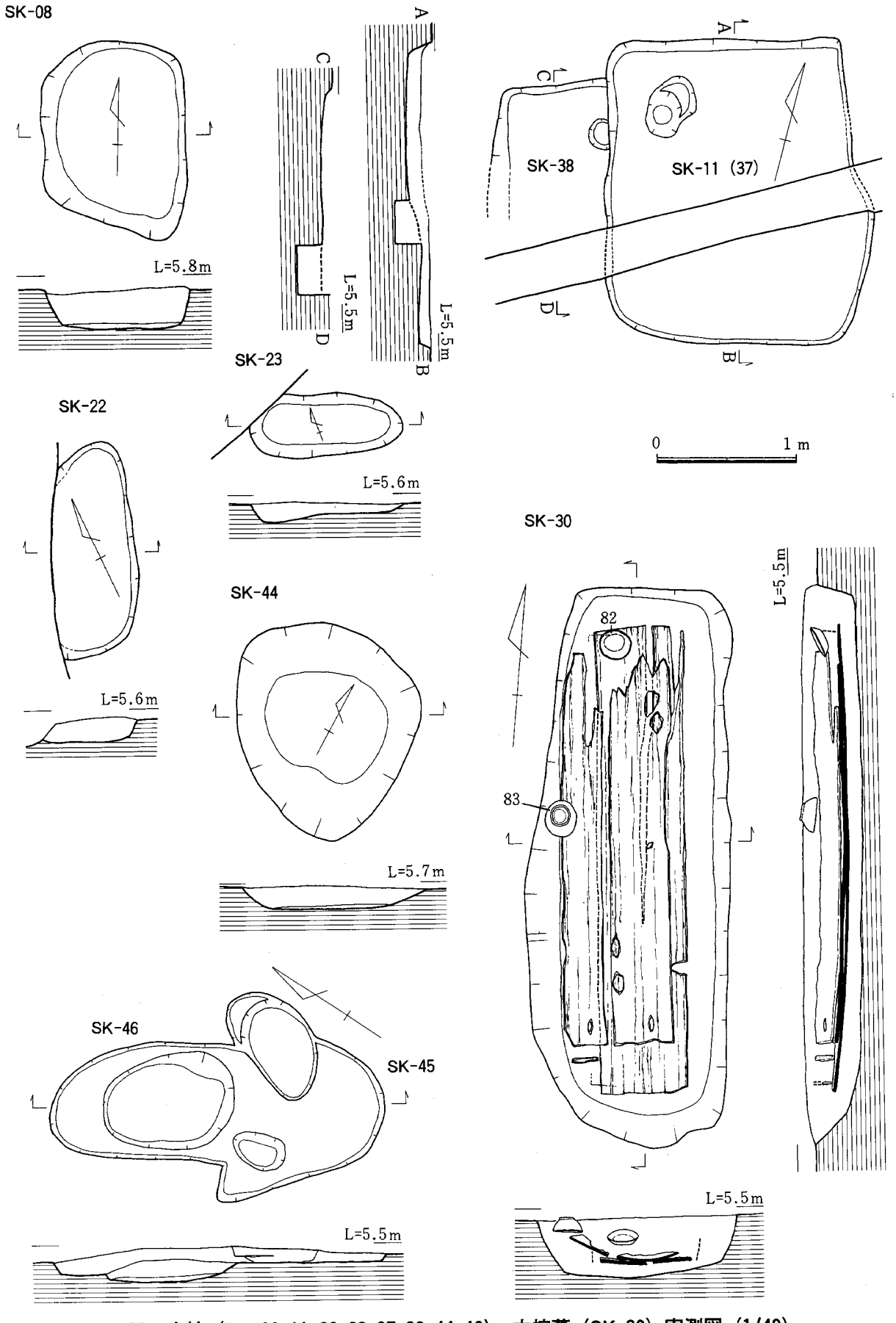


Fig. 18　土坑（SK-08・11・22・23・37・38・44・46）、木棺墓（SK-30）実測図（1/40）

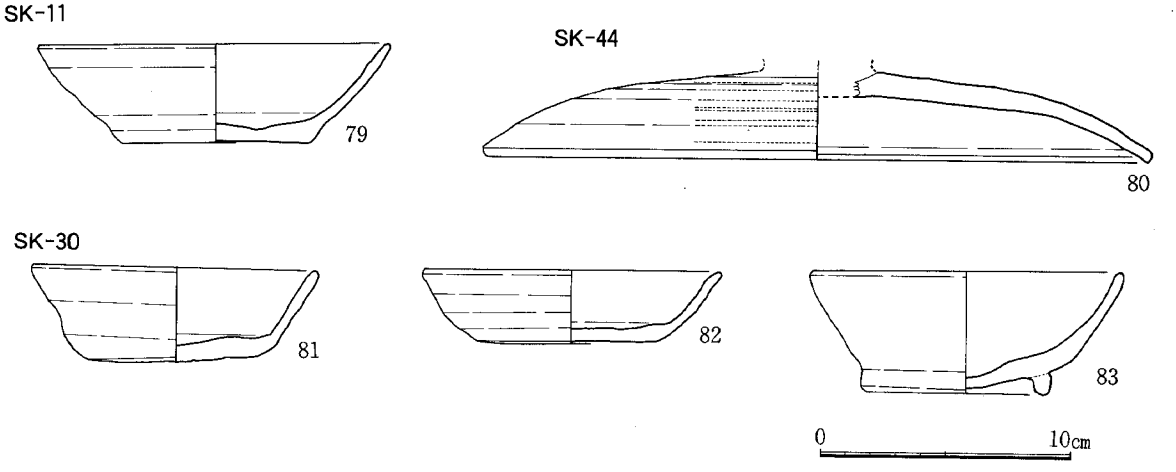


Fig. 19　土坑（SK-11・44）、木棺墓（SK-30）出土遺物実測図（1/3）

長く、主軸は5°西に偏るがほぼ磁北に取っているといってよい。掘り方は隅丸の長方形プランで、南北4.0m、東西1.5m、深さは0.4mを残している。棺は組合せ式で、棺材は蓋と底がほぼ完全に残っていたが、側板はほとんど腐食消失していた。蓋、底ともに一枚板で、蓋は長さ2.8＋αm、幅0.77mで2枚に割れており、底は長さ3.37m、幅0.53mを測り、厚みはともに2cm程度であった。蓋板は土圧により北西側へ押しつぶされ、底板に密着した状態となっていた。蓋の北端は朽ちており、また所々に虫食い状に腐食した孔があるが、南端部の楕円形の2孔は人為的に穿孔した加工痕が認められた。底板は蓋よりも幅が狭く、底板の南北端近くには小口板の痕跡が残っていたが、東西に側板の痕跡はなかった。これは、小口板を底板上に立て、側板を底板外に置いたことを示すものと思われ、棺の内法は長さ3.2m、幅0.65m程度と考えられる。掘り方および木棺内から釘類などは全く出土しておらず、棺材にも釘穴は認められなかった。棺材はスギで、井戸SE－35の井戸側と同じ樹種を用いている。副葬遺物は土師器2点で、ともに棺の蓋上に置いたものと思われ、82の坏を棺の北端部に、83の黒色土器を棺の西側に伏せて置いている。

SK－30出土遺物　Fig. 19　PL. 12

須恵器4点、土師器14点が出土し、時期は9世紀前半～中頃と思われる。81～83は土師器である。81、82は土師器坏aである。81は掘り方出土。口径11.3cm、器高3.8cm、底径6.7cmで、底部はヘラ切りし、体部はさほど外傾せず、底部との境はやや丸味をおびる。82は副葬遺物で、口径11.8cm、器高2.9cm、底径7.0cmを測り、底部はヘラ切りで、器高は低く体部はやや内湾気味である。83は黒色土器椀cで、副葬遺物。内面のみ燻すA類で、口径12.5cm、器高4.8cm、底径7.6cm。内面に若干ヘラ磨きが認められる。体部はほぼ直線的で、高台はやや太く低めである。

(6)掘立柱建物

掘立柱建物は6棟が復元できたが、なお多数の柱穴が残り、復元できなかった建物もあると思われる。建物は調査区中央に3棟（SB－26、54、55）、東壁中央に2棟（SB－51、52）、南東隅に1棟（SB－20）がそれぞれ位置している。

SB－20　Fig. 20　PL. 8-1

調査区南東隅に検出した東西に長い建物である。桁行3間、梁行2間。桁行全長は6.10mで柱間は東から1.81、2.48、1.81mで中央柱間がやや広い。梁行全長は3.46mで、柱間は1.73mの等間である。

主軸方位はN－3°－Eにとる。柱穴掘り方は径36～54cmの円形で、深さは22～54cmを測る。柱穴のうち7本に柱根が残っており、いずれも材はシキミであった。柱は樹皮こそ残っていないが、伐採したままほとんど手を加えないで使用しており、尖らせた下端部には荒々しい伐採具の刃痕が残っている。なお、伐採具の刃部幅が分かるものはない。柱根の径は13～17cmで、柱根の上端部は全て自然に朽ちた状態で、切断したような痕跡は認められない。遺物は柱穴掘り方から土師器片8点が出土した。底部ヘラ切りの土師器坏片などがあるが、図示できる遺物はない。

SB－26 Fig. 20 PL. 8-2

調査区中央からやや南に寄った位置に検出した5間×2間の南北棟建物である。12本の柱穴のうち3本は土坑と溝に切られて無い。桁行全長は10.76mで、柱間は北から2.09、2.16、2.11、2.24、2.16mで、平均値は2.152mである。梁行全長は3.96mで、柱間は1.98mの等間である。桁行方位をN－14°－Wにとる。柱穴平面形は円形で、径24～30cmを測り、深さは9～40cmで、妻柱のみが浅い。柱痕跡は確認できなかった。遺物は2本の柱穴から出土しており、土師器片5点があるが、図示できるものはない。

SB－51 Fig. 20 PL. 8-3

調査区東壁中央付近で検出した。この南側にSB－52が並んで建てられている。他の遺構と切り合っており、SD－07より新しく、SK－04より古い。2間×2間の総柱建物で、北東の柱穴は調査区外にある。南北に若干長く、桁行全長3.04mで柱間は1.52mの等間、梁行全長は3.0mで柱間は1.5mの等間である。桁行方位をN－2°－Eにとる。柱穴は径40～70cmの円形プランで、深さは27～56cmである。4本の柱穴に柱根が残っており、うち側柱3本はマツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツ）で、中央の1本はイスノキであった。SB－20と同様、柱根はほとんど加工を加えない伐採木をそのまま使用しており、下端部には工具の刃部痕が明瞭に残っている。柱根の径は17～22cmで、柱根の上端部は全て自然に朽ちた状態である。柱穴掘り方からは須恵器片7点、土師器片31点が出土したが、図化できるものはない。

SB－52 Fig. 21 PL. 8-3

SB－51の南に3mの間隔をおいて並び建つ2間×2間の総柱建物である。SB－51同様SK－04に切られており、南西隅の柱穴は攪乱に切られて無い。南北にやや長く、桁行全長3.23mで柱間は北から1.63、1.60m、梁行全長は3.04mで柱間は1.52mの等間である。桁行方位はSB－51と同じ。柱穴は径46～90cmの円ないし長円形プランで、深さは29～63cmである。1本の柱穴に柱根が残っており、樹種はSB－51と同じマツ属複維管束亜属で、柱根に特別な加工の痕はない。柱根の最大径は23cmである。柱穴掘り方からは須恵器片5点、土師器片28点が出土した。図化できるものはないが、出土土器は8世紀代の特徴を示している。

SB－54 Fig. 21 PL. 8-4

調査区中央からやや西に寄った位置に検出した3間×2間の南北棟建物である。桁行全長は5.19mで柱間は北から1.85、1.67、1.67m、梁行全長は3.27mで柱間は東から1.80、1.47m、桁行方位をN－25°－Wにとる。柱穴平面形は円形で、径18～42cm、深さは14～30cmである。柱痕跡は確認できなかった。遺物は3本の柱穴から出土しており、須恵器片1点、土師器片12点があるが、図示できるものは

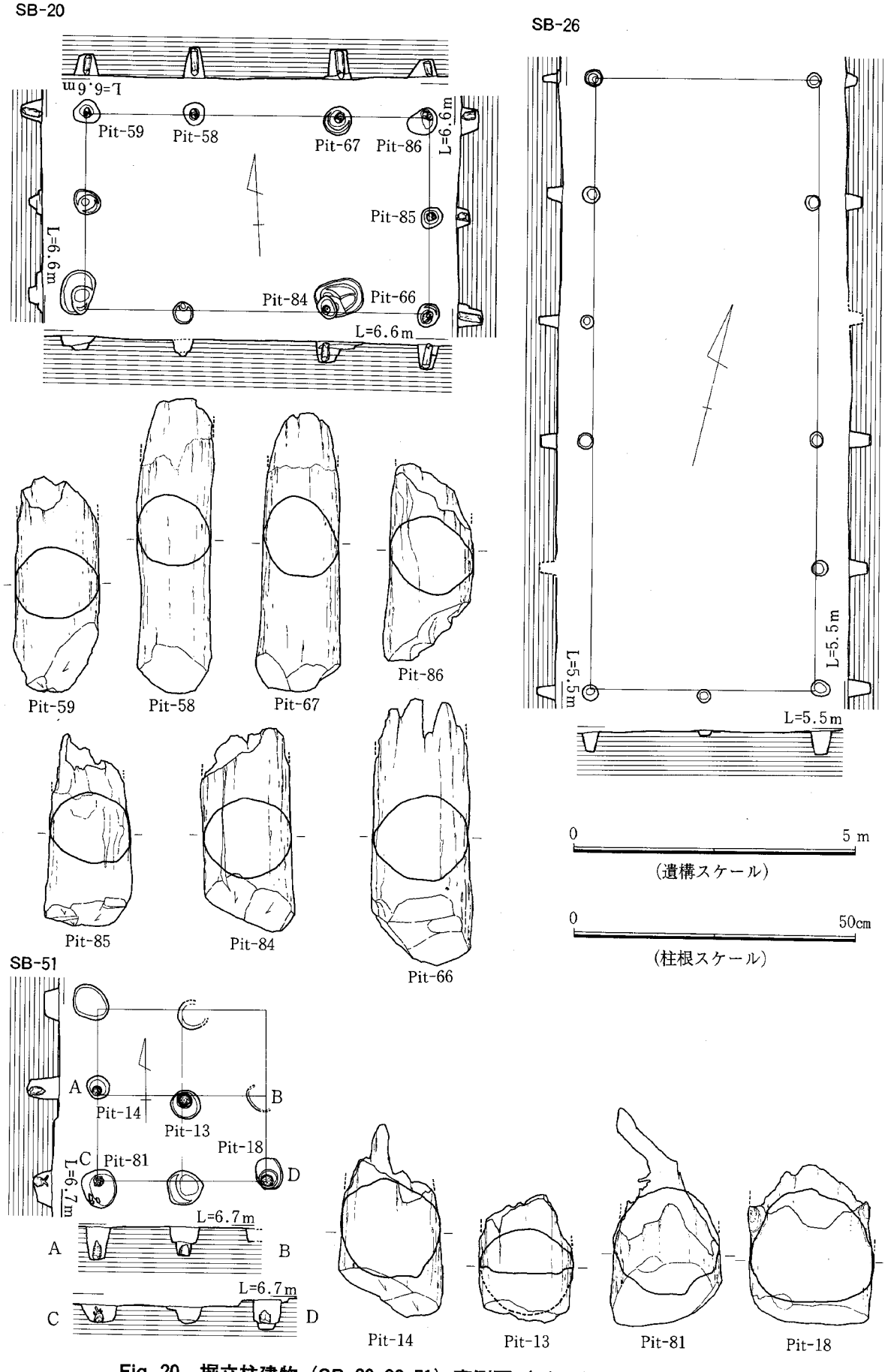


Fig. 20　掘立柱建物（SB-20・26・51）実測図（1/100）、柱根実測図（1/10）

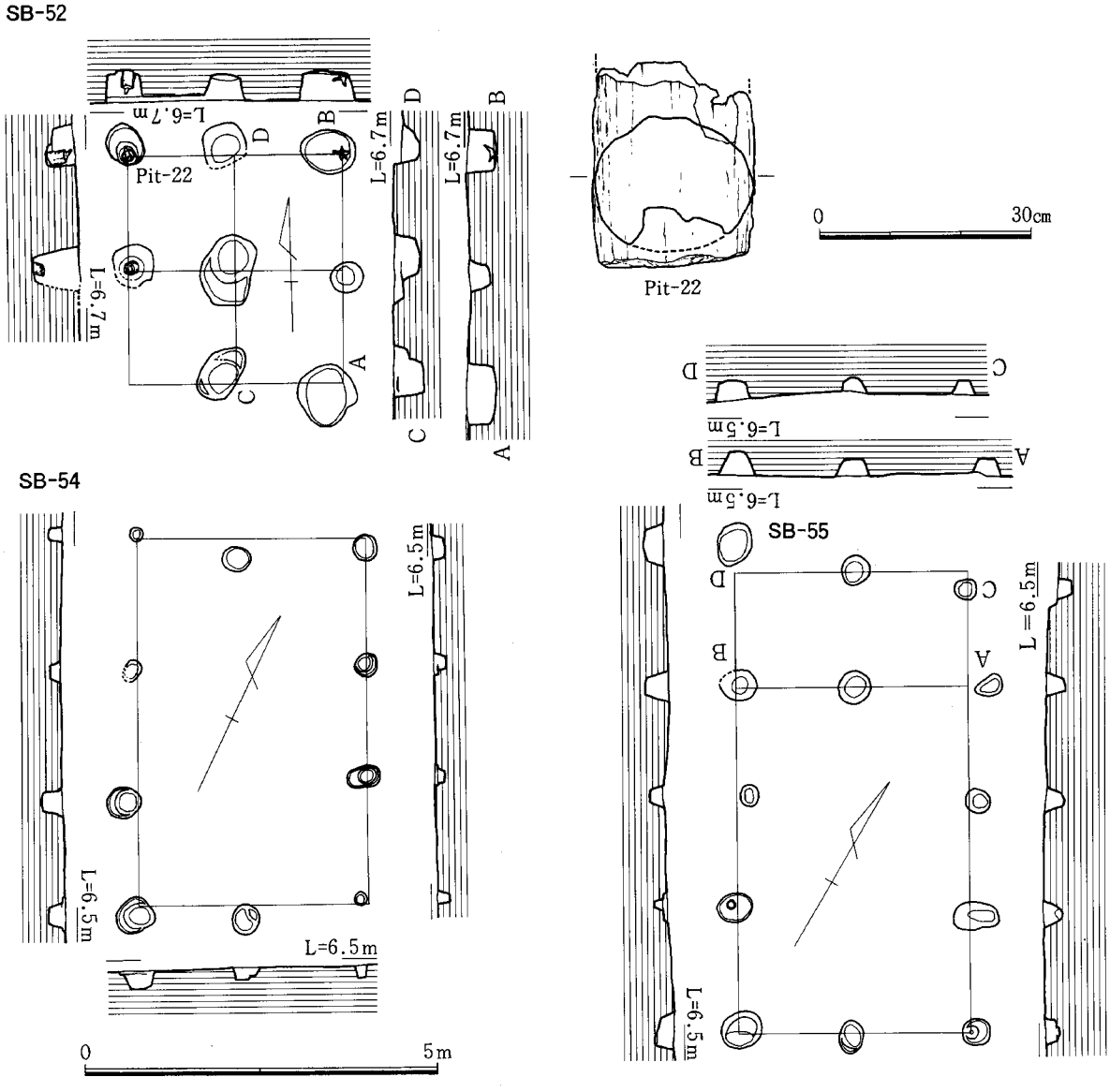


Fig. 21　掘立柱建物（SB-52・54・55）実測図（1/100）、柱根実測図（1/10）

ない。

SB－55　Fig. 21　PL. 8-4

SB－54の北に１ｍ離れて位置する。４間×２間の南北棟で、３間×２間の身舎の北側に庇がとりつく。桁行は全長6.52ｍ、身舎の柱間は南から1.71、1.62、1.57ｍ、庇の出は1.62ｍである。梁行全長は3.28ｍ、柱間は1.64ｍの等間である。桁行方位をＮ－30°－Ｗにとる。柱穴平面形は円もしくは長円形で、径30～65㎝、深さは20～34㎝である。柱痕跡は確認できなかった。遺物は７本の柱穴から出土し、古墳時代土師器片４点、須恵器片３点、土師器片17点があるが、図示できるものはない。

柱穴出土遺物　Fig. 22　PL. 13、17

掘立柱建物の柱穴からは図化できる遺物が出土しなかったが、建物にまとまらない柱穴から多数の遺物が出土しており、そのうち図化し得る遺物をここに掲載した。出土した土師器の坏は全てヘラ切りで、奈良時代末～平安時代初頭の遺物がほとんどである。

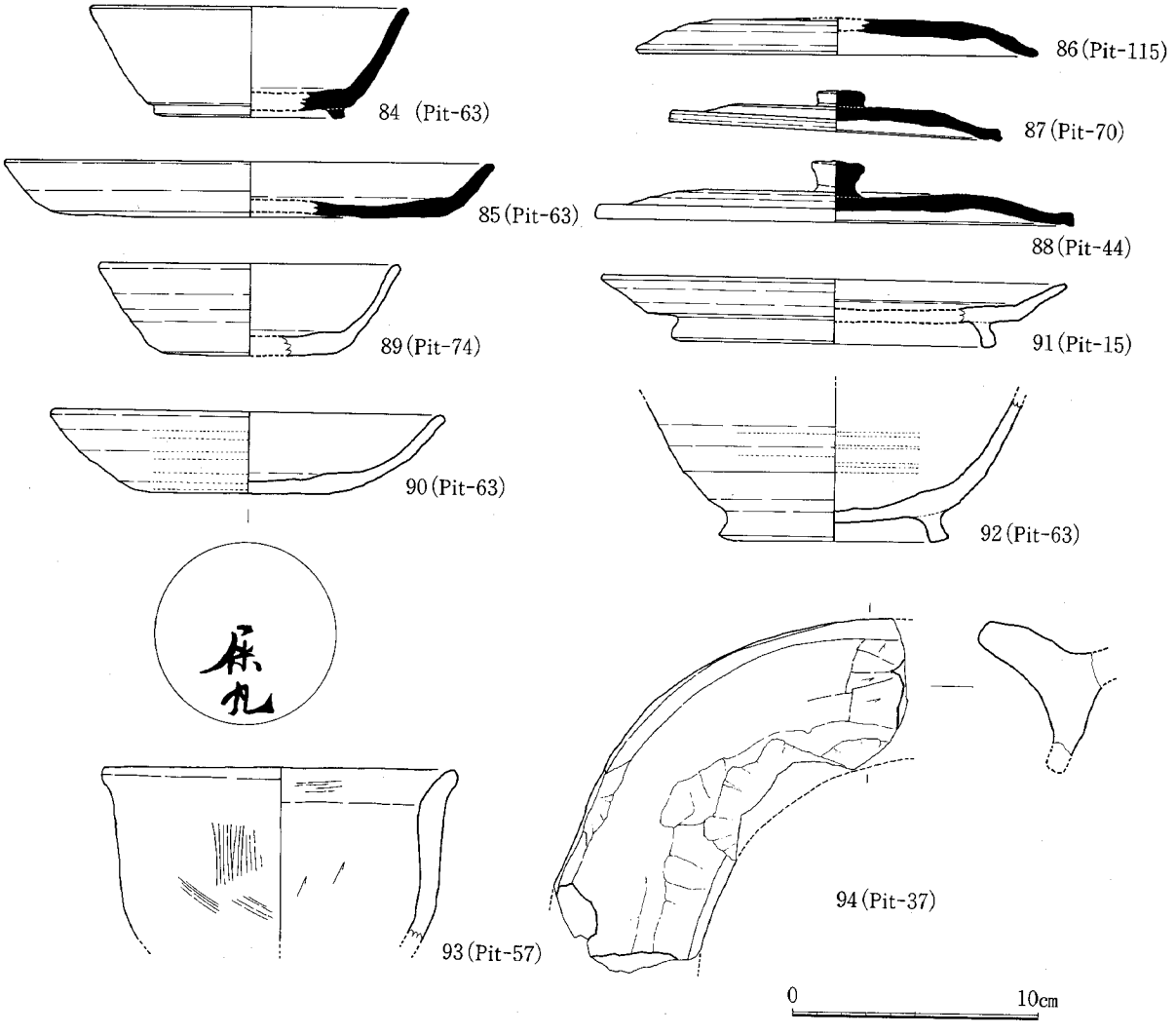


Fig. 22　柱穴出土遺物実測図（1/3）

84～88は須恵器である。84は坏ｃで、口径12.8cm、器高4.5cm。底部はヘラ切り。体部は直線的で高台は底部外縁近くに付ける。85は皿ａで、口径19.8cm、器高2.2cm、底径16.0cm。底部はヘラ切りのまま未調整。86は蓋ａ4で、口径16.4cm。天井部はヘラ切りのまま未調整。87は蓋ｃ3で、口径13.6cm、器高1.6cm。宝珠状つまみは偏平で、口唇の断面はやや退化した三角形をなし、外面には浅い沈線一条が巡る。天井部はヘラ切り離しのままである。88も蓋ｃ3で、口径19.3cm、器高2.5cm。器高は低く偏平であるが、宝珠状つまみは比較的高い。天井部に回転ヘラ削りを加える。89～94は土師器である。89は坏ａで、口径12.2cm、器高3.7cm、底径7.2cm。体部は丸みをもって底部から立ち上がる。底部はヘラ切りである。90は坏ｄで、口径16.0cm、器高3.3cm、底径7.0cm。外底は回転ヘラ削り、体外面と内面には回転ヘラ磨きを施す。外底に「屎丸」と墨で書く。91は皿ｃで、口径18.8cm、器高2.6cm、底径13.2cm。体部は屈曲して底部から立ち上がる。高台は高くやや内側に取りつけ、外にやや開く。92は大椀ｃで、底径は9.4cm。体部外面下半から底部にかけて回転ヘラ削り、下半と内面に粗く回転ヘラ磨きを加える。93は甕で口径14.5cm。小型品で、口縁部はゆるく外反する。94は移動式の竈で、焚き口上部の庇部分の破片である。

(7)河川　SD－10

調査区の西側約1/3を占める河川で、調査地点の西側約200ｍを流れる御笠川の旧河道もしくはその氾濫原と考えられる。調査区内で孤を描きながら流れており、かなり蛇行している。調査区西壁から最大16ｍまでに河川特有の堆積土が広がっていたが、これより５ｍ東側（陸側）にも河川に洗われてできた段差があり、河川の幅員が移動していたことを示している。調査区西壁付近で標高4.5ｍ（東壁際の遺構面との比高差0.8ｍ）まで掘り下げたが湧水が著しいため掘削を断念した。湧水レベルまでは粘質土、以下は砂が堆積しており、砂層中に木材が多量に含まれていたので一部を取り上げ観察したが何ら加工も無い自然流木であった。遺物は主に上層の黒色土に含まれており、下層からは少量の磨滅した弥生土器が出土した。

SD－10出土遺物　Fig. 23、24　PL. 13、17

主に上層からコンテナ２箱分の遺物が出土した。大半が８世紀後半～末の時期に属し、他に弥生時代～古墳時代の遺物を少量含む。

95～110は須恵器である。95は瑞の胴部片で、胴部最大径8.7㎝。肩部に凹線と平行線で施文し、穿孔している。下半はヘラ削り。96～98は坏ａで、ともに底部はヘラ切り。体部は直線的で、底部との境は比較的シャープである。96は口径13.5㎝、器高3.5㎝、底径9.0㎝。97は口径12.8㎝、器高3.7㎝、底径8.8㎝。98は口径12.4㎝、器高3.6㎝、底径8.6㎝。96の底部には墨書がある。部分ではあるが、「本」か。99～103は坏ｃで、体部はいずれもほぼ直線的で器高は高い。高台は低く、底部外端もしくはやや内側に付け、底部はヘラ切りである。99は小型品で口径10.9㎝、器高4.0㎝。100は口径13.0㎝、器高4.7㎝。101は口径14.8㎝、器高5.6㎝。102は口径16.0㎝、器高5.7㎝。103は坏ｃの底部片で、外底に「本」と墨書する。104～106は皿ａで、底部はいずれもヘラ切りのまま未調整。104は口径16.0㎝、器高1.5㎝、底径12.8㎝。105は口径14.9㎝、器高2.0㎝、底径12.0㎝。106は口径16.0㎝、器高3.0㎝、底径14.3㎝。106は外底に「本」の墨書がある。また、104は内底に磨った痕と若干の墨痕が認められ、転用硯と考えられる。107～109は蓋で、天井頂部に退化した偏平な宝珠状つまみが付く。107は口径14.3㎝、器高3.2㎝で、器高が高く、口唇部の断面形は退化した三角形をなす。天井部はヘラ切り離しのままで板圧痕が残る。内面には墨痕が見られ、転用硯であろう。108は口径14.6㎝、器高1.6㎝で、器高は低く、口唇部の断面形は107よりは三角形に近い。天井部はヘラ切り離しのままである。109は小片で法量不明。108、109はともに天井部に「本」と墨で書く。110は小型壺の底部か。底部はヘラ切りで、体外面下半は回転ヘラ削りを施す。

111～119は土師器である。111は皿ａで、口径17.0㎝、器高2.0㎝、底径13.3㎝。外底は回転ヘラ削り、体部の内外に回転ヘラ磨きを施す。112は坏ｄで、外底は回転ヘラ削り、体部の内外に回転ヘラ磨きを施す。外底に十文字のヘラ記号と「＋」の墨書がある。114は坏ｃの底部片で、底径9.1㎝。外に開き気味の低い高台が付く。外面高台脇に回転ヘラ削りの痕跡が認められる。115は土師器の小片で、皿もしくは坏ｄか。回転ヘラ削りされた面に墨書の一部が残っており、「二」とも読める。116は鍋などの脚部か。五本指の獣足を模し、中実で、足首の部分に刷毛目調整が認められる。同様の例がSE－28にもあり、あるいは同一個体か。117は焼塩壺の胴部片で、内面に布目痕、外面に指頭痕が認められる。森田分類のＩに相当する。113および118、119は甕である。113は小型品で、底径4.6㎝。外面はナデ調整、内面には指頭痕が認められる。118、119は口縁が強く屈曲して開き、内面に稜線が入る。118は口径24.0㎝。

120は平瓦、121は丸瓦の玉縁あたりの小片である。ともに布目痕と縄目叩きの痕が残る。

122は土錘で、長さ4.2㎝、幅1.6㎝で、重量は６ｇ。

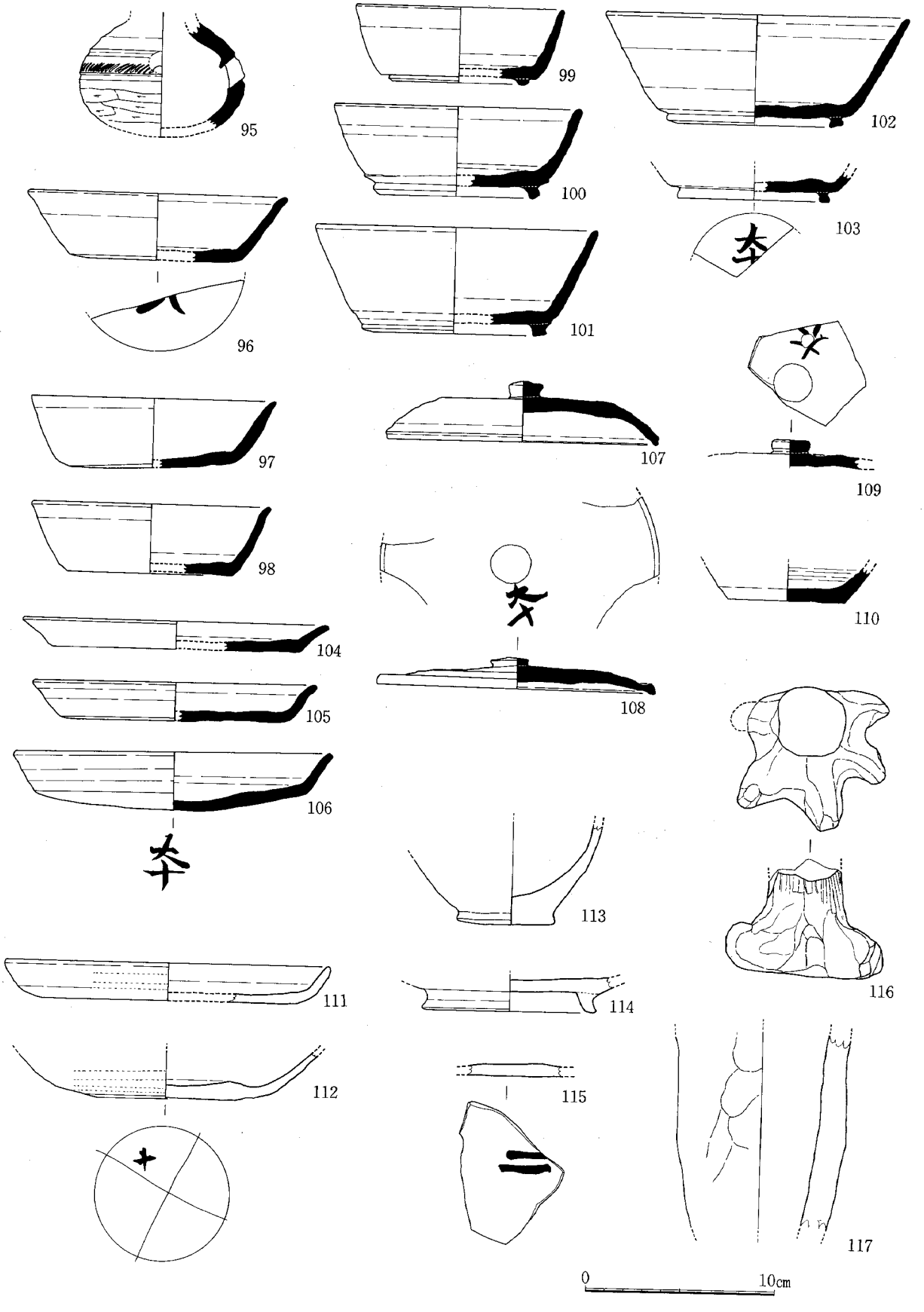


Fig.23　河川（SD-10）出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

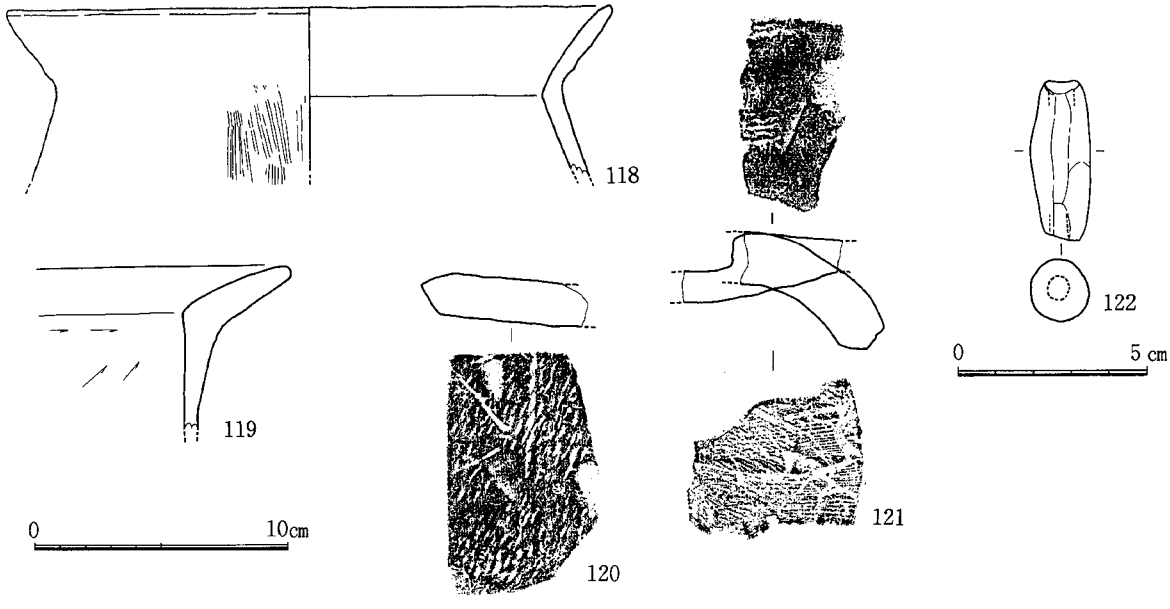


Fig. 24　河川（SD-10）出土遺物実測図Ⅱ（1/3・1/2）

4．中世の遺構と遺物

(1)井戸　SE－28　Fig. 25

調査区南西部に位置する。古代河川SD－10が埋没した後に掘削された遺構である。試掘調査の際に発見したが、トレンチ掘削のため南半分は破壊した。掘り方は直径1.1m程度の円形プランと思われ、深さ0.7mを残していた。井戸側は桶で、幅12cmの板材を組んだものであるが、残りが悪く樹種は同定できなかった。井戸側の基底部付近で基盤土が粘質土から砂に変わり、湧水が著しい。

SE－28出土遺物　Fig. 26　PL. 13

遺物は15点の土器片、瓦片が出土したが、いずれも細片であり、詳細な時期は不明確である。123は鍋などの脚部と思われる。表面には刷毛目調整痕が若干認められる。一部にススが付着する。SD－10出土のもの（Fig. 23－116）と同一個体であろう。

(2)土坑

SK－12　Fig. 25

調査区中央やや南寄りに検出した。掘立柱建物SB－26の柱穴を切っている。南北に長いいびつな隅丸長方形で、南北2.5m、東西2.1m、深さ0.8mを測る。

SK－12出土遺物　Fig. 26

須恵器、土師器、長沙窯系と思われる壺の破片2点、鉄滓等が出土した。土師器は甕の破片が主で、時期を把握できる資料が少ない。124は土師器坏aで、底径6.8cm。底部はヘラ切りで、下位に若干丸みを帯びる。125は土師器坏cで、底径7.9cm。高台は比較的高い。

(3)水田遺構　Fig. 27　PL. 9-1

調査区北東隅で検出した。水田は古代の遺物包含層である黒色土上面に検出でき、この黒色土は水

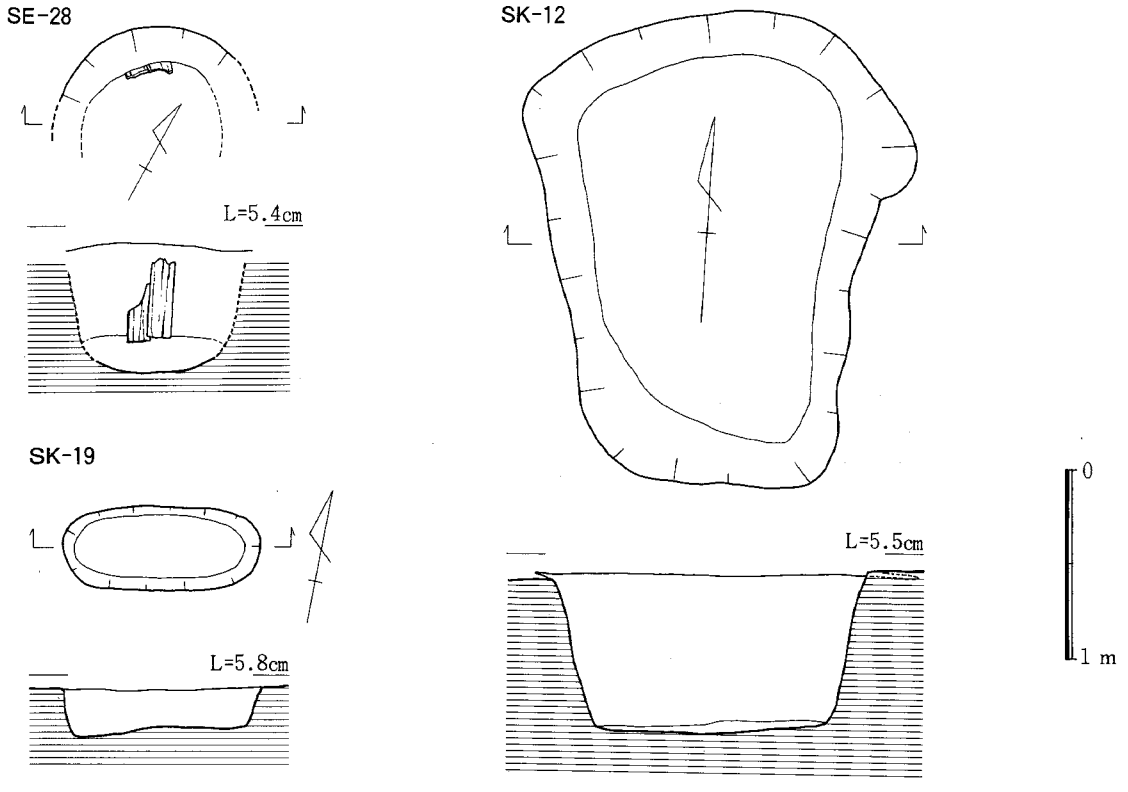


Fig. 25　井戸（SE-28）、土坑（SK-12・19）実測図（1/40）

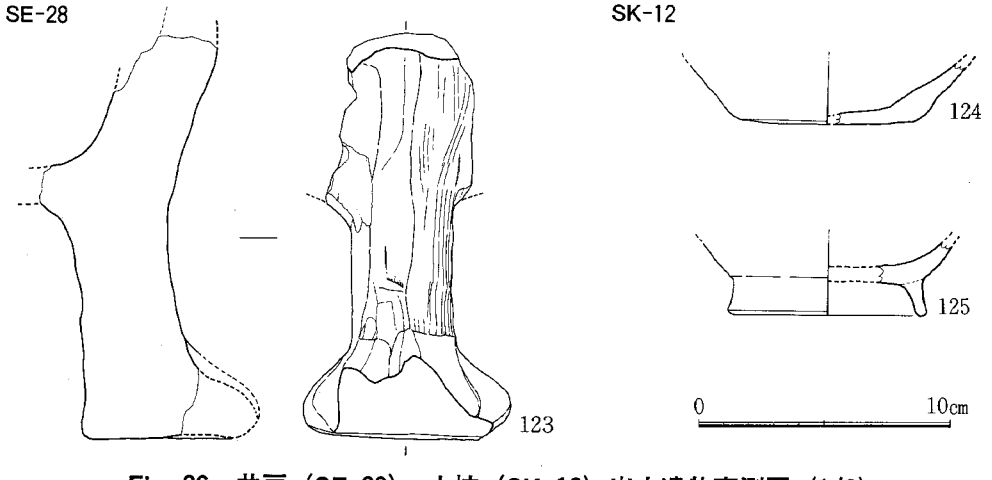


Fig. 26　井戸（SE-28）、土坑（SK-12）出土遺物実測図（1/3）

田造営時の整地層と考えられる。黒色土は調査区の全域に広がっており、一部ではこの上面に足跡状の窪みを見ることができる。このことから見て、中世水田は調査区の広い範囲に広がっていたものと考えられるが、砂層に覆われていたこの一角のみが検出可能であった。検出した遺構は水田面が３枚で、南東の１枚が他より若干レベルが高い。畦畔は痕跡のみを確認し、畦畔の高まりはほとんど残っていなかった。畦畔は東西方向の１条に南北方向の一条が直角に取りつく形をとり、畦畔の方位は、磁北から3°西偏している。東西方向の畦畔には開口部があり、取排水施設であろう。水田面を覆う砂層からは遺物が出土しなかった。

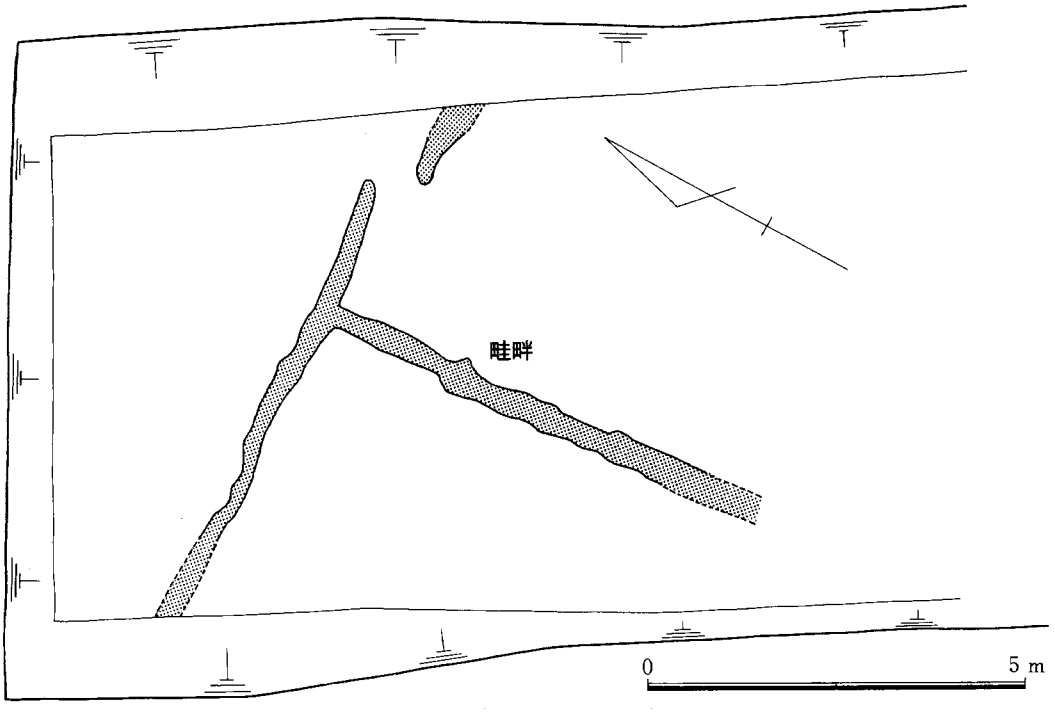


Fig. 27　中世水田遺構実測図（1/100）

5．包含層出土遺物　Fig. 28～31　巻頭図版-3　PL. 14～17

包含層は中世水田造営時の整地層と考えられ、古墳時代～中世の遺物が大量に出土した。主体を占めるのは奈良時代末～平安時代初頭の遺物である。遺物は10×10mグリッドで取上げた(Fig. 4)。

126～151は須恵器である。126は古墳時代の須恵器蓋坏の小片で、底部（もしくは天井部）に、回転ヘラ削りを加え、ヘラ記号を施す。127～133は坏aで、口径は12.0～13.4cm、器高は3.2～4.0cm、底径は7.0～9.8cmの範囲にある。外底は全てヘラ切りで、131と133には板圧痕が残る。いずれも体部は直線的で、底部との境はシャープである。127～131は墨書土器で、128が側面に、他は外底面にそれぞれ墨書がある。127～130は「本」、131は「八代」であろうか。また、132は体部外面に竹管文を押圧する。なお、131は皿a、132は坏cの可能性もある。134～140は坏cで、口径は11.2～16.8cm、器高は4.0～5.7cmに収まる。体部は直線的に開き、底部はヘラ切りで、高台はいずれも底部外縁よりやや内側に貼付しており、低くかつ小さい。141～145は皿aである。141はややこぶりで、口径14.0cm、器高1.8cm、底径10.5cm。他は口径17.0～18.4cm、器高2.2～2.5cm、底径13.4～15.2cmを測る。全て底部はヘラ切り。143には板圧痕が残る。146～148は蓋c3である。146は口径14.0cm、器高1.8cm。147は口径14.8cm、器高2.2cm。148は口径20.0cm、器高1.6cm。146は口縁端部が下方に屈曲するが、他はかなり形骸化している。いずれも天井部はヘラ切りのままで、147には板圧痕が残る。149、150は壺である。149は短頸壺の口縁部片で、口径10.8cm。150は高台の付く壺の底部片で底径10.5cmを測り、体部外面から底部にかけて回転ヘラ削りしている。151は平瓶の肩部あたりの破片で、把手の一部が残っている。外面屈曲部以下は回転ヘラ削り、内面は横ナデ調整で、高台の有無は不明である。

152～168は土師器である。152は坏dで、口径13.7cm、器高3.0cm、底径6.7cm。体部はやや内湾気味に開く。体部外面下半から底部にかけて回転ヘラ削り、他は器面が著しく剝落しており不明瞭であ

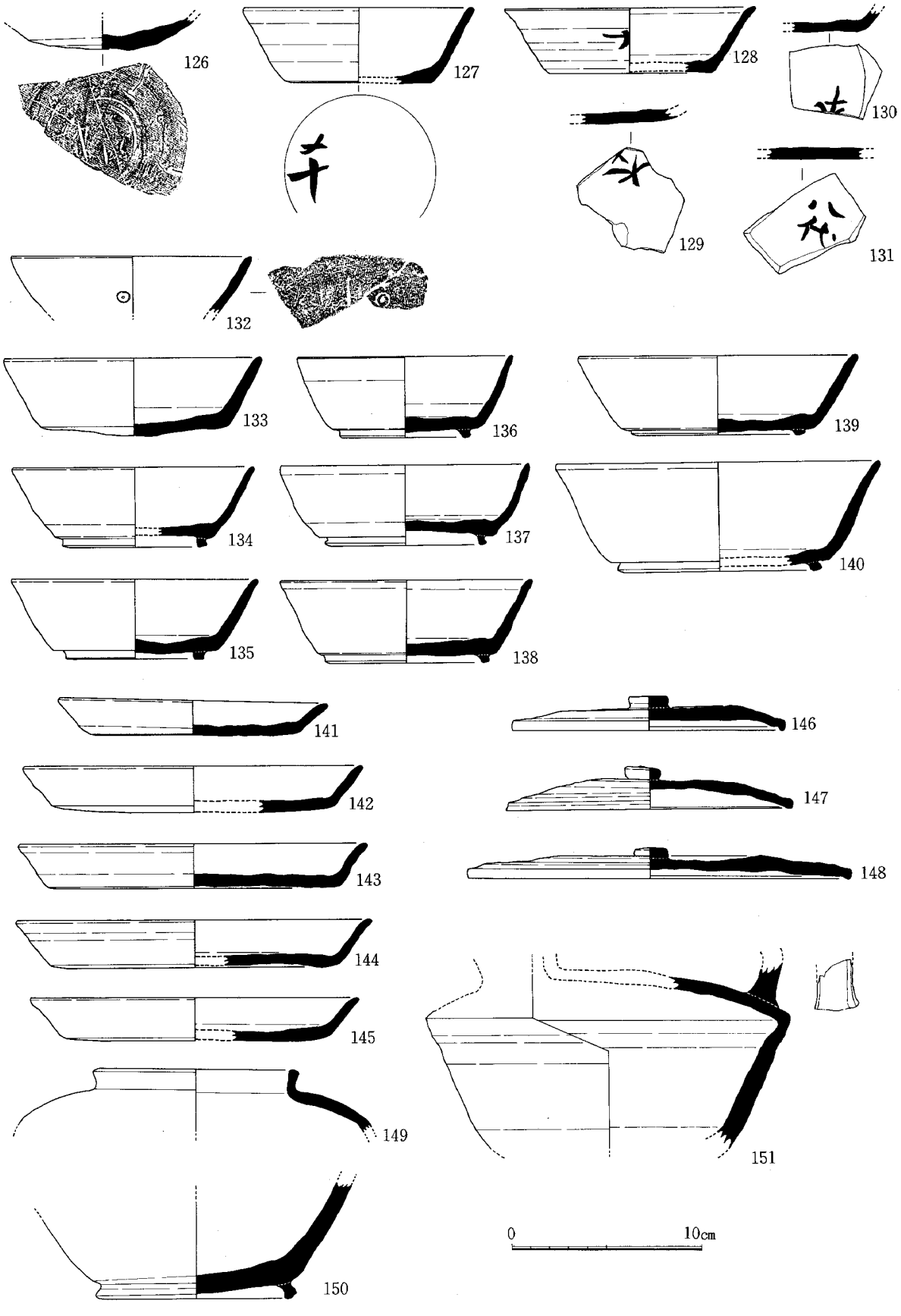


Fig. 28　包含層出土遺物実測図Ⅰ (1/3)

るが回転ヘラ磨きを施していたと思われる。153～160は坏aで、口径12.3～13.4cm、器高2.3～4.1cm、底径6.7～8.0cmの範囲にあり、器高が高く口径のみが小さくなる傾向にある。体部と底部の境は比較的明瞭である。底部は全てヘラ切りで、155、158、160には板圧痕が認められる。また、155と158は口縁に油煙が残る。161は耳皿で、口径9.5cm、器高2.5cm、底径5.4cm。底部は中実の貼付け高台で、ヘラ切り。内面中央が浅く窪む。162は椀cで、口径20.0cm、器高7.5cm、底径10.2cmとかなりの大型品である。高台は高く細身である。体部は直線的に開き、口縁端部は尖り気味におさめる。器面があれており、調整は不明である。163は皿cで、口径23.7cm、器高3.4cm、底径16.8cmの大型品。高台は低い。調整ははっきりしないが外底部は回転ヘラ削りか。164は小壺で、口径6.1cm、器高8.7cm、底径5.3cm。口縁の一部を欠くが、ほぼ完存する。外面は肩部に指頭圧痕が認められ、他は工具によるナデ調整もしくは磨きの痕跡がある。また、底部付近にはコテあて痕が残る。165～167は甕である。165は口径13.4cm、器高7.5cmの小型品である。口縁は緩く開き、頸部内面の稜は不明瞭。166は口径23.7cmで、口縁は屈曲して開き、頸部内面の稜は明瞭。口縁は比較的長く伸びる。外面刷毛目、内面ヘラ削り調整。167は直口甕もしくは甑で、口径19.6cm。口縁は内湾気味にすぼまり、口唇部に平坦面をつくる。内面はヘラ削り調整。168は竈の前面部分の破片である。

169は焼塩壺で、二次焼成を受け全体が赤褐色を呈する。内面に僅かに布目の痕が認められ、森田分類のⅠ類に当たろう。内面には口縁直下に小さな突帯が一条めぐる。

170、171は黒色土器である。170はA類で、口径13.1cm、器高5.3cm、底径7.1cm。体部は丸みを持って開き、端部で外反する。高台は比較的高く先細りである。内面にヘラ磨きを施している。171はB類で、口径15.5cm、器高6.0cm、底径8.7cm。体部は丸みを持って大きく開き、端部は丸くおさめる。高台は撥状に開く。器面があれて調整手法は不明である。

172は軒平瓦の小片で、内区は唐草文、下外区と脇区には外向する凸鋸歯文を配し、上外区は欠失する。顎は段顎であろう。173と174は平瓦の小片で、いずれも凸面の叩きは縄目である。

175～179は石製品である。175～177は砥石片である。175上面と右側面に使用痕があり、砂岩製。176は全体に使用痕があり、特に表裏両平坦面に著しい。砂岩製。177は上面から右側面を使用しており、砂岩製。178は石錘か。偏平な丸い滑石に切れ目を入れており、両側面には細かな啄彫痕がある。86g。179は滑石製の紡錘車である。截頭円錐形をなし、径4.2～4.3cm、厚さ1.8cm、重さ54g。下面に放射状の6本の直線と同心円を線刻し、側面下端付近に浅い段がめぐる。

180～183は紡錘形の土錘である。180は13g、181は6g、182は6g、183は11gを量る。

184～193は陶磁器である。陶磁器は越州窯系青磁が26点と量的に多く、他に白磁Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅷ、Ⅸ類や長沙窯系陶器壺類、青白磁、陶器、緑釉、灰釉、染付などが少量ある。184～191は越州窯系青磁である。184は碗A－Ⅰ－1類の底部片で、底径6.2cm。やや上げ底の蛇の目高台で畳付けの幅は広い。胎土はきめ細かく精良で、釉調はかなり黄味の強い淡オリーブ色透明釉で光沢がある。全体にやや大きめの貫入が入る。畳付け外縁の釉のみを掻取り、この部分に目跡が残る。185は碗A－Ⅱ－1類の底部片で、底径6.0cm。畳付けの幅は狭い。体外面下半は回転ヘラ削りを施す。体外面下半から底部にかけて露胎で、畳付け外縁と内底に目跡が残る。胎土はきめ細かく精良で、釉は剝落しており釉調は不明。186は碗A－Ⅰ－1類と思われ、底径6.0cm。内底には目跡はなく、畳付け外縁の釉のみを掻取り、ここに目跡が残る。胎土はきめ細かく精良で、釉調は淡青灰色で半透明。187は碗A－Ⅱ－3類。平底で外縁を面取りする。体外面下半から外底にかけては露胎。釉が剝落し釉調は不明。188は碗A－Ⅱ－4類で、底径6.1cm。体外面下半は回転ヘラ削りを施す。内底と高台畳付けに目跡が残る。胎土はきめ細かく精良で、釉調はややくすんだ淡オリーブ色で不透明。189は碗B－Ⅱ－1類で、底径

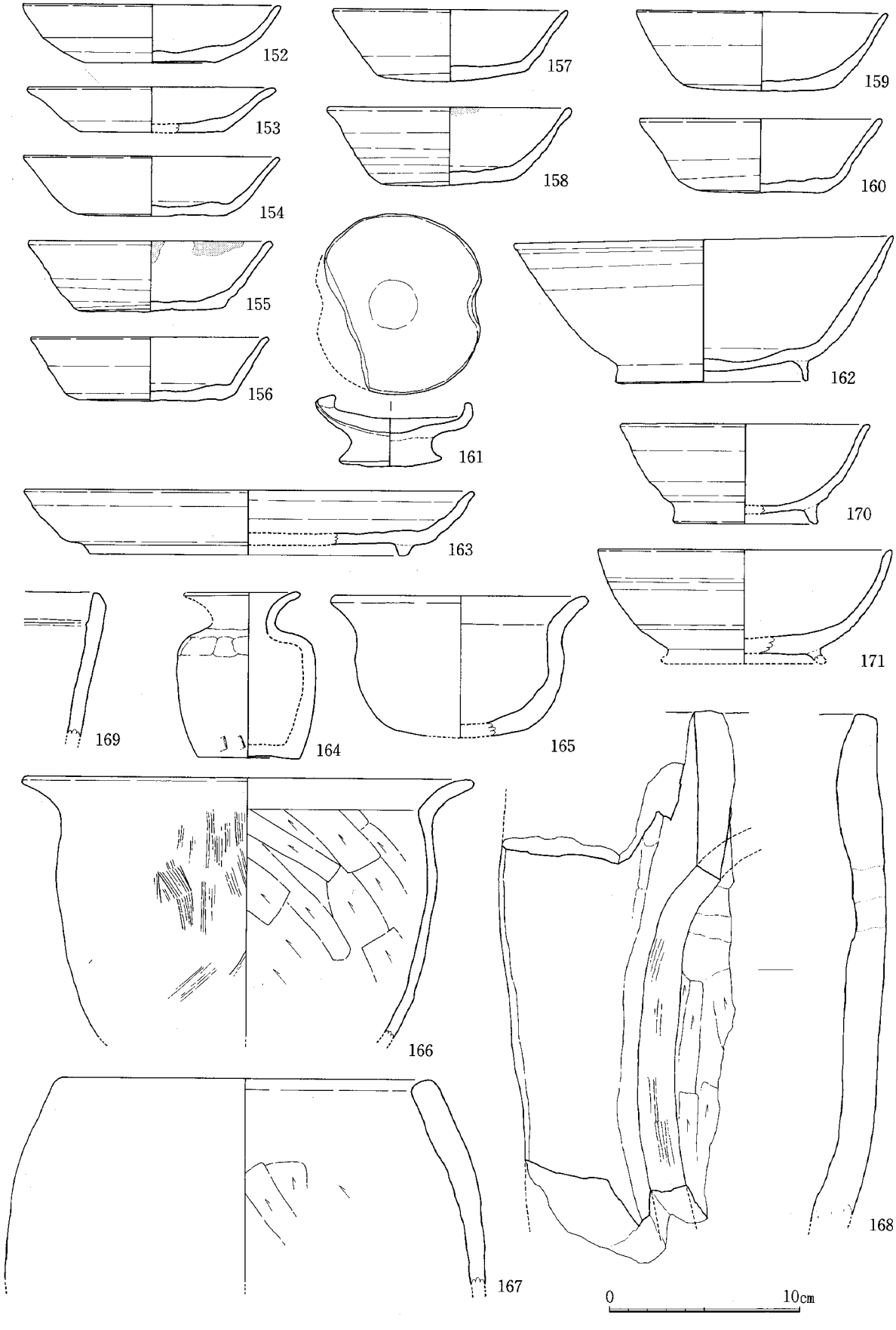


Fig. 29　包含層出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

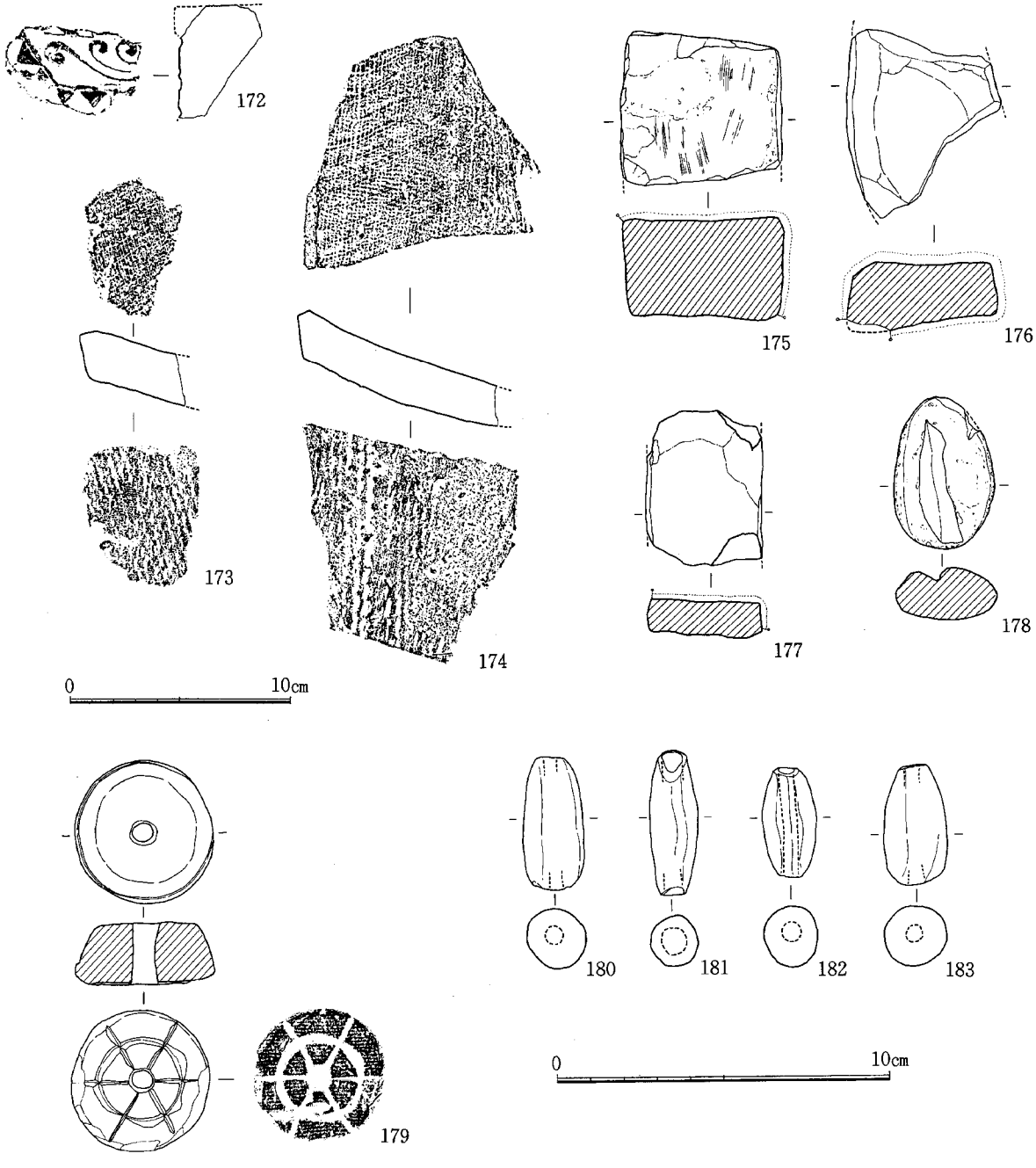


Fig. 30　包含層出土遺物実測図Ⅲ（1/3・1/2）

7.6cm。体外面下半以下は露胎で内底と底部外縁に目跡が残る。胎土に細かな白色粒を含む。厚いガラス質のオリーブ色透明釉で貫入が入る。190は坏A－Ⅰ－2b類と思われる。口径は13.5cm前後、器高3.5cm前後、底径5.4cm。口縁は輪花であろう。高台畳付けの釉のみを掻取り、5ケ所の目跡が残る。内底には長円形に釉の変色した部分が3ケ所認められるが、目跡であろうか。ややくすんだオリーブ色の半透明釉で、全体に細かな貫入が入る。191は水注もしくは壺の口縁部片でA類。口径15.2cm。釉調は淡青緑色で半透明。192は白磁でⅠ類碗。胎土は乳白色できめ細かく陶質。釉は厚くわずかに黄味を帯びた透明釉。口縁端部から内面にかけて化粧土を施す。193は灰釉陶器で、猿投窯産の皿か。底径7.0cm。貼付け高台で、高台脇から外底は露胎。見込みの釉を輪状に掻取り、この部分に重焼き

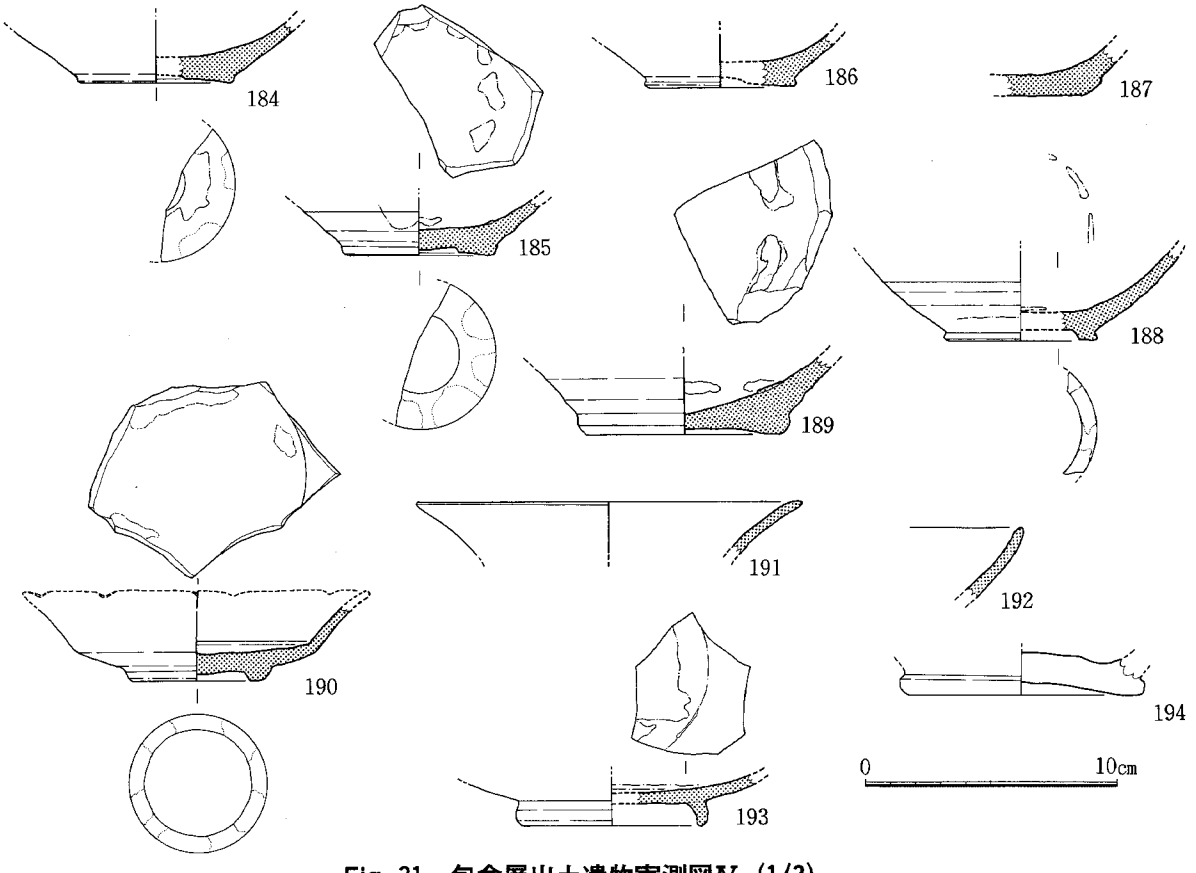


Fig. 31　包含層出土遺物実測図Ⅳ（1/3）

の器の一部が融着する。釉は淡青緑色を帯びた透明釉で、雑に施釉している。194は坩堝か。底径14.7cm。胎土は須恵質で粗砂を多量に含む。内器面に白色粒子が付着する。

6．その他の出土遺物　Fig. 32　PL. 16

攪乱坑などから出土した遺物のうち、図化できるものを掲載した。

195、196は弥生時代中期の短頸壺で、口縁は短く外反して開き、胴部最大径は下位にある。195は口径9.1cm。196は口径15.0cmで、頸部に孔があり、外器面がはげ落ちているが全体に丹塗りしていたものと思われる。197は須恵器坏蓋で、口径12.3cm。天井部は回転ヘラ削りを施し、内面には叩きの痕がある。口縁端部は丸い。198は須恵器坏cで、口径12.7cm、器高4.1cm。底部はヘラ切りで板圧痕がある。高台は端寄りで短い。199は須恵器埦cか。底径6.0cm。200と201は須恵器Ⅲaで、底部はヘラ切り。200は口径20.2cm、器高1.8cm、底径16.8cm。201は口径14.4cm、器高1.8cm、底径11.0cm。202は土師器坏aで、口径12.0cm、器高4.0cm、底径12.0cm。底部はヘラ切りで、体部は直線的に開く。203は土師器甕で、口径30.9cm。口縁は屈曲して開き内面に稜がある。外面は刷毛目、内面はヘラ削り調整である。204は黒色土器A類の小壺で、口径5.9cm、器高9.0cm、底径4.8cm。口縁内面に細かな横位のヘラ磨き、体外面に刷毛目、底部付近にヘラ削り調整が認められる。205は白磁皿Ⅸ類か。底径5.5cm。見込みに浅い段がある。体外面下半から底部にかけて露胎で、茶褐色に変色する。釉は青味のかかった透明釉である。

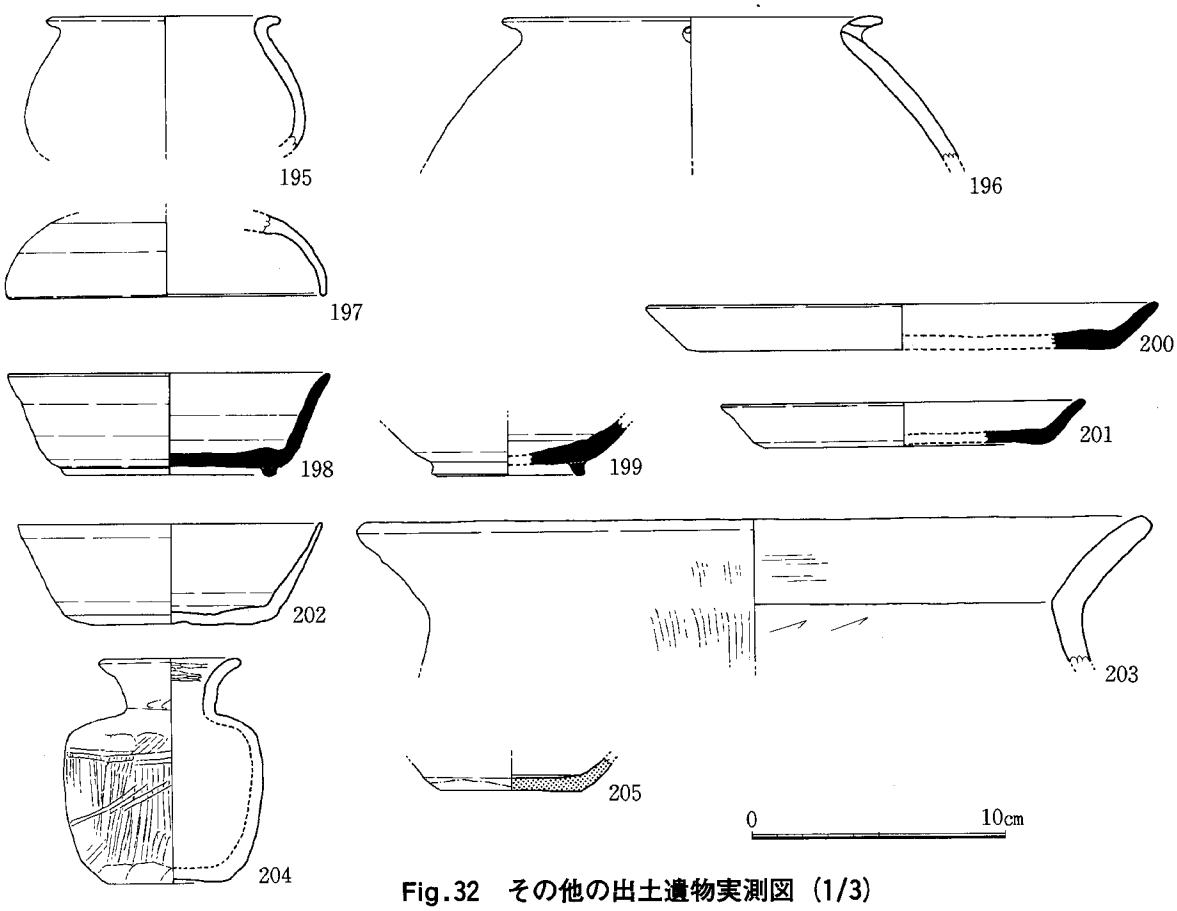


Fig.32　その他の出土遺物実測図（1/3）

Ⅳ．東那珂遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．目的

福岡市域では、板付遺跡や四箇遺跡などの遺跡で出土した木質遺物の樹種同定が行なわれている（嶋倉，1976a，1977，1978，1981a，1981b，1984；林・松本，1982，1987；伊東，1989など）。これらの調査により、過去の木材利用の一端が明らかとなっている。これまでの調査結果をみると、周辺植生を比較的反映すると考えられる杭材にアカガシ亜属・シイノキ属・クスノキなどの暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）を構成する種類が多数確認されている。その中で、鍬・鋤にはアカガシ亜属、弓にはイヌガヤなど、用途を意識した樹種の選択がうかがえる結果も見られる。しかし、各時代の木材利用の実態については、明らかでない。

本報告では、博多区に所在する東那珂遺跡１次調査で出土した木質遺物の樹種を明らかにする。今回の木質遺物は、柱を中心とした構築材がその多くを占めており、過去の構築材の用材選択を知る上で貴重な資料となることが期待される。

2．試料

試料は、東那珂遺跡１次調査で出土した、柱を中心とした木製品30点（No. 1～30）である。各試料の用途・時代等の詳細については、樹種同定結果と共にTab. 1 に記した。

3．方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール・（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

4．結果　PL. 18～20

樹種同定結果をTab. 1に示す。30点の試料は、1点（No. 18）が同定に至らず、広葉樹（散孔材）とした。その他の試料は、針葉樹2種類（マツ属複維管束亜属、スギ）、広葉樹6種類（クスノキ、サカキ、シキミ、イスノキ、モチノキ属、カキノキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴および現生種の一般的性質を以下に記す。なお、学名・和名は「原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉」（北村・村田, 1971, 1979）にしたがい、一般的性質については「木の事典　第1巻～第17巻」（平井, 1979－1982）も参考にした。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.）　マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は、単列、1～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、アカマツ（***Pinus densiflora*** Sieb. et Zucc.）、クロマツ

Tab. 1　樹種同定結果

番号	遺跡名	出土遺構	用途	時代	樹種名	備考
1	東那珂遺跡1次	SE-35 No.1	建築材　柱	奈良時代末～平安時代	サカキ	
2	東那珂遺跡1次	SE-35 No.2	井筒	奈良時代末～平安時代	スギ	
3	東那珂遺跡1次	SE-35 No.3	井筒	奈良時代末～平安時代	スギ	
4	東那珂遺跡1次	SE-35 No.4	井筒	奈良時代末～平安時代	スギ	
5	東那珂遺跡1次	SK-30	木棺　底板	奈良時代末～平安時代	スギ	
6	東那珂遺跡1次	SK-30	木棺　フタ	奈良時代末～平安時代	スギ	
7	東那珂遺跡1次	Pit.-83	柱	奈良時代末～平安時代	クスノキ	
8	東那珂遺跡1次	Pit.-21	柱	奈良時代末～平安時代	マツ属複維管束亜属	
9	東那珂遺跡1次	Pit.-13	柱	奈良時代末～平安時代	イスノキ	SB-51
10	東那珂遺跡1次	Pit.-81	柱	奈良時代末～平安時代	マツ属複維管束亜属	SB-51
11	東那珂遺跡1次	Pit.-86	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
12	東那珂遺跡1次	Pit.-59	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
13	東那珂遺跡1次	Pit.-87	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	
14	東那珂遺跡1次	Pit.-85	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
15	東那珂遺跡1次	Pit.-58	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
16	東那珂遺跡1次	Pit.-88	柱	奈良時代末～平安時代	モチノキ属	
17	東那珂遺跡1次	Pit.-93	柱	奈良時代末～平安時代	カキノキ	
18	東那珂遺跡1次	Pit.-90	柱	奈良時代末～平安時代	広葉樹（散孔材）	
19	東那珂遺跡1次	Pit.-74	柱	奈良時代末～平安時代	スギ	
20	東那珂遺跡1次	Pit.-91	柱	奈良時代末～平安時代	イスノキ	
21	東那珂遺跡1次	Pit.-79	柱	奈良時代末～平安時代	イスノキ	
22	東那珂遺跡1次	Pit.-66	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
23	東那珂遺跡1次	Pit.-14	柱	奈良時代末～平安時代	マツ属複維管束亜属	SB-51
24	東那珂遺跡1次	Pit.-22	柱	奈良時代末～平安時代	マツ属複維管束亜属	SB-52
25	東那珂遺跡1次	Pit.-82	柱	奈良時代末～平安時代	モチノキ属	
26	東那珂遺跡1次	Pit.-18	柱	奈良時代末～平安時代	マツ属複維管束亜属	SB-51
27	東那珂遺跡1次	Pit.-92	柱	奈良時代末～平安時代	イスノキ	
28	東那珂遺跡1次	Pit.-67	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
29	東那珂遺跡1次	Pit.-84	柱	奈良時代末～平安時代	シキミ	SB-20
30	東那珂遺跡1次	Pit.-24	部材	奈良時代末～平安時代	モチノキ属	

(***P. thunbergii*** Parlatore)、リュウキュウマツ(***P. luchuensis*** Mayr) の3種類がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが、耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) **スギ科スギ属**

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。材は軽軟で割裂性は大きく加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) **クスノキ科クスノキ属**

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独まれに2～3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。大型の油細胞が顕著に認められる。

クスノキは、本州(関東地方以西)・四国・九州に分布し、また植栽される常緑高木である。クスノキの材はやや軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽・耐虫性は高い。建築・内装・建具・家具・器具材や船舶材に用いられる。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) **シキミ科シキミ属**

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

シキミは本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州に自生する常緑小高木であり、庭や墓地に植栽されることもある。西日本に多く、カシ林やモミ・ツガ林の下木として普通である。材の強度は中程度で、細工物・薪炭材などに用いられる。

・サカキ (*Cleyera japonica* thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) **ツバキ科サカキ属**

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段の数は20前後、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

サカキは、本州(新潟・茨城県以西)・四国・九州・琉球に自生するとされる常緑高木で、暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の構成種であり、神社などに植栽される。このため本来の自生北限は明らかではない。材は重硬・強靱で、割裂しにくく加工は困難。建築・器具材としても用いられるが、薪炭材として一般的である。

・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) **マンサク科イスノキ属**

散孔材で、道管はほとんど単独、横断面では多角形。階段穿孔を有し、段数は5前後。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

イスノキは本州(関東南部以西)・四国・九州・琉球の常緑樹林内に生育する常緑高木である。イスノキ属には他に小笠原に分布するシマイスノキ(***D. lepidotum*** Nakai) がある。材は重硬で加工は困難、強度・耐朽性は大きい。家具・器具・建築材・薪炭材として用いられるほか、櫛としてはツゲに次ぐ良材とされている。

・モチノキ属（*Ilex* sp.）　モチノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、２～８個が複合または単独に配列する。道管は階段穿孔を有し、段数は10～20、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、１～６細胞幅、１～20細胞高。

モチノキ属には、落葉性のアオハダ（***Ilex macropoda*** Miq.）・ウメモドキ（***I. serrata*** Thunb.）などと、常緑性のイヌツゲ（***I. crenata*** Thunb.）・モチノキ（***I. integra*** Thunb.）などの18種がある。属としては全土に分布し、また多くの亜・変・品種があり、庭木としても植栽される。材は一般に重硬で、器具材・薪炭材・旋作材などに用いられる。

・カキノキ（*Diospyros* Kaki Thunb.）　カキノキ科カキノキ属

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または２～４個が時に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、１～２細胞幅、10～20細胞高で階層状に配列する。

カキノキは、中国・揚子江流域原産で平安時代ごろ日本に伝えられたものと考えられ、本州・四国・九州で広く栽培されている。カキノキの材はやや重硬・強靱で、建築装飾・器具・家具材などに用いられる。

５．考察

柱には、散孔材を含めて９種類、井筒と木棺にはスギ、杭には散孔材、部材にはモチノキ属がそれぞれ使用されていたことが明らかとなった(Tab. 2)。このうち柱では、シキミ・複維管束亜属・イスノキ・モチノキ属が多く見られる。とくに、シキミは８点中７点までが同一建物（Pit.-58, 59, 66, 67, 84, 85, 86）から得られたものであり、建物によっては使用する種類を選択していた可能性がある。また、それ以外の建物についても、強度が高い木材を選択していたことが推定される。構築材等に強度の高い木材が使用される傾向は、全国的に多数知られている（島地・伊東，1988；伊東，1990)。北部九州では、本遺跡の他にも福岡市原深町遺跡・板付遺跡、北九州市カキ遺跡、佐賀県佐賀市久米遺跡および土生遺跡等で柱材を含めた構築材の樹種同定が行なわれており、今回と同様の結果が得られている（嶋倉，1976a；松本・林，1978；林・松本，1982b；パリノ・サーヴェイ株式会社，1992)。また、これらの調査で得られた種類には、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）を構成する樹種が多く見られ、特に時代による木材の変化は認められない。このことは、福岡市内各遺跡で行なわれた杭材の樹種同定結果(嶋倉，1976a，1976b，1977，1978，1984a，1984b；林・松本，1980；長尾ほか，1987)とも調和的である。板付遺跡で行なわれた花粉分析の結果（中村・畑中，1976)からは、樹種同定で認められた樹木を遺跡周辺から得ていたことが推定され、周辺部から構築材としての条件を有した樹木を選択していたことがうかがえる。

井筒および木棺はすべてスギである。井戸に使用される木材には、スギ・ヒノキ属・複維管束亜属などの針葉樹材が比較的多い（島地・伊東，1988；伊東，1990)。今回の結果についてもこれまでの結果と調和的であり、加工が容易で耐水性が比較的強いスギを利用したことが推定される。木棺については、市内藤崎遺跡で出土した記憶があり、ヒ

Tab. 2　用途別樹種構成

用途	柱	井筒	木棺	部材	合計
複維管束亜属	5				5
スギ	1	3	2		6
クスノキ	1				1
シキミ	8				8
サカキ	1				1
イスノキ	4				4
モチノキ属	2			1	3
カキノキ	1				1
散孔材	1				1
合計	24	3	2	1	30

ノキの可能性が指摘されている（嶋倉，1982)。棺材については、日本書紀の中で、素戔嗚尊の説話としてコウヤマキが適しているという記述があり、同様の用材選択が行なわれていたことが畿内の古墳から出土した棺材の同定から認識されている（島地・伊東，1988)。しかし、コウヤマキが確認されているのは畿内を中心とした地域であり、その他の地域ではヒノキ属やスギが多い。これは地域・階級等によって適材の認識が異なっていたことや、コウヤマキの自生地が限られていることに起因していることが考えられる。本地域は、現在コウヤマキが自生している地域から離れているが、当時もコウヤマキの入手は困難であったことが推定される。一方、スギやヒノキ属は他の用途にも認められており、その入手はそれほど困難であったとは考えられない。今回の結果は、入手可能な樹種の中から棺材として適材と考えられた木材を使用したことが推定される。

引用文献

林　弘也・松本　昺（1980）瑞穂遺跡から出土した木製遺物の樹種同定.「瑞穂　福岡市比恵台地遺跡」，p. 209-216, 日本住宅公団.

林　弘也・松本　昺（1982a）那珂深ヲサ遺跡から出土した木製遺物の樹種同定. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集「福岡市博多区　那珂深ヲサ遺跡Ⅱ」，p. 85-88, 福岡市教育委員会.

林　弘也・松本　昺（1982b）原深町遺跡から出土した木製遺物の樹種同定. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集「福岡市西区原深町遺跡（別冊)」，p. 31-32, 福岡市教育委員会.

林　弘也・松本　昺（1987）四箇遺跡から出土した木製遺物について. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集「福岡市早良区四箇遺跡」，p. 179-182, 福岡市教育委員会.

平井信二（1979-1982）木の事典　第１巻～第17巻. かなえ書房.

伊東隆夫（1989）四箇遺跡群23次調査河川出土木材の樹種. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集「四箇遺跡群－第23次調査報告書－」，p. 35-38, 福岡市教育委員会.

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ，木材研究・資料，26，p. 91-189.

北村四郎・村田　源（1971，1979）原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉.453p., 545p., 保育社.

松本　昺・林　弘也（1978）久米・土生遺跡から出土した木製品の樹種同定について. 佐賀県文化財調査報告書第42集「久米遺跡群　小城郡三日月町所在」，p.55-59，佐賀県教育委員会.

長尾博文・渡辺洋徳・古賀信也（1987）博多遺跡群第29次調査出土船材調査報告. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集「博多Ⅷ－博多遺跡群第29次調査の概要」，p. 61-66，福岡市教育委員会.

中村　純・畑中健一（1976）板付遺跡の花粉分析学的研究. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974－」，p. 29-42，福岡市教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）カキ遺跡出土木製品の材同定報告. 北九州市埋蔵文化財調査報告書第116集「カキ遺跡（木製品編）－九州縦貫自動車道関係文化財調査報告27－」，p. 167-176，財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室.

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.

嶋倉巳三郎　(1976a）木材の材質. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974－　下巻」，p. 67-75，福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1976b）福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集「福岡市西区大字免鶴町遺跡（本文冊)」，p. 63-68，福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1977）福岡市板付Ｈ－５地点から出土した木質品の樹種について. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集「板付周辺遺跡調査報告書（４)」，p. 111-114，福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1978）福岡市四箇Ｊ－10地区出土杭材の樹種について. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集「福岡市西区　四箇周辺遺跡調査報告書（２）(別冊)」，p. 1-24, 福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1981a）福岡市板付Ｅ－５・６地区出土の木質遺物の樹種. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集「板付　～板付会館建設に伴う発掘調査報告書～」，p.76-77，福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1981b）樹種の鑑定. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集「福岡市博多区　那珂深ヲサ遺跡Ⅰ」，p. 67-70. 福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎　(1982）福岡市藤崎遺跡出土棺材の樹種. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集「福岡市西区　藤崎遺跡」，p. 143-144, 福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1984a）田村遺跡第１地点から出土した木質遺物の樹種. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集「福岡市早良区　田村遺跡－Ⅱ－」，p. 15-16, 福岡市教育委員会.

嶋倉巳三郎（1984b）田村遺跡第２地点から出土した木質遺物の樹種. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104 集「福岡市早良区田村遺跡－Ⅱ－」，p.68-69, 福岡市教育委員会.

V．おわりに

1．遺跡の立地について

東那珂遺跡は福岡平野中央からやや北東に寄った位置にある。御笠川のすぐ東岸に位置するため氾濫原であろうと考えられ、これまで遺跡の存在が知られていなかった地域に含まれる。平成7年3月現在までに2次にわたる調査が行われ（Fig. 2)、2次調査でも古墳時代初頭と古代の遺構が検出されている。1、2次調査とも遺構の存続時期は短くかつ密度は薄く、長期にわたり集落が営まれた様子ではないが、少なくともこの2時期に、東那珂遺跡周辺に大がかりな開拓の手が伸びていたことが伺われる。1、2次調査地点ともに御笠川の沖積作用によって生まれた微高地上に位置するが、2次調査地点では西側に比較的大きな河川の存在することが判明しており、河川でいくつかに分断された微高地に島状に邑をなしていた状況ではなかったかと思われる。

2．弥生時代以前の東那珂遺跡

弥生時代では、遺構は検出されなかったが、旧河川SD－10から磨滅した弥生土器が出土した。また、SD－10には木質遺物が含まれており、一部を取り上げて観察したが、人為的な加工を受けたものは皆無であった。上流の板付遺跡などから流れてきたものであろう。

3．古墳時代の東那珂遺跡

古墳時代の遺構は竪穴住居跡1と土坑1を検出した。東方約250mに位置する2次調査地点においても方形に曲がる幅2m弱の溝1を検出し、古墳時代初頭の布留式土器が出土しているが、いずれも集落の一端を調査したにすぎず、1～2次調査地点の間に集落の中心部が存在するものと考えられる。1次調査で出土した数少ない古墳時代の遺物のなかに破鏡が含まれているが、これが出土した遺構は竪穴住居跡としたものの柱穴も炉跡も持たず、一般的な集落住居とは考えにくい遺構である。出土土器は僅少だが、時期的には布留式の古相に相当すると考えられる。

出土した破鏡は復元径9.4cmの単夔鏡の1/5の部分に相当し、鈕はない。鏡背には赤色顔料が塗られ、全体に磨れており、一端部に穿孔している。周辺地域で青銅鏡を出土した遺跡を見ると、弥生時代では東方の月隈丘陵上に位置する宝満尾遺跡（弥生時代後期前半？）、大谷遺跡（弥生時代中期後半～後期）や、同じく東方の沖積微高地上に位置する大野城市仲島遺跡、さらに南西の丘陵上に春日市須玖岡本遺跡があり、古墳時代では西方の那珂八幡前方後円墳、老司前方後円墳、日佐原遺跡、東方月隈丘陵上の天神森古墳などがある。また、南西の野多目前田遺跡では古代の溝から雲雷文内行花文鏡が出土しており、当遺跡はこれら青銅鏡出土遺跡では最も北に位置している。このうち墳墓以外の遺構から出土した例として、仲島遺跡、野多目前田遺跡が挙げられるが、鏡と出土遺構との関連性が薄く、本来どのような遺構に伴っていたか判然としない。これまで、破鏡については、その出自や目的についての様々な解釈が説かれており、また、近年発掘による出土例が増加したことにより、その出土状況に複雑な地域差のあることが指摘されており[註]、東那珂遺跡出土鏡の位置付けについては、今後の周辺での発掘資料の蓄積を待ちたい。

4．古代の東那珂遺跡

検出遺構について

検出した主な遺構は、道路状遺構１、溝状遺構、井戸２、土坑８、木棺墓１、掘立柱建物６である。これらは調査区の西半分を流れる河川の東岸に位置しており、川べりの集落と言える。遺構はほとんど切り合いがなく、木棺墓SK－30と土坑SK－04を除き、時期を特定できる遺構の大半が８世紀後半に属する。SK－30とSK－04からは９世紀前半の土器が出土しており、集落の廃棄直後に造られたものと思われる。

検出遺構のうち最も特色あるものは道路状遺構であろう。削平により路面は失われているが、ほぼ磁北に向かって２本の溝が平行して掘られており、他の遺構は全く重複していない。道路幅は0.8～2.7ｍと極めて狭く、集落の中を通る生活用の言わば里道的な道路ではなかったかと考えられる。

井戸のうち１基には方形木組の井戸筒を持つものがある。当遺跡の南東3.2㎞に位置する井相田Ｃ遺跡２次調査でも方形木枠を持つ井戸が検出され、井戸内より木簡、墨書土器、塩壺が出土している。井相田Ｃ遺跡例は、径３ｍの円形の掘り方基底面のやや西に偏した位置に４柱を立て、柱に設けた溝に板材を差し込んで４面を構築したものである。これに対し、当遺跡検出例は長径2.5ｍの掘り方基底面の北に偏して木棒で枠を作り、これに接して板を立て四面を構築したものであり、井相田例に比べやや簡略な造りである印象を受けるが、これは両者の集落の質を反映しているのであろうか。

掘立柱建物は６棟を復元したが、他に柱根を持つ多数の柱穴が建物に復元できないまま残されてしまい、復元作業の不十分さを痛感している。復元できた建物のうち、SB－20、51、52は主軸方位が等しく、全て道路状遺構の東に配列されており、道路状遺構と同時期と見てよいであろう。また、SB－51、52は南北に並ぶ倉庫と考えられ、柱材に同じ樹種を用いている。

遺跡の性格について

調査地は那珂郡と席田郡の境に位置し、御笠川の東岸であるという地形を考えれば席田郡に属するが、『筑前国続風土記』によれば席田郡は「御笠郡那珂郡と糟屋郡との間にはさまり、國中にて最小なる郡也。只八村あり。八村皆東の山の麓に在て、南北につらなれり。（中略）席田郡は甚小にして、那珂糟屋御笠につつけり。地勢を見れは、分へき所に非す。され共右三郡何れも大也。若し其上に又席田郡にある所の戸數を加へは、千戸に過なん事をおそれて。戸數すくなけれとも、別に此郡をわかちたるならん。其故に此郡は甚小なるへし。」とあり、この状況を考えれば、那珂郡那珂郷に属していたとも考えられる。福岡平野の主な古代の遺跡と東那珂遺跡との位置関係は、鴻臚館跡が西北西5.2㎞、博多遺跡群が北東3.5㎞、井相田Ｃ遺跡が南東3.2㎞、三宅廃寺が南南西2.8㎞、高畑廃寺が南東2.1㎞、そして都府楼が南東10.2㎞であり、当遺跡は、博多遺跡群と井相田Ｃ遺跡群を直線で結んだほぼ中間に位置している。また、西～南西0.5㎞に位置する那珂・比恵遺跡群では那津官家と見られる倉庫群を主体とする６～７世紀の遺構群や郡衙の可能性がある７～８世紀の区画溝が確認されている。当遺跡はこれらの官衙的色彩を持つ集落の境界域にあり、かつ郡境に位置し、墨書土器、輸入陶磁器などを保有しながらも、極く短期のうちにその役割を終えた特異な集落と言える。

５．中世以降の東那珂遺跡

中世水田は一部で畦畔を確認したが、他では水田面の残りが悪かった。調査区全域を覆う古代の包含層は中世の水田造営の際に形成された可能性が強く、中世水田は調査区の全域に広がっていたものと考えられる。また、２次調査地点でも水田に伴うと見られる中世の水路跡が検出されており、東那珂遺跡をふくめた周辺一帯は中世には広く水田となっていたものと思われる。水田の造営時期は明確でないが、出土土器から見て、13世紀前後ではあるまいか。

註　藤丸詔八朗「破鏡の出現に関する一考察－北部九州を中心にして」『古代化談叢第30集』 1993

PLATES
(図　　版)

Ⅰ区全景（上空から）

Ⅱ区全景（上空から）

1．Ⅰ区北半部（上空から）

2．Ⅰ区南半部（上空から）

1．Ⅱ区全景（南上空から）

2．Ⅱ区全景（南西から）

1．SC－01（東から）

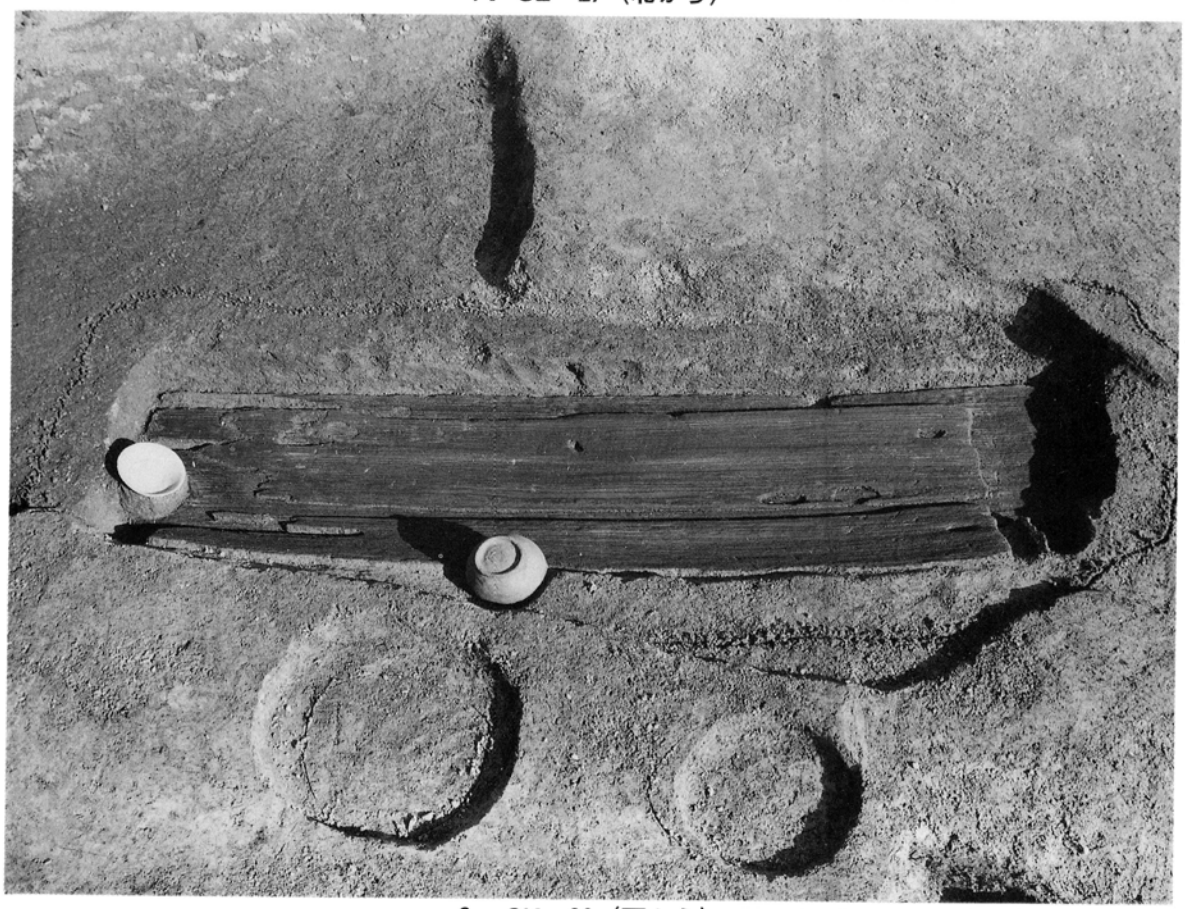
2．SC－01破鏡出土状況

3．SC－01破鏡出土状況近景

1．SE－35（西から）

2．SE－35（南から）

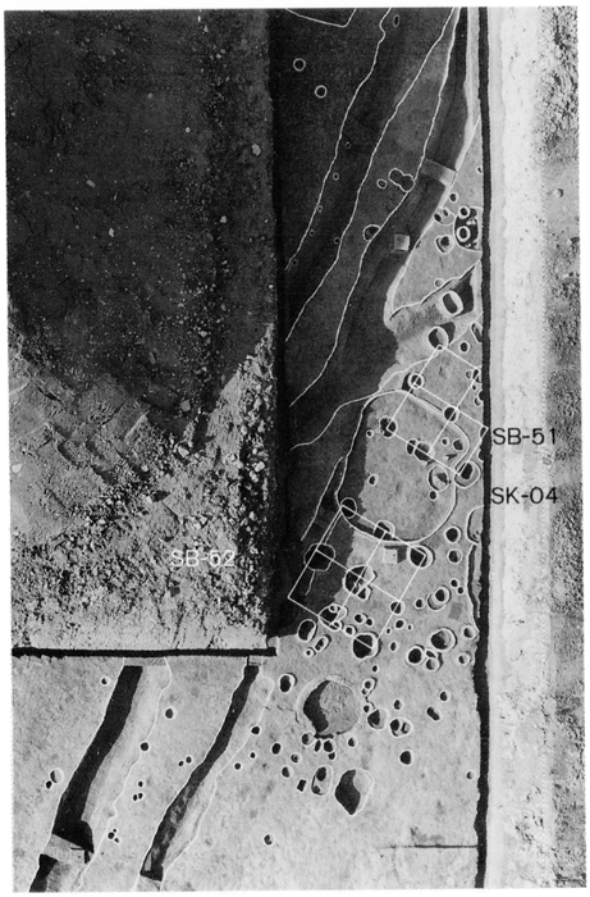
1．SE－27（北から）



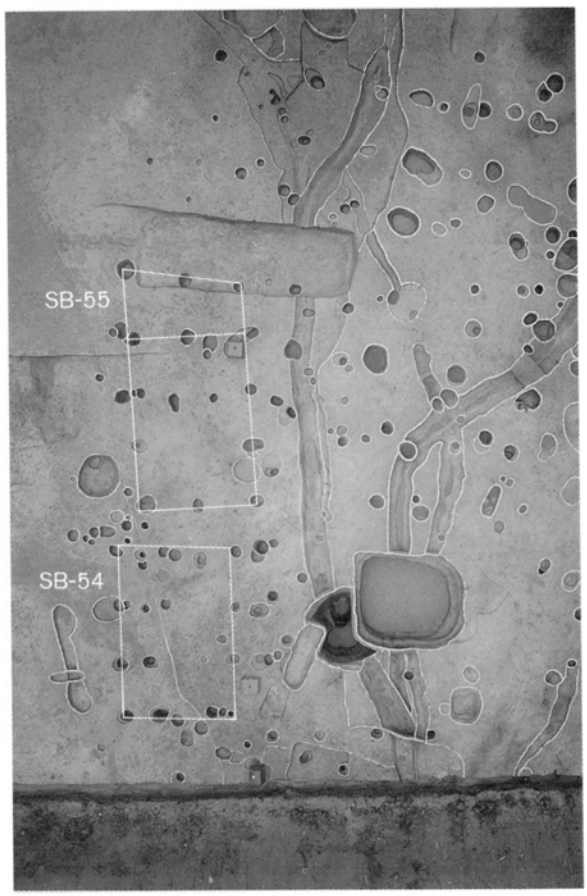
2．SK－30（西から）

1. SB—20

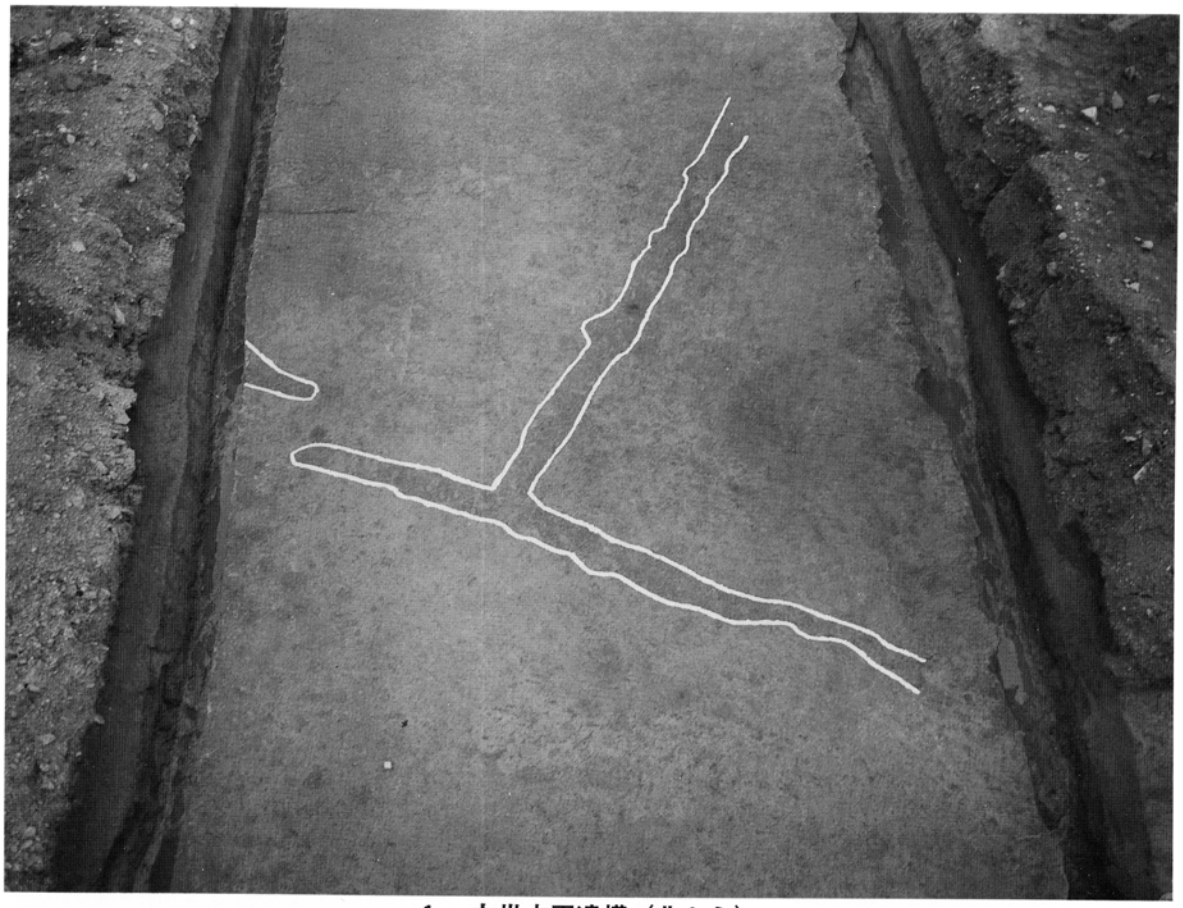
2. SB—26



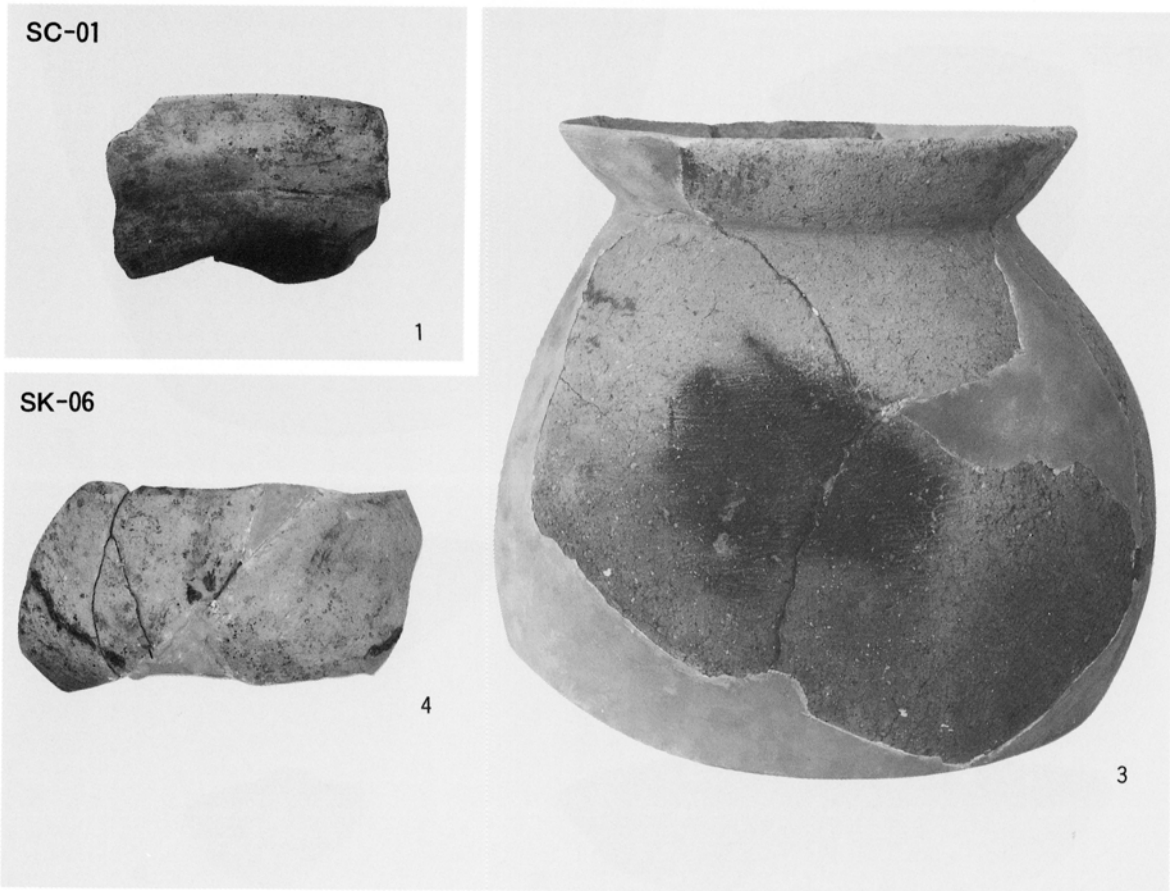
3. SK—04、SB—51・52



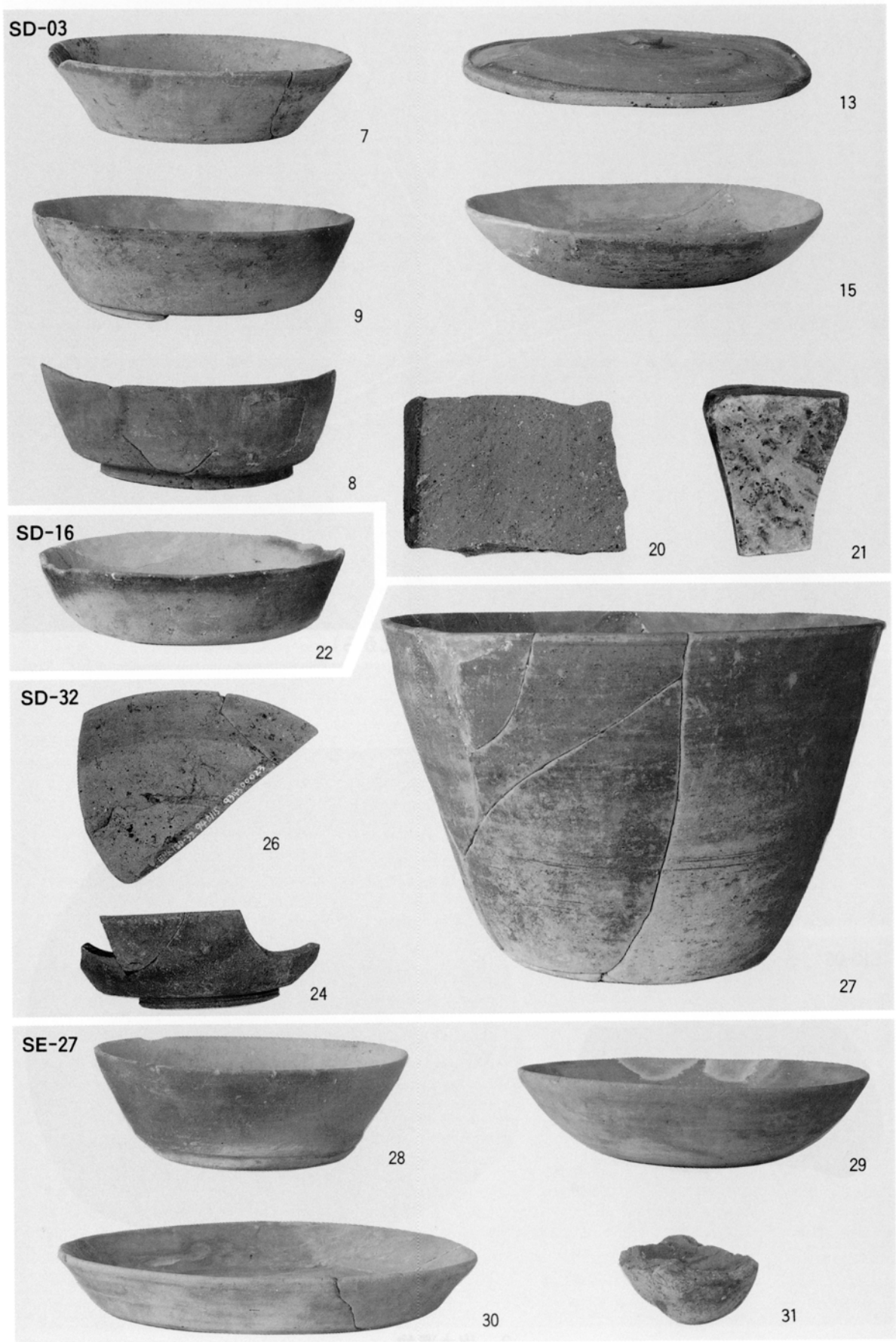
4. SB—54・55



1．中世水田遺構（北から）



2．出土遺物

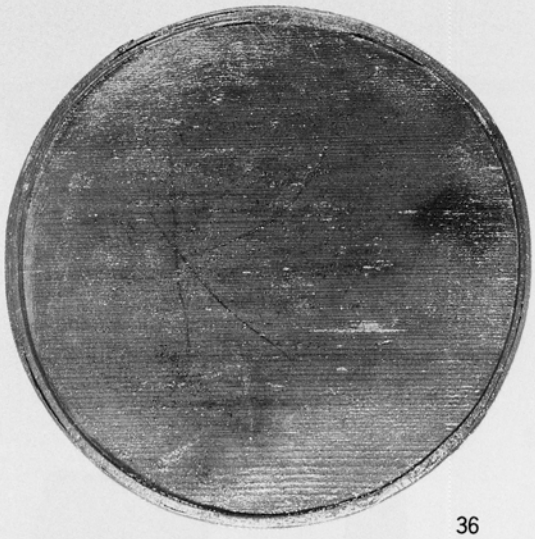


出土遺物

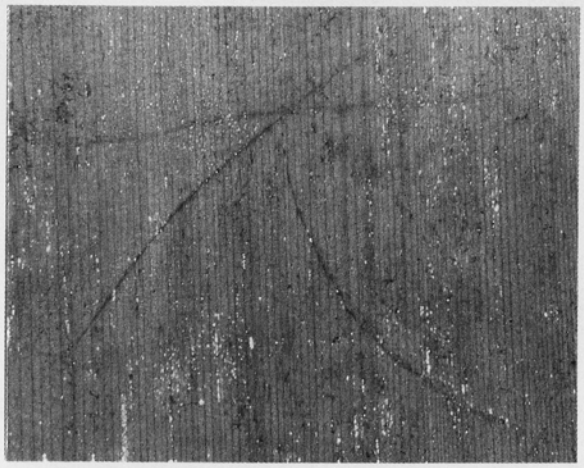
SE-35

35

32



36



SK-04

42

43

45

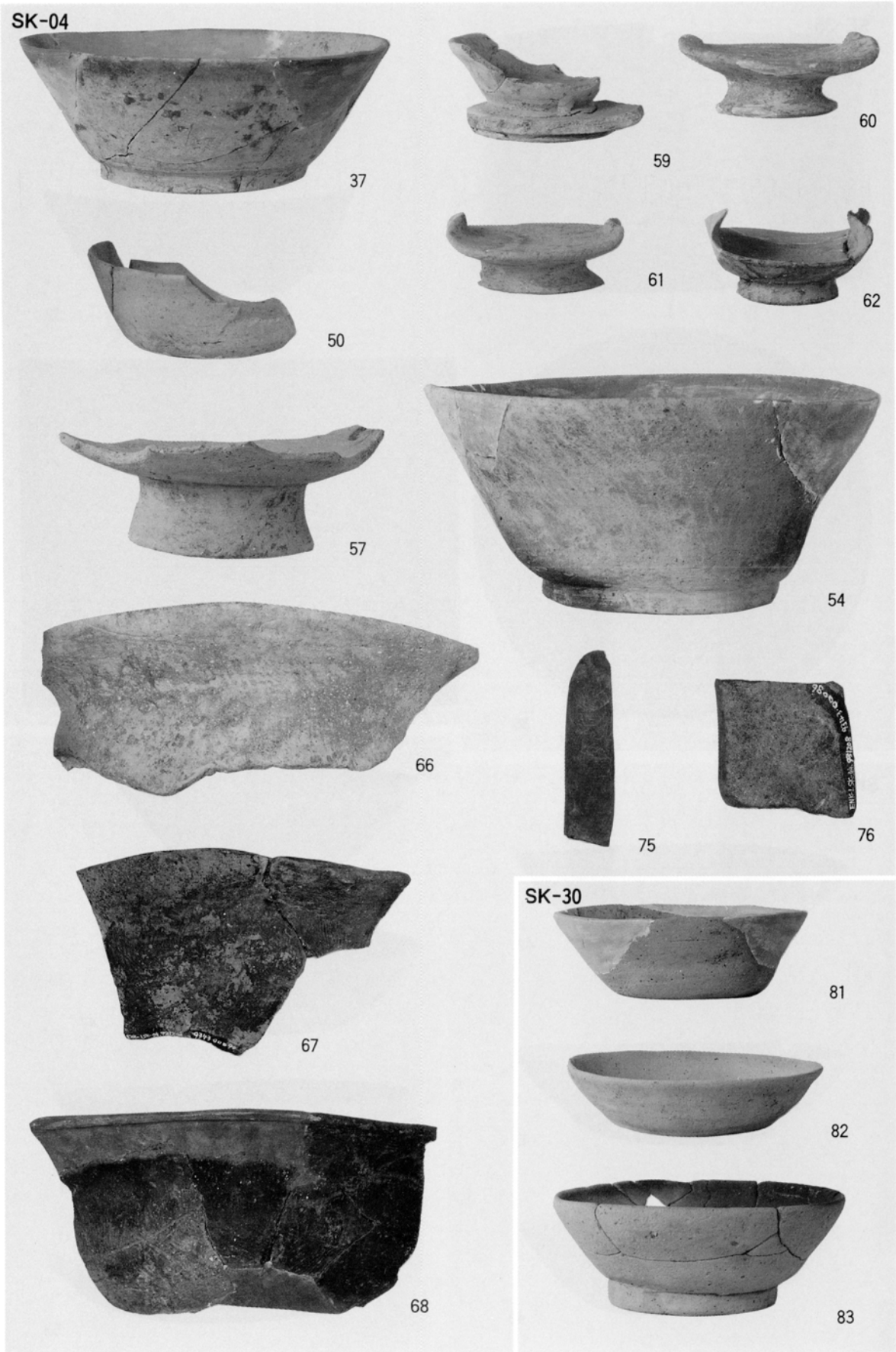
46

47

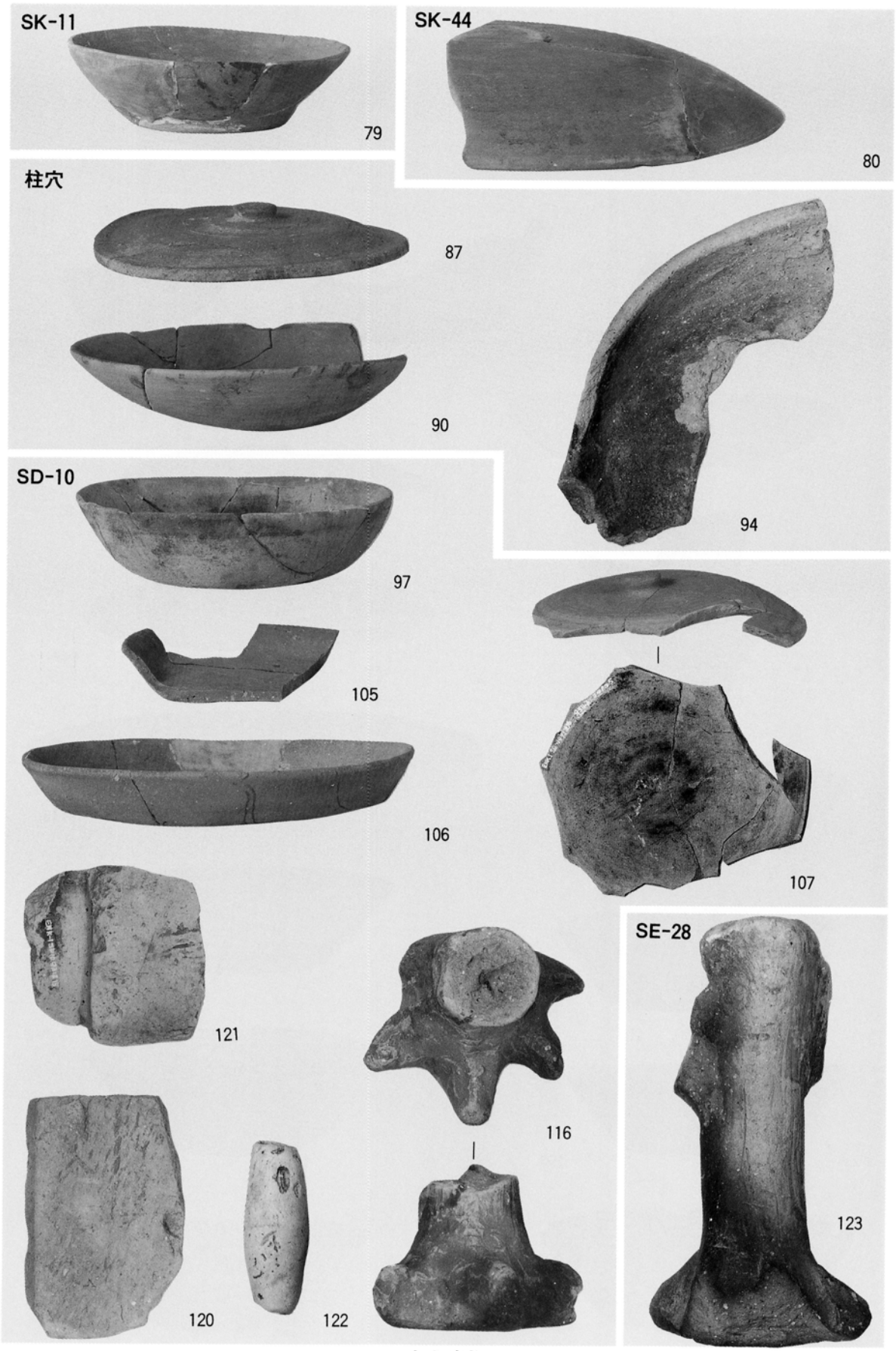
48

53

出土遺物



出土遺物


SK-11
79
SK-44
80
柱穴
87
90
94
SD-10
97
105
106
107
121
116
120
122
SE-28
123

出土遺物

包含層

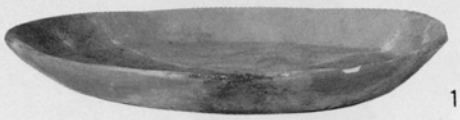
127

139

136

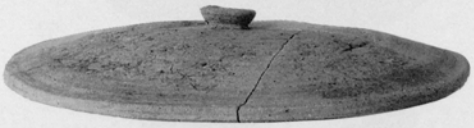
138

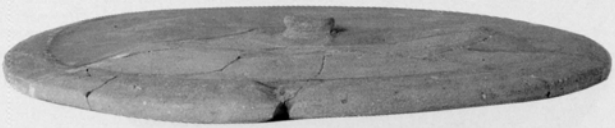
144

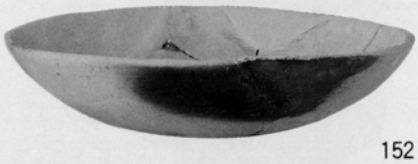

141

146

151


147


148

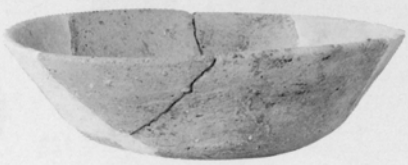

152

155

154

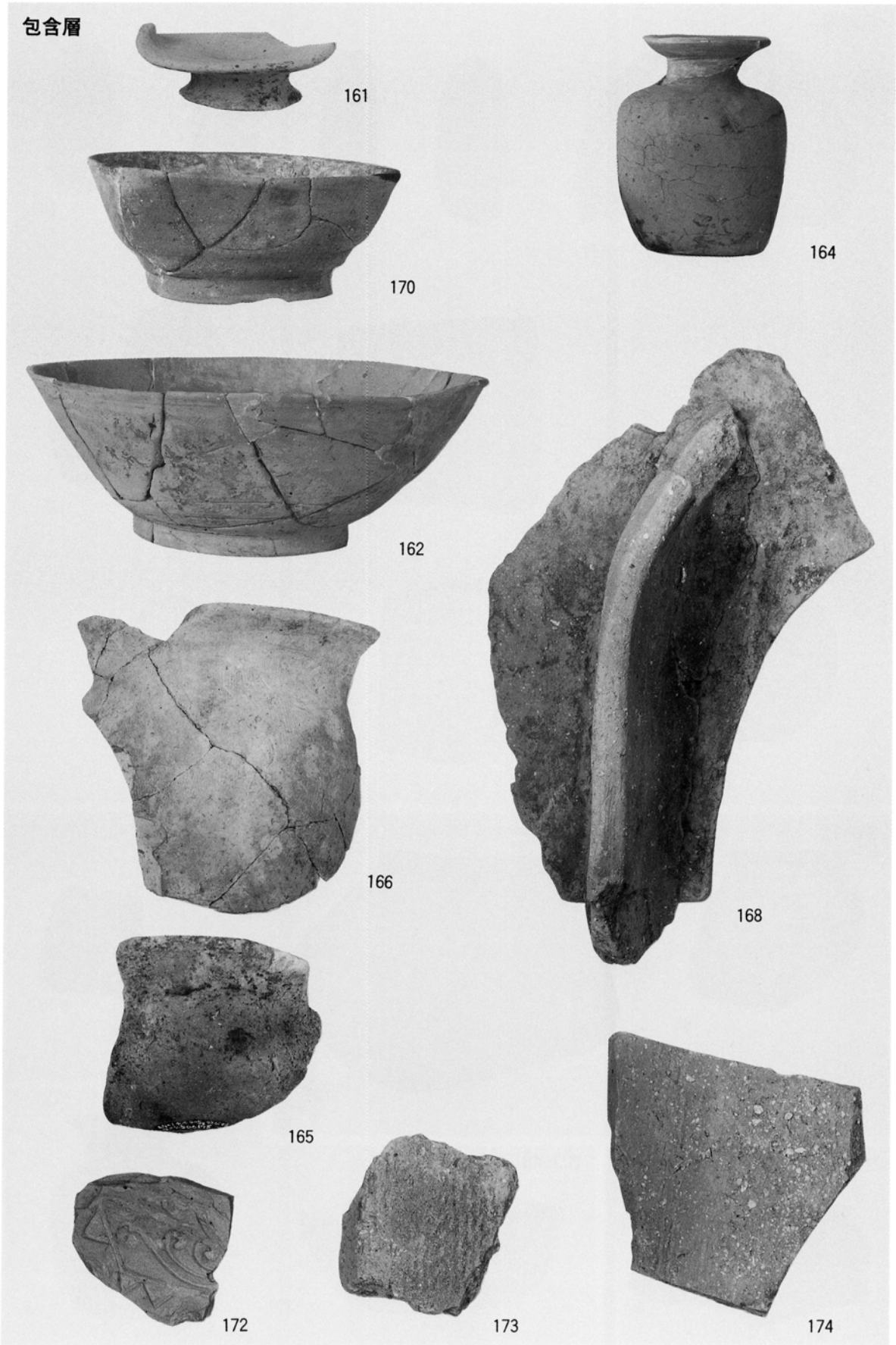
158

157


160

159

出土遺物



出土遺物

包含層

194

180

181

182

183

175

176

179

177

178

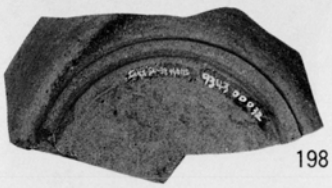
SD-18

195

196

197

SK-39

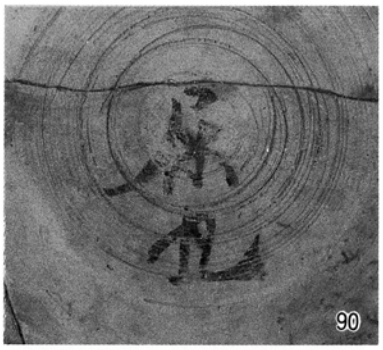

198

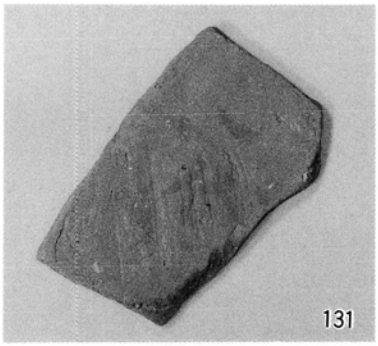
SD-48

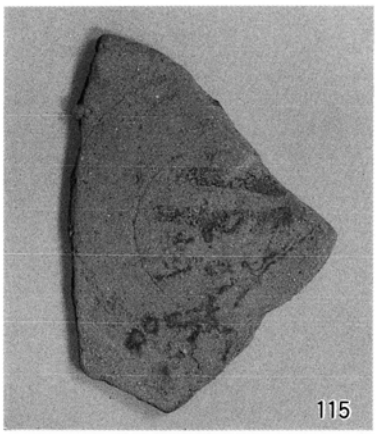
202

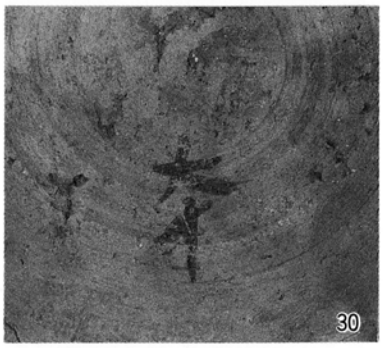
204

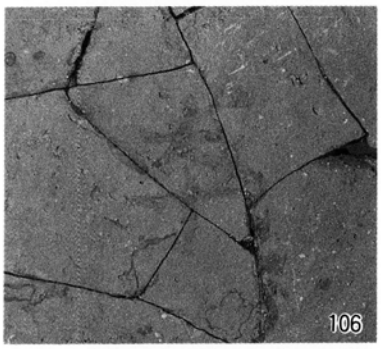
出土遺物

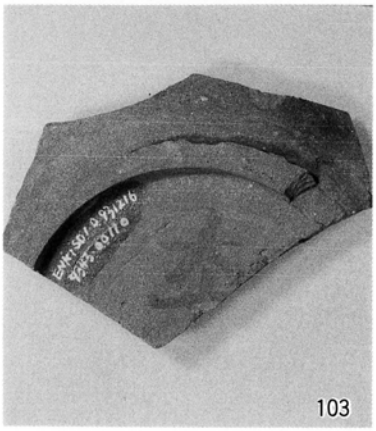


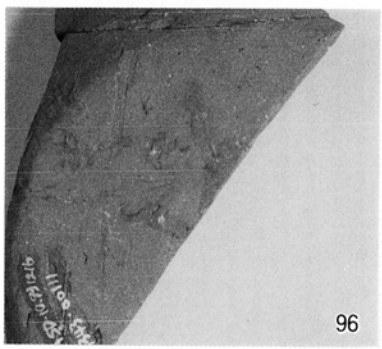


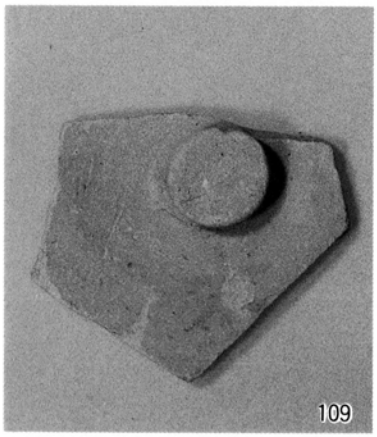


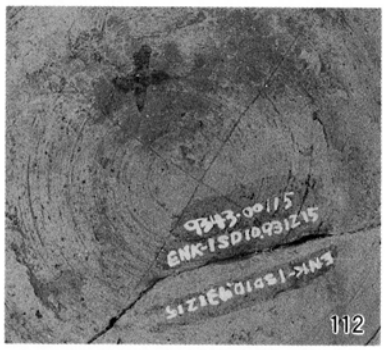


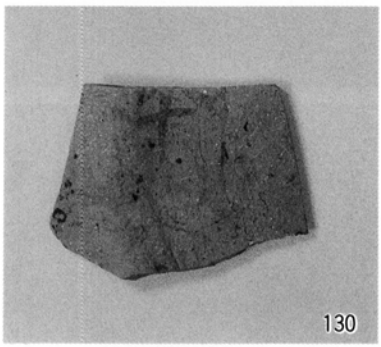


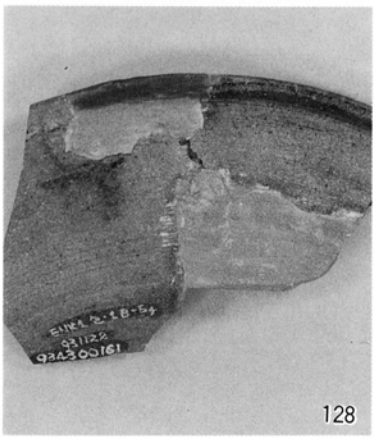


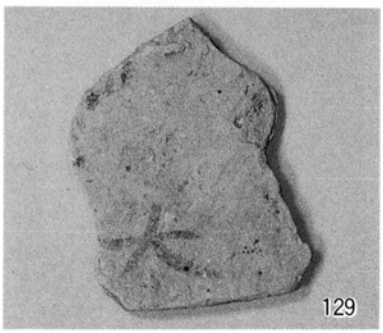


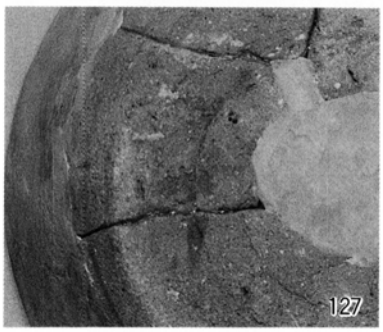




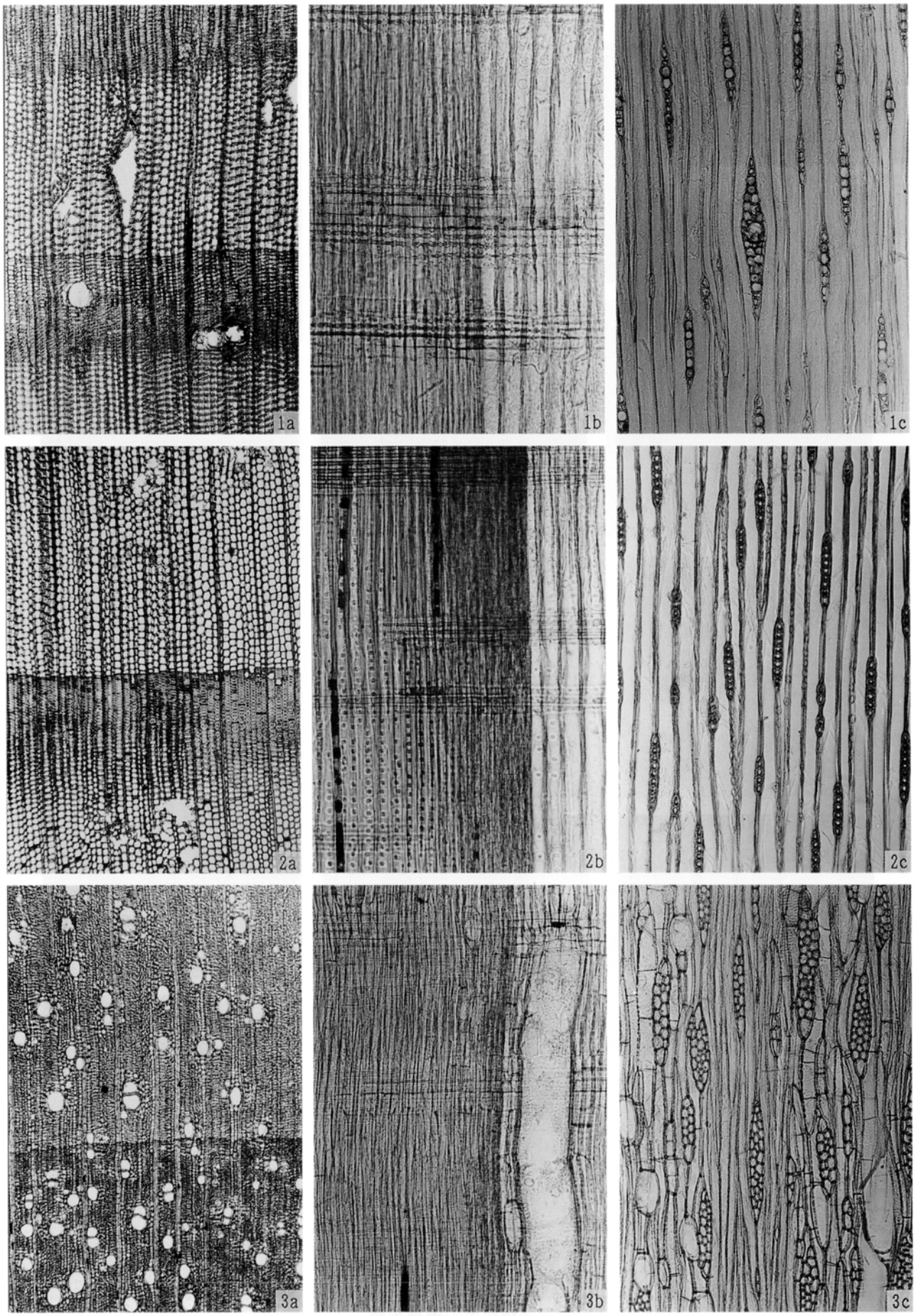








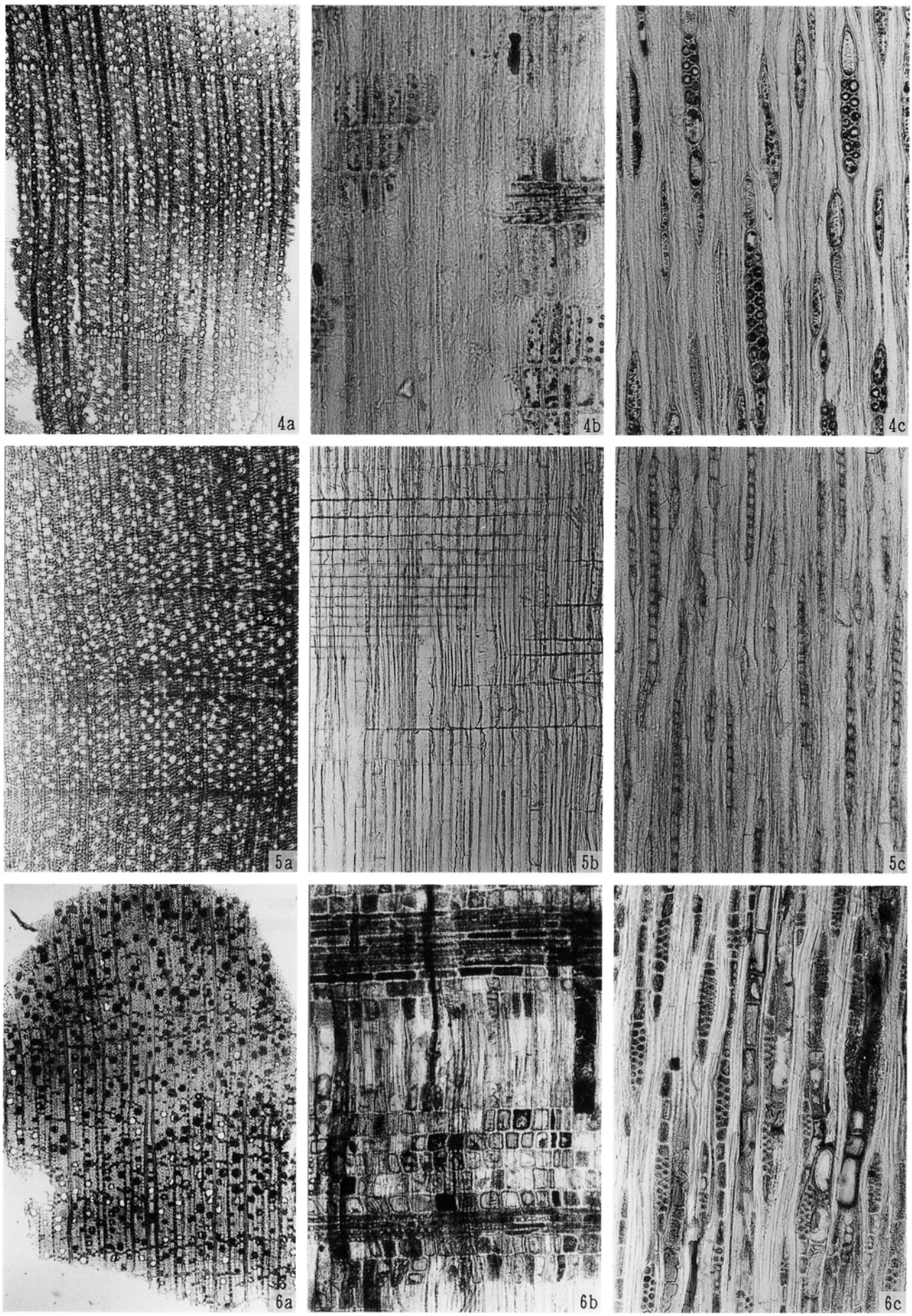
各遺構出土の墨書土器



材の顕微鏡写真(1)

1．マツ属複維管束亜属（No. 23）
2．スギ（No. 4）
3．クスノキ（No. 7）
　a：木口，b：柾目，c：板目

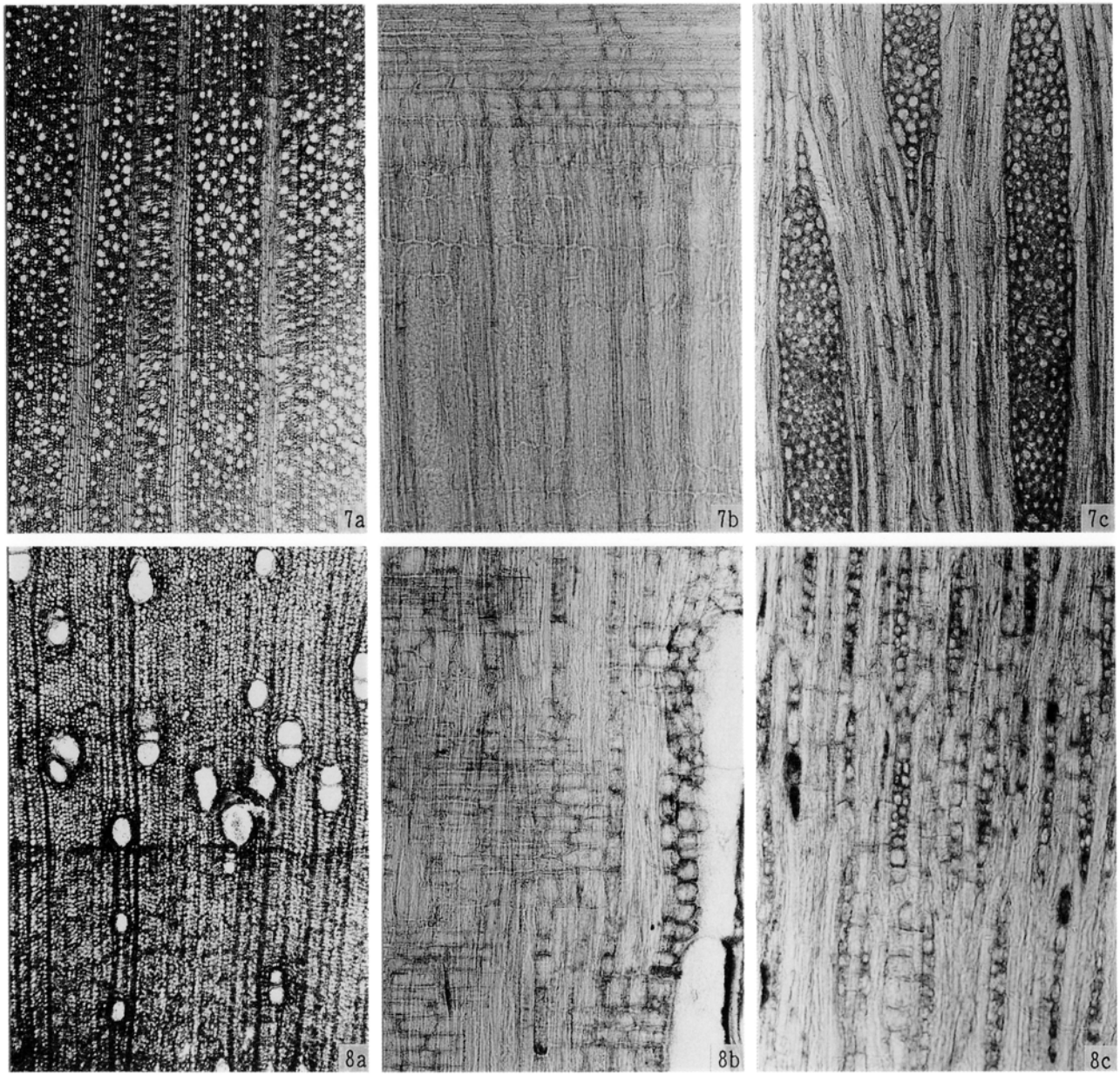
200 μm：a
200 μm：b，c



材の顕微鏡写真(2)

4．シキミ（No. 12）
5．サカキ（No. 1）
6．イスノキ（No. 21）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c



7．モチノキ属（No. 16）
8．カキノキ（No.17）
　a：木口，b：柾目，c：板目

材の顕微鏡写真(3)

200 μm：a
200 μm：b，c

福岡市

東那珂遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第400集

1995. 3. 31

発 行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印 刷　博巧印刷株式会社
福岡市南区那の川1－9－7